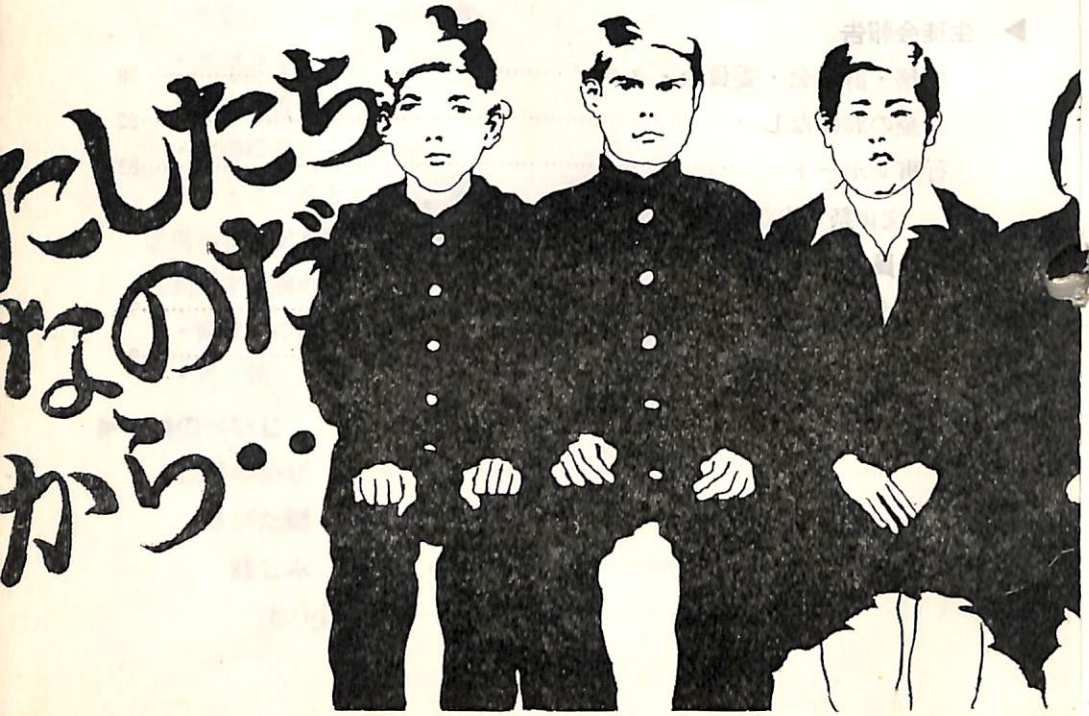
LE COEUR

17

わくわく



郡立桜原高校図書館蔵書

――表紙の言葉――

原画5～6枚の中から何のおもしろみももたない1枚が選ばれました。委員会の方で〝本号には一番ぴったり〟ということで。そこに気さくなあいであ。

あなたの手にあるのは白，黒？
そんな先のことを考え苦笑いした委員長の前で仕上げされた表紙なんです。

――村井　竜――

目　次　——17号——

▶ 巻　頭　言 …… 4

▶ ル・クールに寄せて　校長 …… 6

▶ 松高３６５日 …… 9

▶ 特　　集 …… 10

無気力病の処方箋は自己の内に

①生徒会なんか無くたっていいじゃないか

・報告記「後期第一回生徒総会」

・座談会 〝つぶせ！生徒会〟

・スポットインタビュー

・松高と松高生

・沈滞松高から発展松高へ

・ル・クールとしての見解

②掲示物・配布物の管理は生徒会の手で

③満20才未満の政治活動おことわり

・高校生の政治活動

・対　談　　校長—編集委員会

▶ 詩のぺいじ

12月のかぜ …… 38

さびた鍵 …… 40

悲しみ　　人生 …… 41

渚の少女 …… 57

▶ 創作のぺいじ

ひとりごと …… 42

シンナー遊びについて …… 43

幻想なのかそうでないのか解らない …… 44

34億人の問題『戦　争』 …… 45

『拝啓自治委員長殿』 …… 48

リレー紀行　甲斐駒登山 …… 50

▶ 生徒会報告

総務・評議会・委員会・クラブ …… 58

お金のおはなし …… 82

行事レポート …… 83

文化祭・体育祭・弁論大会

▶ 編集委員会のぺいじ

大長編編集物語 …… 93

編　集　後　期 …… 96

巻頭言

若者よ！仲間よ！

ル・クール編集委員会

ちまたでは、学生運動、宇宙開発が世をわかし、ANPOの話題も頻繁にながれはじめころは昭和元禄いざなぎ景気。

しかし、我松高にはそんなことはちっとも影響しない。何がおころうと全々反応がない。それはそうだろう。学校内部のことにだって、全々反応しないのに、ましてやカベのむこうのことなどに反応を示すはずがない。

しかし、いつまでもしかたがないといっていて、このままの状態でいてよいのだろうか。もちろん、よいはずがない。二十一世紀をしょってたつ若者が、こんなことでよいわけがない。

都立松原高校図書館蔵書

では、なぜこの様な状態になってしまったのだろうか。

それは、生徒一人々々が古い堅いカラの中にとじこもってしまって〝自分さえよければよい〟と、いう〝利己主義〟の考えと〝ことなかれ主義〟との考えから、生じてしまったのだろう。

しかし、我ら若者はそれを打破し、前進する義務を持ち、そしてそれを特権とするのだ。

若者よ！　仲間よ！

今こそ我々は〝新たな勇気〟を持ち、歩みはじめなければならないのだ。

みんなで行くんだ　苦しみを分けあって
さらばモヤモヤよ　ちっぽけな夢よ明日よ
いま　青春の河を越え
青年は青年は　荒野をめざす

「ル・クール」に寄せて

校長　鈴木雄四郎

川端康成さんの文学が、インドのタゴールについで、アジアにおける二人目のノーベル授賞者となったことは、誠にうれしいことであり、日本人は勿論、多くの世界の人びとから祝福されている。

日本人の心の精髄を表現して、東洋と西洋の精心文化のかけ橋になったというのが、授賞の主な理由とされている。誠に喜ばしいことである。川端さんのノーベル賞の記念講演、「美しい日本の私」は紙上にも報道されているが、われわれ日本人は、「日本人の美」を教えられたかの感じを、私たちは強く印象づけられたのである。

この時、「ル・クール」に接するにつけ、「ル・クール」という名に強くひきつけられるのである。創刊時代、その名づけにあたり、どのように苦心し、そしてどのように考えぬいたかが思いやられて、何となくゆかしく、情味が溢れ、そこに流れる人間の心の暖かさ、豊かさを感じとることができる。

「ル・クール」という名は、創刊のその趣旨を受けつぎ、第十七号を数えるようになったのであるが、その時代、その時代の特色を生かし、その時における生徒同志の心のふれあいが、時を重ねる毎に深まり、さらに将来への使命をも包含しているものと思う。換言すれば、過去、現在、未来へと松原高校の生徒会を象徴しているのが、「ル・クール」であるとも考えられる。

川端さんは自分の文学がノーベル賞をもって、むくいられた理由として、三つの「お陰」があったと語られている。その一つは、「日本の伝統」であり、自分はそれを書いただけだと申しておる。

今、この言葉を借りると、これまでの生徒たち、いわば諸君の先輩たちは、「ル・クール」の名にふさわしく、努力し、これをもり育ててきたのである。これを通して、そこに心の流れが脈々と続いてきていると思う。

それ故にこそ、さらにその名にふさわしい内容の充実と進展をめざす努力を、一人ひとりの生徒諸君に期待するものである。

私は第十六号に未来学についてふれておいたが、学校教育も、この立場に立って、論ぜられることであろう。

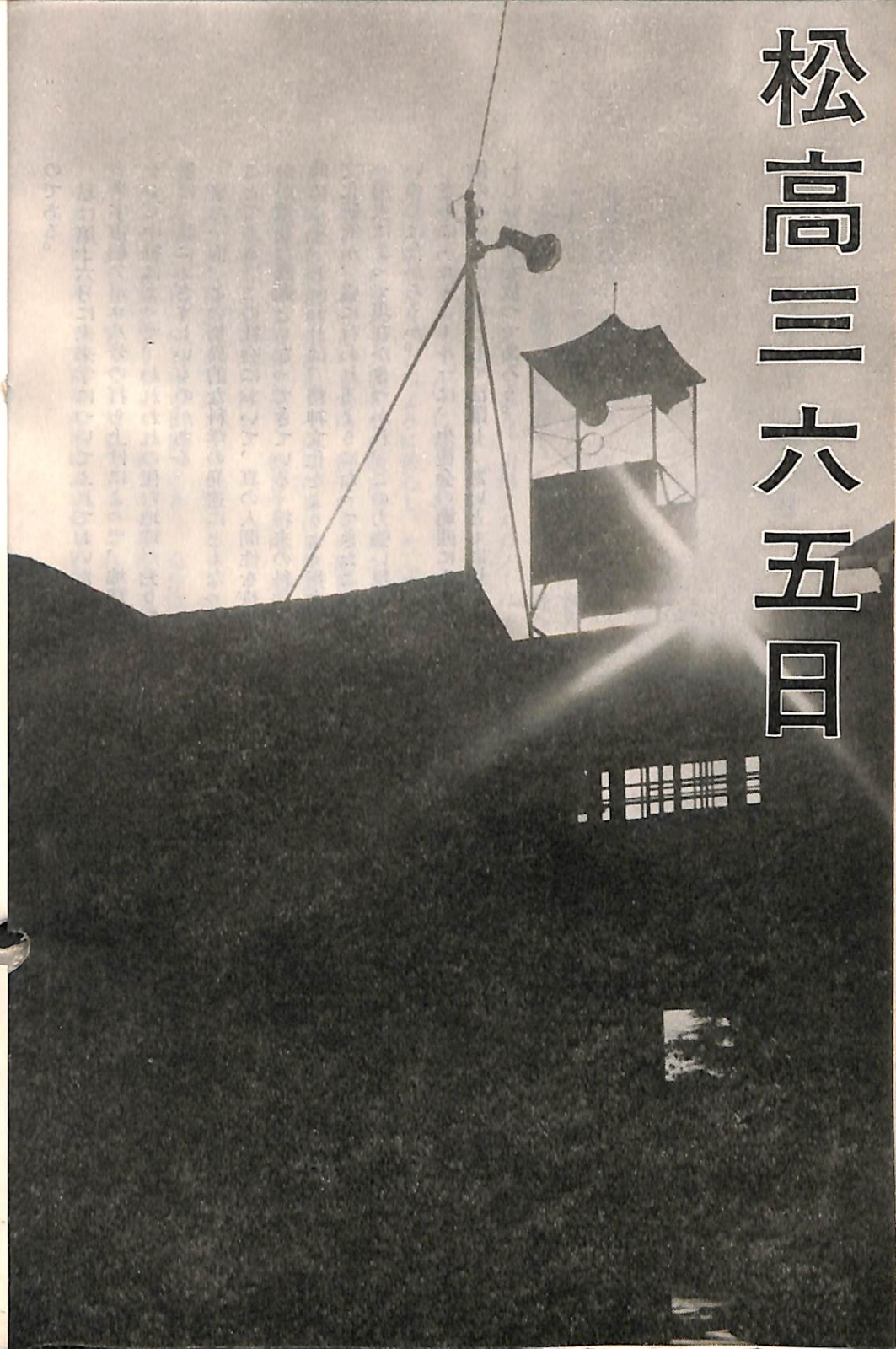
米宇宙船アポロ八号の打ち上げによって、地球から月への道のりの、二十二万粁の地点のアポロ八号から地球へのテレビ中継によって、われわれの住む地球が光り輝く「火の玉」として写し出されていたが、最近、科学・技術の進展は、誠にめざましいものがある。

また一面、この驚異的な科学の発達にともなって、ますます人間が疎外されつつある傾向も見逃すことのできないことである。この社会において、真の人間性を恢復し、さらにこれを発揮するためには、どのような対策をとるべきかが重要な課題ともなってきている。将来の科学、物質文化の夢が、多くの人によって語られているが、このような時にこそ、われわれは、精神文化をよりよく指向し、それへの期待を強めるべきではなかろうか。今日、東洋の精神文化研究が、盛に行われるようになってきたことも、その一端を示すものであろう。

過去によって現在がきづかれ、この力強い現実の基盤から「ル・クール」にも未来に対する期待、夢も描かれてよいのではなかろうか。

さらに「ル・クール」は、生徒会の範囲にとどまらず、生徒の主体性を堅持しつつも、教職員も含めた松原高校全体の心の交流の場として活躍し、あいともに切磋琢磨し合える機会ともなるならば、「ル・クール」は、さらにかぐわしい香りを放つであろう。

松高三六五日



四十三年

四月
八日　始業式
九日　入学式
十日　オリエンテーション
十三日　新入生歓迎会
二十七日　映画会（七人の侍）

五月
一日　一回実力テスト
二日　球技大会始まる
十日　遠足　一年　富士山
二年　大島　三年　鎌倉
二十八日～三十一日　中間考査

六月
二十二日　弁論大論・全定交流会
二十六日　生徒総会

七月
九日～十二日　期末考査
十三日　歌舞伎教室
二十日　終業式

八月
十五日　登校日
夏期講習・水泳教室
クラブ活動合宿

九月
二日　始業式
三日　二回実力テスト
十七日　後期生徒会役員選挙
二十二日　文化祭
二十三日
二十九日　体育祭

十月
四日　生徒総会
七日～十二日　二年生修学旅行
二十四日～二十八日　中間考査

十一月
十一日　開校記念日
十三日　講演会「生活と音楽」
生徒総会
二十七日　生徒総会

十二月
四日　マラソン大会
十三日～十七日　期末考査
二十五日　終業式
二十六日～三十日　スキー教室

一月
八日　始業式

二月
一日～五日　三回一・二年実力テスト
三年学年末考査
二十日　都立学力入試

三月
十日～十四日　一・二年学年末考査
十六日　卒業式
二十五日　終業式

病気の処方箋は自己の内に

無のは内

長めのプロローグ

ぼくは、ときどき「なぜ学校へ行くんだろう」と考えることがあります。毎日の授業がつまらなく、楽しくないのです。学ぶことは、ある時は楽しく、ある時は苦しいものでしょう。でも、いまの勉強は、ただ頭に詰めこむだけなのです。それが試験の日限りで、後はさっぱりという状態。もちろん後で復習することが勉強なのですが、何か勉強することに、むなしさのようなものを感じます。

現在の授業は、盛りだくさんに教えすぎていると思います。他にも創造的能力を高めたり、思考力、判断力をつけ、感覚をみがいたりする力を養う必要があると思います。われわれは思いきり空想や創造の世界を飛び回り、いろんなことをやりたいのです。ところが、何かを考えようと思うと、その芽を摘み取っていく力が、学校や社会に働いているのです。だから、われわれの中には、いつの間にか学校に盲従し、社会に順応するだけの人がたくさんいると思う。

学校行事も毎年、同じようで形式的で、つまらなく終っている。この原因は、生徒が無気力で無感動の日々を送ることにあります。このような生徒が大勢できる一因は、学校にあると思います。学校は、校則、規律という統制の中で、教師が生徒を圧制している。少しでも反撥したり、忠実でないと、すぐチェックされる。結局、何かを考えても制約を感じて「どうせだめなんだ」という考えがあり、何もやらない者が往々にしてあると思います。

また、人並みの運動ができない者、問題を解けない者らを邪魔者、あるいは厄介者にして「できる者」だけを伸ばすことが、学校の本質でしょうか。勉強する者の層は、厚く広いことが大事と思います。同じ月謝を払っているのに、できる者だけの場とするのはよくない。できない者は差別されていることになる。そのため、ある者は自信を失い、怠情で反抗的になる者が出てきます。かりに一人の脱落者がいたら、これを学校から追放するのではなく、みんなでその人のことを考えていくところがあってほしい。

今日の学校、教師、生徒には、個性とか独自性が失われ、画一化され、形式的なものに甘え、流されてくるままに流される状態ではないか。学校は学校の名誉のためにあるのではなく、生徒のためにあるのでなければならないと思う。そして学習することが、うれしくてしょうがないという学校を、みんなでつくろうではないか。　鶴岡市　斉藤　雅泰（高校生　17才）　朝日新聞43年11月12日朝刊

この朝日の投書に関しては私達は説明を加えない。

「無気力病の処方箋は自己の内に」なぞと大見得切った演題を掲げてしまったわけだが今、現在私達は何かを言わねばならぬという必要性を感じているので、私達の無知、無能、年令的未熟さを知りつつもあえて、一つの主張に踏みきったわけなのだ。そこで、その何かを言わねばならぬという必要性とは、いかなるものなのか？　それは漠然とした危機感である。「このままじゃいけない。」といった意識である。この危機感自体については理論的説明の必要はない。なぜなら私達はその危機感というものを肉体で感じているのだからだ。もし私達が特異体質とかいった、常人並みの肉体とはちがった肉体をしているのなら、私達の主張を公的な場に持ち込むことはできない。しかしどうやら現代に危機を感じているのは私達ばかりではなく大勢いるようだから、私達も常人並みの肉体であるというわけだ。であるならば、少くともこの危機感というものだけは社会的に真実であるといえる。

そこで私達はその危機感というものから逃れるためではなく、その危機感というものに対して考え、行為するために今回の特集なるものを組んだのである。

表現するにあたってまず困ったことは私達の知識の貧困ということである。それを表すべく読書的知識がまるでないということである。それも社会的に真実なのだ。であるから読者諸君は寛大なる精神を持って先を読んでいただきたい。お願いしておく。

さてその「肉体で感ずる危機感」ではあるが、それを考えていくには自分自身の感じ方をよく見つめてみる以外にスベはないだろう。それに、おそらくこのように巨大化した社会においては、自己の内面に社会構造というものがいちばんよく反映しているものである。——井戸をのぞき込んだら、そこに社会のからくりが映っていた——ということである。そして私達が危機感を持っているということは、社会が危機に瀕しているということである。ただ残念なことに私達はその危機感というものを完全につかまえることができないのだ。それが人間というものの当然であるのだろうか。それともすでに私達は社会の害毒にドクサレテイルのだろうか。その問題は私達がいくら歴史を学ぼうとも、死んでも解けないのである。

豊富な物質、豊かな暮し。私達はそれらを喜こんで、ある人はアリガタイと言って受け入れた。ゆえに私達は物質的に幸せである。

——平和デアル——

——自由デアル——

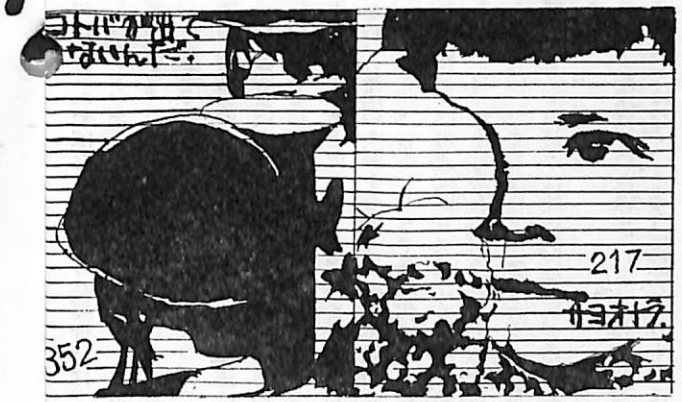
しかし街を歩るく人はどの人も、いら立たしいといった顔をしている。笑顔にもなぜかむなしさがこもっているではないか。

唐突にとてつもない恐怖におそわれることがある。自分の存在が逆立ちしてしまって、自己の内のすべてが消し飛んでしまうといった感じだ。その時わかっていることといえば〈こわい〉ということだけである。それは死の恐怖だろうか？　もしその恐怖の意識を自己の内に固定化することができるならば、私達は無気力からおさらばすることができるかもしれない。

白けきった教室、うつろなコトバ——ある者はすでに物質化している。そんな者等が、ふぬけた顔で倫理的なる、あるいは正義の使者月光仮面的なリロンをのたまわって社会を動かす。その影には現代風なひそやかなエゴイズムが隠蔽されている。しかしながらそんな者もそうでない者も淋しく孤立している。人間が人間の造った社会というものに疎外されている。社会というものはこんな簡単な言い方では済まないものだと言っておこられてしまうかもしれないが、なにせ知識が浅はかなものだからそこは許していただきたい。

私達は全人皆「情緒障害児」である。そうでない人間がいるならば、それは人間性を全て喪失したモノである。今は自分を見る時だ。愛せない、泣けない、怒れない、笑えない、そして欲情できない自分を見る時である。そうすることなしに「生徒会活動の活発化」など為せる技ではない。行為の空転はさらに現実社会との断層を深めるばかりである。

私達はそんな風なことをふまえながら、いくつかの問題にぶつかってみた。次の頁へどうぞ。



生徒会なんか無くたっていいじゃないか

最初のことば

我々が松高に入学するということは同時に、我々が松高生徒会会員となるということなのです。またそのことを極く自然に我々は受け取ってきたのですが。ここで我々の生徒会はなんのためにあるのか見なおす必要があるようです。現在多くの高校に生徒会という自治活動があるにもかかわらず、その自らの組織に対して、大なり小なり問題が起こっているのはなぜでしょう。その疑問に対処すべく我々も考えていきましょう。昭和四十三年度後期松高生徒会も相変わらずの

一、役員の不足　二、予算の不足　三、生徒自身の無関心さ

これら三問題をかかえて、再スタートをしたのでした。しかしその沈滞ムードにカンフル剤を注いだのは、そうです、生徒会の重大なる会合、後期第一回生徒会での某君の爆弾発言とも言うべき発言です。ただ停滞の中で実情を傍観していた松高も思わぬ発言にむしろ快さを感じたのでした。その内容はこうでした。「このようなだらけた生徒会ならばいっそつぶしてしまえばいい。」このような簡単な内容にもかかわらず、われわれの胸の中にかくされていた一言だったためか強い感動がつたわったのです。でも我々が考えるべきこととしてはついにこんなカンフル剤まで射たなければならなくなった松高生徒会なのです。難問をかかえた松高、そんな我が校をいまこそじっくりながめるときです。

僕ら松高の編集委員は愛する松高のため、読者の皆様の認識に少しでも役立ちたくペンをとったのです。皆さん自分の学校を内面からでも美しくしていきましょう。特集「生徒会をつぶせ」をそんなふうな気持で読んでいただければ幸わせです。

報告記

「後期第一回生徒総会」

初めは開会さえ危ぶまれた総会でした。三年生自由参加。相変わらずの二年の無関心。盛り上がりのないスタートでした。ガヤガヤと無意味な会話がほうぼうではてもなく続くのみでした。開会はされました。何となく。こんな開会でも某君の発言により本会の内容は一変したのでした。それが多くの者には突然と思われ、不思議と思われたでしょう。しかしこの突然あるいは不思議にはちゃんと考えがあるのです。それは、せっぱつまった心が大衆に思いもかけないことを言って、大衆に良識ある行動を望み、刺激を与えることなのです。つまりこれではいけない、でも、でも何をしたらいいのかそれがわからない。今の大学問題がこんなことなのかもしれません。結果的には大きな効果は得られなかったけれど、この総会を単なる総会にしなかったといえると、我々は信じるべきだと思うのです。とにかく総会ははじまったのです。

後期会長の所信表明も終えた、一般質疑の時でした。二年の或る二人の男がマイクに寄り何か訴えるようにこんなふうに言ったのでした。その意味はだいたいこんなものだったのです。

今の生徒会はなっていない。役員はひとりよがりの活動しかしていない。それで一般生徒がそっぽをむくのだ。生徒会というのはそんなものでない。もっと生徒の中にしみ込んだものであるはずだ。役員は言葉だけでなく実行に移すべきだ。こんなふうだから生徒との結びつきが無いといわれるのだ。」一人が強くそういうと、もう一人は続けてこう言ったのでした。「僕も同じ二年C組の代表だ。彼と似た意見を持っているのだけれど。押し詰めて行くと生徒会を無くしてしまえと思うのだ。生徒会、そんなものはいらない。たとえなくたってクラブをやれる。文化祭、体育祭、みんな先生方に計画立ててもらい生徒が動けばそれでいいと思うのだ、生徒会の必要性、それはどこにあるのでしょうか?」と、こうしてこの総会は揺れに揺れたのでした。残っていた諸々の計画（文化祭・体育祭のけっさん報告など）はみんな次回に延ばし、意見・要望が次々飛び出したのでした。そのなかには賛成の意を強く強調するもの、突飛で、意味がないと非難するもの、総会は完全に二分されたのでした。正直いってこのように熱のはいった総会は私どもにとって初めてのことでした。

座談会

「つぶせ?・生徒会」

●A君　どうしてああいうこと（第一回後期生徒総会における生徒会をつぶせと言ったこと）を言ったか言うとね、僕等一つのたくらみが……。実は二年C組の意見としたけど、二年C組全員の意見というわけじゃないんだ、或る人間といろいろ考えたんだけどね、今の生徒会をなんとか良くしょうとしてあんなふうに言ってしまったですけど、ほんとうはああしたくはなかったんだ。で、あんなふうに言ったのは生徒総会でなるべく多くの人間に生徒会というものを意識させたかったら。だからこそつぶせと言ったんだ。過激にね、あくまでも関心を向けさせるために。それで僕が言ったなかに、各H・Rに持ち帰って、具体的に言う前に、不必要かということを各H・Rで話してくれと言ったのです。でそうなると、この学校の連中ははっきり言って誠意のないのが多い、なかにはつぶした方がいいのじゃないかなんていう奴もいる。だから各H・Rでそのことが盛んに討論されるんじゃないかと思って、そこでみんながやっぱりあった方がいいんだっていうふうに向いてくれたら最高だ。だからわざとあの時強い勢いで、みんなに極端に意識してもらいたかったんだ。ところが実際は僕等の期待したようには、つまり最高のところにはもっていけなかったんだけど、まあまあの線まで行ったんだ、ところでみんなに頼みがあるんだけどね、ここにいる連中ね、あの、クラスでもしあのことに……あのとき動議は出たんでしたっけ?（可決したのよという声に）――じゃ絶対話し合うわけですね。じゃその時になったらH・Rを盛り立てて欲しいんだ。僕等が最終的に狙ったのは、生徒会の活発化なんだ。だから、H・Rでこれをなんとか機会としてみんなで、少しでも多くの人が発言するように、ものにして欲しい。もちろんね、あんなのつぶした方がいいって言う連中も、協議にかけてさ、それでその逆につぶしちゃだめだっていうふうになるようにね。そのへんの策はみんなに任せる。みんなのH・Rで動いて頼まれてくんないか。

●Aに対するある評

生徒会をつぶせなどと言うから彼は深い考えを、また信念のある考えを持っていると思

った。そこへもってA君がこの座談会で簡単に意見をひるがえし、またそれに対する弁解じみた言葉を次から次へとはくのには怒りさえ覚えた。彼の考えはアンチョクで、ものごとを簡単に考えているようにも思える。読者の諸君にいかなる批評があるか、またA君の意見が好きか嫌いか私にとっても興味深いことだ。このような一つの意味の浅い意見が現代人であってもあまりに反射的にすぎると思う。思いつきで彼が論を進めたという気さえする。私自身では生徒会をつぶすという意見そのものには多いに考える余地もあるし、つぶすことが確ずしも破壊主義にならないと考える。そこへもってA君は生徒の活発化を狙ったという理由をもってきたのです。理由自体は必要なことと思うがそれがつぶすという意味での事なら理解できるんですそれが逆を狙ったというのです。がっかりしました。考えて下さい。それほどにたった一言の意見でそれだけのことが通ずるでしょうか?とてもそれは疑問だと思う。しかし一部彼の発言にも効果があったこを認ざろう得ない点があると思う。それは総会というものへの感心が高くなったことそれに総会時確かにA君の発言に対して、われわれは快さを覚えたものです。それだけに最後の彼のどんでん返しはなにもかも意味をなくし、また0の段階に後戻りしたように思えてなりません。

——ある批判のことばより——

スポットインタビュー

「生徒会についてどう思いますか?」

現在、松高に、生徒会というものの本質的なことを知っている人は一体何人いるでしょう。インタービューによると今の生徒会は何をやっているのか分からないと答える人が大部分です。原因を考えてみると生徒総会のために、とかいう考えを持つ人が多い……。やはり生徒会組織を発展させていくにはこのような考え方を持たれた生徒をもう一度よく見なおす必要があるのではないか。まず生徒会を活発にするために生徒総会の必要性というものがあげられるのではないか、これにはまず生徒が総会にすすんで参加する事が、その問題解決の糸口になるのではないだろうか?

インタビュー

◎生徒会についてどう思いますか?

一、生徒会と一般生徒の交流が少ないと思う

二、生徒会は学校の行事をうまく行うための組織だと思う。

三、クラブの予算が少ないのでこまる。

四、今の生徒会は何をやっているのかわからない。

五、生徒総会に出る人が少ないのがだらける原因である。

六、生徒会はやる気のある人がやればよい

七、無関心派をどのように引っぱっていくかが今後の生徒会の課題だ。

八、生徒である以上生徒会の必要性を感じている。

九、生徒のための組織だから先生の様に自主性を失なうようなものではいけない。

十、生徒である以上総会に出るのは義務なのに。

十一、生徒総会は絶対必要。主体が生徒である以上総務だけで決められない事が多いから生徒の意見を聞くという事で総会は必要だと思う。

松高と松高生

わたくしが現在通学している学校は松原高校というケチな都立高校であります。もっとも私自身はケチな学校とは思っておりませんが、他校の友人の話を聞くとだいぶおとるようです。ただし、私の知りうる知識が少なすぎるから正確な批評はできません。でもこれだけは言えます。私のような無能力の人間がこのような大事なルクールの原稿に関与すること自体、松高の空気を端的に示していると思います。

一応、私の知りうるかぎりの他校との比較をあげてみましょう。まず松高生が一番、劣等感を感じている勉強面。これはとても聞くにたえません。まず入学の時から違いました。私は始業式の前まではのらりくらりと春休みを過ごして来ました。ところが同じ都立でも青山高校へ入った友人は教科書を買わされると同時に英語を十ページぐらい訳しておく宿題が課せられました。私はその時点で学校差を感じました。

又、別の友人の場合ですが、現在2年の私達は化学という授業を受けていますが、彼女の所ではもうすでに一年で大半をやってしまったということです。実際彼女は、周期律長をほとんど全部暗記していました。

松高はどうでしょうか。私が思うにはあまりにも生徒にたよりすぎているとしか思えません。生徒の自主性を増すと言い分けしたいだろうが、そうはいかないと思います。教える側の先生が少し徹底的にやろうという気がなければ先徒の方だって勉強しなければとか勉強しようという気がおきないものです。だいたい今のクラスに入るまではそんな気はもうとう起こらなかったのですが急にそんな気になったのはおもしろい事です。そりゃ宿題責めよりは遊んでいた方が楽ですが少しは苦労もしないとろくなことになりません。

私自身もそうですが松高全体として精神年令が低いように思われます。冬休みにしても私の友人達は百人一首を暗記せよという非常におもしろそうな宿題が出されています。百人一首などは勉強の面からもさらに遊びの面からもおもしろいものです。将来、社交的にもすぐれた技能と言えます。私の学校では宿題らしいものは見うけられません。でも、掛きぞめだとか、家庭科なら、正月料理の研究、大掃除の研究、英語だったら新年の挨拶、クリスマスの時の米国式やり方、国語だったら作文、古典だったら百人一首等、いろいろおもしろそうな宿題が作れるのです。人間はずるいですから、やらなくてよければそれらの事には見向きもしません。しかるに、やらされれば結構、有意義だと感じるのです。先生方には一応このことを考えておいてもらいたいと思います。

次は遊びの場合。これについては他校の話しは全々知らないので私なりの見解であります。私のみるところによればうちの学校の連中は遊びを知らないのだと思います。私は小学校・中学校と遊びの中で育ってきたのではがゆい思いがします。中学校ではよく昼休み放課後などサッカーその他をやって遊んでいたのに今、それをやっている人はごくまれです。又、教室でも、マンガをみるか、話しをするか、人をコケにして遊んでいます。でもっと色々、遊ぶべきです。教室でうまとびをやろうがいいじゃないか。おこられたってへこたれてはだめさ。なんてったって二度とない青春じゃないか。女の子のことだってそうさどうして全体の雰囲気が悪いんだ。もしそれがよければおれだって何とかなったろうに。だれが何と言ったっていいやつがいない

といったって悪いやつなど一人もいないじゃないか。みんなつき合ってみりゃいいやつばかりなんだぜ。松高はだめだな。木蔭で話し合いをやるにも気もなきゃ参加者もいない。まったくつまらない学校だ。トランプやったっていいじゃないか。今のうちに一通りの遊びを覚えておかないとあとで後悔しても役立たないんだぜ。なんてったって今が一番楽しめる時なんだ。

松高でもいいことはある。スキー・スケート教室だ。一二年の親睦にもなるし男女間の交流も深まる。私はスキー教室2回とスケート教室1回参加したがいいものだ。何回でも行きたいくらいだ。スキーなどは2月頃学校総出で1週間ぐらい行ってきたいな。それくらいためになるよ。お金の面や寮の収容人員数によって参加者が限定されてしまうが、なるたけ参加してほしいな。

それから、できるだけH・Rのまとまりがほしいな。少なくともHOMEとなっているのだから毎朝登校したとき帰るときの挨拶ぐらいしてほしいな。おれが一年のときむりやり挨拶したら、半分もの人間が無視しやがった。まったく何てやつらだ。人でなしめ。又クラスでどっか行くのもいいな。そんな時には、どんなにいやでも強制的に行くんだな。その方がずっといいぜ。文化祭の後夜祭の時かな、みんなが大きな円陣を作っている時1Cの連中が自分たちのクラスだけで円を作っていたな。おれが何回いってもやめなかったな。あのくらいの団結力がほしいね。あれはきっとおばけ屋敷をやったときにがんばったんだな。あんだけの団結力があれば火事が起ころうがきちんと逃げられるだろうし、先生にだっていくらだって文句が言えるぜ。

おれはそういう仲間をもとめてヒマジン倶楽部という名のグループに参加した。結果はあまりよくはなかったが今でもそのグループはつづいている。現在部員は15名だ。現在取っている行動は遊びだけだが結構楽しめる。このクラブの存在を知る者は少ないし入部希望者はいないだろうが、きみたちだって何か作ればいいんだ。だいたい今の現状じゃ味気ないだろう。何の気なしに学校へ来て時を過ごしている。まあクラブに入っている者は別あっかいだけどやはりグループはいいよ。孤独もいいけどそれだけじゃつまらない。

私の一番くわしい分野、生徒会活動について少しのべよう。生徒会活動は特別教育活動に含まれており生徒の自主的な向上を目的にしているものと私は見ている。だいたい生徒会がなくたってみんなはいたくもかゆくもないだろ。文化祭・体育祭の行事だってちゃんと先生がやってくれるんだから。だのになぜ生徒会があるのだろう。つぶれそうになっても必死でくどきおとして役員を出させ存続させている。一体なぜだろう。生徒会の仕事をしたものには分かるだろうが役員になれば、それ相当に得るものがあるのだ。文化祭だってみんな自身の意見でやっていきたいだろ。そういうみんなの意見は個々が持っていつも先生には無関係だし意味がない。生徒会はその意見を引きだし、まとめて学校側・先生側と対立できるようになっている機関なのだ。

役員は無報酬でただ奉仕していると思っちゃいけない。役員になれば大変は大変だが、それなりに得るところもあるのだ。何より人間的に進歩できるし、友交関係も広げられるし経験もふえる、へたな勉強よりよっぽどためになる。もっとも今のみんなは自分におわされた仕事の重荷にたえかねて自暴自棄になる傾向にあるが、これはみんなの責任でもあり決してその個人を責めることはできない。もしあまりに見られないというのだったら、自分が役目になればいいのだが批評はしても自分はやらないというたちの悪いやつが多くてこまる。

整美委員会の例でみると、委員を呼びに行くのに個別訪問しなくてはならない。一たび委員になればそいつは自覚をもち、放送に耳を傾け自分から出席しなくてはならないのに来ない。委員長らはそういうてあいをなだめすかして出席させる。実際、そういうてあいは頭数だけで何の役にも立たない。こちらの言うなりである何というはがゆいことだ。これじゃ幼稚園である。かといってこの無役なやつらをほっておくわけにもいかない。あまりにもみじめだからである。ま、こんな具合にして委員会というものは本当は無用の長物であろう。もし反論があれば新三年の飯田まで来てください。大いに語り合おうではないか。

次に行事の話をしておくとまず一学期にオリエンテーション・球技大会?・全交流会・二学期に体育祭・文化祭・生徒総会・マラソン大会・三学期に球技大会・全定交流会などがある。これは大ざっぱな行事であり細部は調べないと分からない。だいたい行事などはみんなの親睦をふかめ学校生活を快活にするためにあるのだと思う。しかるにみんな参加しだがらない。雰囲気が悪いとかつまらないとかで参加しない者が多数ある、総務はなるべく多くの出席を集めたいがためにいろいろな手をうつ。しかしやはり参加しない。これは各生徒会員の自覚の問題であるその場の雰囲気を作るのは何よりも自分なのだから、その自分がしっかりしていなければどうしょうもない。又たとえどんなに雰囲気が悪かろうと自分にできるかぎり参加協力し良い方に向かって努力しなくてうそである。

次に私の知っている文化祭のことについてくわしそうにことの次第を書いていってみよう。まず整美委員長であった私は、文化祭関係のある女の子を好きになり彼女に近づく目的もあって文化祭執行委員を兼任することになった。規約上はいけないことになっていてもやってしまえばそれまでであった。私ははじめ、しっかりした委員長のもとで言われた通りにやっていればいいのだとばかり思っていたのにその委員長はあまりしっかりしていなかった。又、委員会内に去年の経験者が少なかったために、漠然とした事しか分からずぼんやりしていた。去年ならば委員長がやりてだったためにうまくはかどったこともてまがかかった。又、役をふりわけられても具体的仕事の分からないままに放置された。その年はクラス制にしようという従来のしきたりを破るような事をしたのでその許可までに相当長い時間がかかった。文化祭のプログラム作成も相当時間がかかるので急がねばならなかったので計画においては一学期の期末テストが始まるまでに原稿の訂正が終っているはずだった。しかしながらお化け屋敷・エレキ等の問題があり7月の終りまでかかってしまった。それから印刷屋に四・五回行って、ゲラをもらったり校正をしたりした。そうしてやっとまに合ってできあがった。私たちが作ったプログラムは紙もいいし内容がおもしろくできたのでよかったと思う。ただ少しぬけたところがでたのは残念である。9月に入るといよいよ仕事をさせられるようになった。生物部であっても、クラブにほとんど出れないくらいに急がしかった。恐竜作りも非常に手間のかかった一つである。その他にもいろいろ作るはずだったのがそのおかげでおじゃんである。もっともお金も底をついていた。本当ならクラスの面倒もみるはずだったのに委員会だけで手いっぱいだった。舞台係も兼ねていたので特に当日は見物もできないありさまだった。初日の演劇部の劇の時、私が幕を受け持っていたのだが練習不足だったので

しめおくれでしまい必死になった。でもおもしろかった。文化祭はやっぱり遅くまでがんばらなくてはおもしろくない。その点クラス制は非常によかったと確信している。来年もこの調子で行ったらなあと思えてならない。

さて、ここいらで少し生徒会でのエピソードでも話しておこう。定時制の有能な先輩によるとむかしはよかったそうである。彼が司会をした時から全定交流会の出席率が五倍になったという話を聞いてそういう有能な役員がほしくなった。又、なぜ昔はよかったかというと、昔の方が何によらず活発だったそうである。生徒会も同様で、定時制より全日制の生徒会のが遅く下校していたそうである。又、女子の方が多かったそうでとても楽しかったそうである。それにひきかえ今はどうだう。夏休みでも休まず登校して文化祭のことで頭を痛めねばならない。元生徒会長、新庄君の苦労は並大低のことではなかったと思う。現に私もときたま登校したが彼の憂うつそうな顔を見るのがつらかった。

おもしろかったのは文化委員長の加藤であった。彼はそこらに捨ててあった皺くちゃの原紙にマンガを書いて刷った。それはちょっぴり諷刺の入ったマンガであった。

公報も前の生徒会斉藤（通称カマキリ）会長の時名前を変えようとはかった。その時かの角山君が松にちなんだ名として松竹梅だとかおそ松だとか赤松だとかあげて結局おじゃんになってしまった。

代々の選挙管理委員長はどうして決まったか知ってるかい。アライ君の場合はアミダくじで、浜君のときは彼しかいなかったから、山口君のときは知らない間にそうなっていた。まったくおもしろいではないか。

これから話題を一八十度転換して松高生について話していこう。大ざっぱな感じは後まわしにして変わった人間とみられるやつをどんどんあげてみる。

まず歴代の生徒会長はみんな偉人といってもいいであろう。評議会議長だった永山君。彼は恐竜作りなどに参加した一員である。彼は議長としては相当なやり手である。又、典型的な文化系行き人間である。石塚竜夫、彼は、変といえば変な生き物かもしれない。でもいいやつだし、生物学的見地から見るとおもしろい。九州生まれで女の子には変わった見方を持っている。久保田達也。彼はただの平凡な人間である。広本敏郎、もと剣道部部長。なかなかの好人物。飯塚雅倡。変質狂的性格。銃剣類に興味あり、近づかないにこしたことはない。上原宏、典型的な渡世人向き、切れのよい喋呵をきる。角山正之、変人。なんにでも首をつっこみたがる。小沢美佐雄。あごで有名なテニス部々長。一年にもチョウチョ好きな熊谷、豪傑の尹さん等がいる。以上個人名をかってにしるして申し分けないがこれらの人間が生徒会をぎゅうじる能力を持っているのである。しかし彼らはその能力をフルに使わないしみんなも後おしをしない。松高生は団体としての自覚は極度に悪い。個々、自分勝手だし、幼稚な連中も多い。そんな中にあって我々は自己を反省し、自分を取りもどそうとせねばならないだろう。そうじだってきちんとやればおもしろいものだ、それをやらないなんてなんてことだ。義務も遂行できなくてどうして一端の人間になれようか。ま、今はできなくてもいい、しかしできるようにとの努力はおしまないでほしい。松校生は松高生なりに勉強しないのんびりしたムードは持っているんだ。でもそれに気ずいている人は少ない。みんなはそういうことを考えて行動してほしいものだと思う。

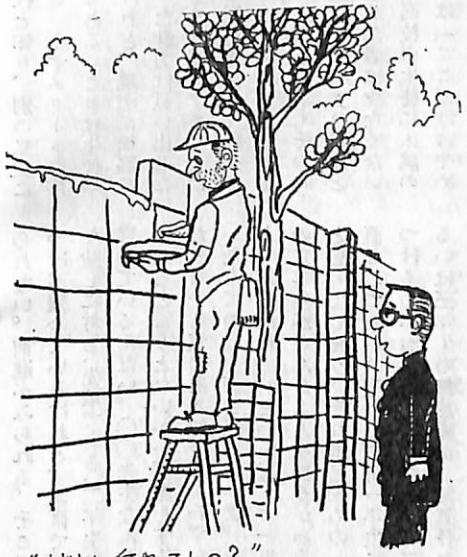
都立松原高校図書館蔵書

沈滞松高から発展松高へ

我々は松高生なのである。でも松原高校についてどれだけの知識いや認識があるだろうか？松原高校ってどんな学校――きたない校舎で、のんびりムードの高校ってとこかな。（ある松高生の声）無気力な奴の集まりさなんていう口の悪い連中もいるが。これらでは松高について一部とも語ったことにはならないのである。松高という単語にあてはまる単語を成るべく多くならべ概念なり意味なりを理解したいものである。それの助けとして私は幾つかの学校生活の一コマを省り見たいと思う。ここは合格発表の開場である。自分の番号を見い出し、ほっとするもの、又見い出さずがっかりするもの。そんな風景は極く自然なものだが。自分の番号を見い出しながら、チェっとため息をつい者が中に見られたのである。生徒数は少ないし、校舎はボロい、プールはない、あまり聞かない地味な学校、この学校になんの主なる、きわだった魅力があるというんだろう。また中学の友や近所の人にここに入ったといったって知っているだろうか？なんて考えた者も中にはあったのだろう。現に松原高校と知り、別の私立にいってしまった者もある。まずスタートの序盤からこんな状態なのである。これは生徒の考え方のゆがみであるけれど、現実に松高にはこれと言ったきわだった魅力は見い出せない。それに対して論ずるのは後にする。とにかく松高にいくばくかの期待を持って新一年生は松高の門をくぐった。学校群制度で入学した者もその前の制度で入学した者もその時の感情には大した違いはない。つまり松原という名をきらいつつ入学した者は少なくないのである。私自身が海城高校の生徒に入試の際聞いたことだが、彼等は「ここだけはやめた方がいいよ、こんな学校は、ハハハハ。」と空虚に語ったのだった。私自身驚き、軽べつしたものであったが、松原にはいる際、いや入ってそういう空虚な言葉をはく者は少なからずあったのだ。それでもこの新一年生もこうして一、二ヵ月たつと松高の良さがわかってくるのである。「勉強さえやればなんて思っている人は少ないね。ひがみとかひずみだとかこの学校には感じられない。こういうのが高校生活っていうのかなあ、どこを見ても面白いことばかりだ。」という一年生。松原なんてというこうまんちきな考えはみじんもみられない。前進がみられる。そこには中学生っけが残っているけれど、素直である。そんな話しに対し、先輩である二年生は「なにを言っているんだい。○○先生なんか僕らがこうやると言うとたいがい邪魔をするし、生徒だってやる気のある奴なんかわずかで、面白いなんてのはまだまだあまいよ。そうあまいよ。茶番だね。」といい返す。一年生は先輩の二年生がこんなことを言うからそうかなあと思ってしまう。それほど初めの一年生は素直なのである。そうして新一年生にもう新をつけるのがおかしい頃になると、二年生のあるいは三年生の無意識な、無責任な言動で一年生の素直さはもうすれてしまっている。それでもまだ夢中で高校生活に慣れようという態度がみられる。そして必死に松高を知ろうとする。そこにまた二、三年は悪いことを並べ、これが現実だと押す。一年は伸びようと背を伸ばすそれを押す。そして考えるのさえいやになる。無意識に一日をすごす形になる。発展を忘れる。ちっぽけな進歩さえ忘れる。松高での小さな生活にあくせくする。世界を省りみない小さな人間が増える。また一部で考えるということをとりちがえ、いいまわしや、あげあしの練習のような話しぶり、

思想、また自分の満足に対するこじつけの思想をもつものさえでてくる。私自身松高に限らず全体の高校生諸君にいえることはいい意味の図々しさが足りないと思う。こんなことをいえる立場ではないが、ここはペンの力を借りることにする。どんな欠点あるものでさえも自分の身に吟味させ、含ませれば素晴しい性格のものに発展することを知らないのではないと思うのである。私は提案というより、当り前のこととして、二年三年は自分の失敗した道があったら、それを教えなくてもいいけれど、一年生に良し悪しのヒントぐらい、高校生活でつかんだものを純粋に吟味し、与えてやるくらいのことをしてやらなければいけないと思う。なぜなら二生年あるいは三年生は松高生であり、一年生は松高生であるからだ。松高を灰色のかかったものからブルーのかかったものへとしていかなければならないのは二年生に相違ないのである。今までの松高にいやな点があるのなら一年生を通じて改善していくのが義務である。勿論素直な気持で改善するのだ。一年生もそれを信頼して親しく二年生をとらえ、楽しく、意義ある、真の意味の高校生活をつかむ態度にならなければならない。卒業してしまう三年生には心残りもあろう、OBとなってしまっては時間のかさなりがなくってしまってしまって交流はむずかしい。でも三年生だって素直に松高生活をふりかえってみればなんらかの楽しさ、満足感は得ているはずである。それを最大限にまで発揮できなかったかもしれないが。でも三年生は一応なすことをしてきている。確かに今の二年生には改善面は多い、しかしそれだけに私は二年生に期待する。無限の力をもっているような気がする。それはこんどの二年には今までの松高に見られなかった野性的な荒削りな点が見られるからである。持っている力は強度である。しかし三年生のもっているような確実さにかける、秩序にかける。それをみならい荒削りは荒削りなりの大きな、雄大な松高建設に出発しょうではないか、二年の諸君ガンバレ、新しい松高は今の二年生でなければつくれない。立ちあがれ、本当の自分を見つめ、まわりの者にどうじずに、そうすれば素直な態度で松高建設に臨めるだろう。そんな土台や労働力で造った松高は世界一のわが愛する松高だ。素直に立ちあがろう、自分を見つめて。なにか勇気がわいてきた。ソレ――――イ。

（このさい二年は新三年である。）



"おじさん，何やってんの？"
"いやね，明日，生徒総会があるそうでね"

ル・クールとしての見解

その1

生徒会という組織はどんなものであろうか？　それは、生徒会員によって結ばれた結合体であると考える。だから〝生徒会と一般生徒〟という言葉に抵抗を感ずる。そんな分類こそナンセンスである。生徒会機構に直接関係ない生徒であっても、組織を構成する一生徒なのであり、組織の歯車となり、その労力を導入すべき人間なのである。その労力を惜しむということは、全組織破壊の姿勢であり、現状維持ということにもならないのである。

生徒総務なり委員会なりは、主なる構成部分であっても、たった一つの静止した歯車によってその大なる力は、発揮されないのである。小さな労力の結集があってこそ、生徒会は組織されるのだ。

生徒会総務、各委員会への要望・批判・非難は自分に任された歯車を、働かす労力を費やした後、行うべきである。諸君等の中には「そんなことは解っている。でもそれは理想にすぎない。」又、「役員として責任を負うべき者達が、生徒会という組織を動かすのであって、一般生徒はそれを監視し、批判すればよいのだ。」という人もあるかも知れない。我々ル・クールは何も理論によって語りかけたいのではない。現に、小さな労力を生徒会の為に傾けようとしている生徒がある。わずかな効果とはいえ、立派に彼等は貢献している。その試みが、生徒全体の中で行なわれるよう願うだけなのである。今、努力している彼等でさえ、それを投げ出そうとしているのである。戦争の合い言葉ではないが〝松高火の玉〟となって全精力を尽さなければならない。それなくして、松高のムードがいやだとか、生徒会は何をしている等というのは屯馬というものである。

我々は生徒会の観察を試みたが、その時それが自分自身の観察をしている様な気がした。我々は新しい松高を夢見た。

その2　何故取り入れた生徒総会

理屈めいたことを長々論じてしまったようなので、ル・クールの特集として、総会での発言がアップされた訳を話したい。といっても根拠といった強いものではない。つまりは生徒会の国会ともいうべきところで、我々は一つの発言のために大いに驚かされた。丁度国会で時々ある爆弾発言というものだった。しかし、国会での爆弾発言は首脳部から出るものであるが、それが一般議員から出てしまったのである。これは問題である。生徒会の権威のなさがうかがわれる。ここで、おかしいかも知れないが〝人が悪く見えるのは自分の内部が悪いからだ〟という戒めを思い起こしたのだ。すなわち、私自身生徒会役員がだらしがないから駄目なのだと思っていたが、実は我々自身に欠陥があったのだ。そこでそれは何か、また生徒会とはどうあるべきか？　我々ル・クールはこの総会で目醒め、一気に「生徒会をつぶせ」といった題材から松高を見つめる方向へ発展したのだった。

その3　HOPE―高校時代

我々としては生徒会、松高、にとどまったつもりはない。人間の生き方として考えたつもりである。人間は常に、何故自分は生きていなければならないのか考える。高校時代はその考えの基となる時期である。あと二十年もたてば、我々が世の中を背負っていくのだ。生徒会という目の前の課題から、我々は何らかの形で人間の生き方、真の社会生活というものをつかまなければならない。愛する松高の為にも、愛する自分の為にも！

掲示物の配布は生徒会の管理で

皆さん、知っていますか?、我校では掲示物という掲示物はみな生徒指導部の許可のいることを。そうです。総務の総会の公示をはじめ、他校の文化祭のポスターすら、その許可印がなくては、はれないのです。もちろん印刷物の配布もそうです。このようなことは生徒会活動には、大きな意味をもたらすのではないでしょうか。

生徒会なんて関係ない!というあなたに。あなたは松高生でしょう。松高生である限り「生徒会会員」である義務を有するのです。

なぜなら松高に入学した時から規約により定められるのです。「そんな一方的な義務は知らない」というあなたに。たしかにこの規約が正しいかどうかは、わかりません。しかし、あなたがこの義務を放棄するのなら、まずこの規約を改正しなければならないのです。あなたの一方的意見により義務を放棄することはできないのです。ですから、あなたは今、松高生であり〃松高生徒会会員〃なのです。

さて、生徒会無用論なるものが出される今日の生徒会不振。もちろんこの根本的原因は〃生徒全体の無責任さ、怠慢さ〃……。

権利だけを欲し、義務を無とする。いやその権利すら欲しない人が何んと多すぎることでしょう。その中で「生徒会活動」が細々ながら行なわれています。

その生徒会についてよく、

「総務と一般会員との間には溝がある」とか、

「総務はいったい何をしているんだ!」といわれます。このようにいわれる原因はなんでしょうか?　それは、伝達の不活発から生じる「相互間の不理解」ではないでしょうか。そのよい例が文化祭、体育祭でしょう。

一般生徒から総務へある要求がだされる。でもそれはいつのまにか消えさられ、全然要求がとおらない。でも、総務は決してなまけていたのではないのです。皆さんの希望を少しでも達っそうと必死に学校側と話し合い、努力したのです。しかしそれは表面には表われません。

生徒会には生徒会でつくる公報があるじゃないか!という方に。総務としては本当に詳しく、その内容、及び協議過定そして結果とをのせたいのです。一般会員全員に、隅の隅まで知ってほしいのです。しかし、それが出来ないのです。つまり、許可印がとれないのです。では他校では、どうでしょうか。

明正=四十二年度までは、規約上は一応掲示物、印刷物の配布は、原則として生徒指導部へ提出することになっていましたが、実際はまったくフリーパスであった。しかし、現在では規約も改正し、印刷物の配布、掲示物に関することは生徒会の責任で行なっている。

千歳=規約には一応、生徒指導部の許可がいるが、実際には、指導部及び生徒会には無関係で、まったく生徒の自由で行なわれている。

千歳ヶ丘=規約的には、生活指導部の許可を有する。しかし、実際は生徒会で行なっている。

これが、第二十五群における他校の状態です。(これらの学校の方は、我高校の状態を聞いて非常に驚きの声をあげられた)では、なぜ校高では印刷物、掲示物に関して学校は厳しいのでしょう。答えは次の様でした。

○風紀問題

○思　想

では許可する基準は何なのでしょうか。答えは、

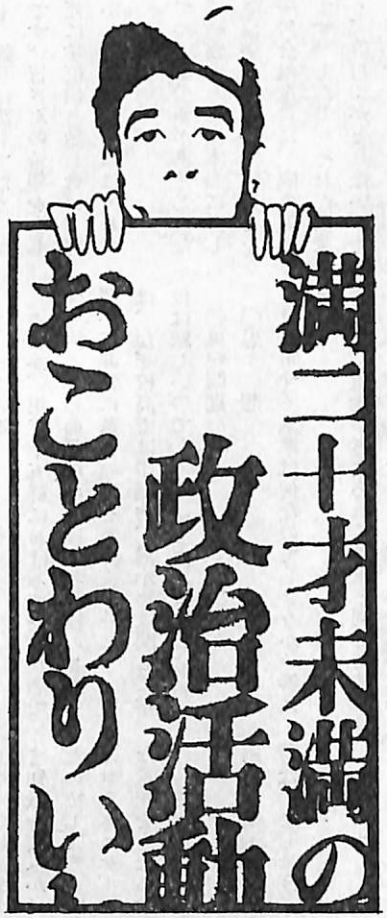
○皆さん生徒が考えられることと同じです。とのことでした。ではなぜ、この仕事を総務(あるいは、他の生徒会機関)にさせないのでしょう。生徒会としては、印刷物など、何から何まで配り、風紀などを乱そうという考えは、全ったくないのだから、なにも御忙しい諸先生方の手をわずらわせなくてもよいのではないでしょうか。

『皆さん、どう考えられますか!』

アダムとイブからはじまった人間が、数々の歴史を経て、今日にいたり、ハッキリと人間と動物を区別できるは、

『人間は、ことばを持ち、そして、それによって生じたコミュニケーションの発達』からでしょう。人間がことばを持ち試行錯誤により得た知識を次から次へ他の者に伝え伝えて知識を積みかさねたからこそ、今日に至ったのでしょう。それと同様に、生徒会活動にはコミュニケーションの活発の否可は、大きな意味をもたらすのです。

皆さん〃生徒活動の活発化〃のために、コミュニケーションが自由に行なえるように印刷物・掲示物に関することを、生徒会自身で行ないましょう!



高校生の政治活動

幻想の中の出発

政治性 ―― 社会性 ―― 日常性

空間 ―― 瞬間 ―― 時間

⊕極 ―― ⊖極 ―― 全体 ― 虚構

……ワタシ

分からないのです　なんにも……。
見えないのです　すべてが……。
政治性って何？　社会性って何？
いくら偉そうなことをいっても、なんにも分からない……。
あるのは言葉の羅列、それもすでに死んでしまった言葉の……。
知っているのは、ワタシにはなんにも分からないということ。
「それは、社会的に見て悪いことだから、してはいけない。」
「常に中立の立場にあらねばならない。」
でも、ワタシにはあなたのいっている言葉が通じはしない。

沖縄で、B52が遂落しました。
パリ会談に、民族解放戦線の代表が参加しました。
北爆が停止されました。
東大入試、やっぱり……。
パリ五月革命……。
ジャン・リュック・ゴダール
思い出は葬られます。
ああ七十年　安保！

私だって知っているのです。
でも、何も感じないのです。肌に伝わってはこないのです。
それらのことと私とが、どこかでかかわり合っているのさえ、ぼんやりとながら知っているのに。

ある日、私の世界が一瞬のうちに消え去ってから、私は、他者の反映でしかなくなってしまった……。私が私でなくなってしまった。悲しいワタシ。
それは、身震いする程悲しいことなのに、私は恐怖感すら忘れて、ただ線分の世界をとぼとぼ歩くのみなのです。時々その悲しさを思い出して、涙が無関係に流れ、死への憧憬と生への執着が闘い始めるのですが、それもすぐに忘れて、いつもの私にもどってしまうのです。

すなわち、受動態でしかありえない私しか存在しないのです。
それにもかかわらず、私の存在は、他人を害さずにはおかないのです。
そんなに大それた私だということを知っても、例によって例のごとく、無感覚・無感動な私でしかあり得ない・・・。
もう沢山なのです。こんな無感覚な私なんて。
出発しなければならないのです。
無気力のなかから、大きな可能性を持った私の世界へ。

ああ、大いなる幻想……。
出発、すなわち、かつての私の世界を崩壊させたものを破滅させること。
私の世界、一日、すなわち食べること、眠ること、行動すること、欲望すること、すべて私の掌中にとりもどすこと。

ああ、― 切なる私の祈りを、神よお聞きとどめたまえ

〝これこそ本物の政治活動ではないのかしら。〟と私は思い始めました。政治を私から切りはなしてはすでにそれは「政治」ではなくなっているのです。

「人間教育」不在を反省

（朝日新聞より）

全国高校長協会（会長、西村三郎東京都立白鷗高校長）は十八、十九両日、東京・新宿の厚生年金会館で総会を開き、過激化のきざしをみせている高校生の政治活動に、どう取組むかを討議した。この総会には二千百人の校長が集り「高校生は選挙権をもたぬ未成年者なので、政治の実際活動に加ることは認めない」との基本方針を確認し合った。

具体的な生徒指導のすすめ方としては、生徒の精神のカテとなるような「人間教育」が欠けていることの反省から、芸術、宗教などの情操教育を充実させようという考え方が打出された。

高校生の政治活動については、さきに札幌市で開かれた普通科高校長会総会で取上げられたが、この総会でも熱っぽい論議がたたかわされた。

反代々木系高校生の組織化が三百五十二校、二千七百余人（警察庁調べ）と急速に進んだこと、九百人の参加者を出した10・21国際反戦デーのデモに普通科だけでなく、職業高校の生徒も、かなり多かったこと、などから校長の関心が盛上がった、といわれる。

このなかで、千葉県の新谷敏夫船橋高校長は「勤評闘争、安保闘争のさなかに少年期をすごしたものが、いま大学生、高校生としてデモなどに加わっている。これは人間教育が忘れられていたためで、教師自からが知識の切売りをするのではなく、〝人生の教師〟とならねばならぬ。」と論じ、「芸術科」を必修教科として、情操教育を深めるよう提案した。

また島根県の高橋忠出雲工業高校長は、宗教的な情操を養うことが根本だとして「朝礼とホームルームの時間に古事記、論語、新約聖書をテキストにして生徒指導をしてはどうか。」と説いた。

校長室の占拠騒ぎが起きた大阪・市岡高校の武内安治校長は、苦い経験をもとに「やはり、人間教育の不在が、いちばんの原因と反省している。占拠事件で退学したリーダーの一人は、その後、活動家として学校に出入りし、生徒への働きかけをやめようとしていない。こうした組織化の動きには、教師が総ぐるみで立向うよりほかにない。」と報告した

このほか「大学入試を改めぬかぎり高校教育の正常化ははかれない。したがって、大学教育の改革のなかで入試の是正策を打出すべきだ。」との意見、「各高校に生徒指導のカウンセラーを置く」といった提案などが目だった。

高校生の政治活動への対策を考えあぐねていた校長たちが、ともかく原因は教育のなかに潜むと見てとり、教育のなかで解決する、との姿勢を示したわけだ。

ささえが欲しい。中途半端な、ささえなんかいらない。教育の中性なんてさっぱりわかんない。先生は、生徒に、根拠のない学説を教えることがお出来になるのですか。立場がなければ、確認がなければ、私の思考は無にしかなりえないのです。

だってさ、自動車事故から身を守るのに、文句つける人は誰もいないのに、馬鹿な殺されかたしたくないから、戦争反対っていうと、やれ片寄った考えだ、やれアカだ、なんていわれるのおかしくない？

「高校生の政治活動禁止！」

わかんないな。

だって、何故、今のような私が出来上がったかって言ったって、結局、自分自身がその構成の一分子である社会というものから、無関係に、あるいは無関係だと思いこんだことにも一因があるんでしょう？そんな「社会」

対談

校長＝編集委員

1968年は、佐世保事件で明け、東大紛争で暮れた。と言っても、過言ではないでしょう。そして、その中で我々高校生にとって見逃すことのできない事件がありました。それは、九月におこった大阪の高校での、生徒による〝校長室占拠〟という事件です。

前記には、高校生の意見を記しましたが、ここでは二名の編集委員が、御忙しい我が校の校長先生の御意見をと、代表で御伺いしてみました。

全国校長協会

委　九月に大阪の市岡高校で〝校長室占拠〟という事件がありましたが、そのことについて、どうお考えですか？

校　フーム。この問題は、みんな新聞等で見て、知っているだろうと思うけれど、私も、知っている範囲は新聞程度のことでネ、その内容を実際聞いているわけではないのだが……。

結論から言えば、私は好ましくないと思う。特に高校生が不法な手段で校長室を占拠するということは、学校としても、好ましくないと考えている。又、この事件には他校の生徒が、だいぶ入っているということにも、一つの問題があると思う。

委　全国で反代々木系の高校生の組織が三百五十二校で、二千七百人いるというデーターがあるのですけれど、この事実をどうお考えですか？

校　これも同じように、新聞の報道によって知っているわけですけれどネ。したがって、この事実は本当だと私は思う。

しかし、これについてどう考えるかということは、又、別の問題になってくるネ。内容的に、一体どういうものであるかということを、掘り下げていかなくてはいけないと思うネ。

委　十一月二十日の新聞に〝全国校長協会〟のことがのっているのですけれど、それの基本方針として「高校生は、選挙権を持たない未成年者なのだから、政治の実際活動に加わることは認めない。」という結論がでているわけですけれど、これについてどうお考えですか？

校　この問題はネ――。そういう結論が新聞にのっておったんですか？

委　ええ。

校　まあ、それはそれとしてだネ。私の考えを申しますとですネ、高校生の場合はまだ未成年者であり、保護者の保護下にあるということですね。実際、政治活動に入って行動するということは、色々な点で好ましくない事があるということが結論になるネ。

ただ、私はここで政治的な一つのものに関心を持ったり、あるいは、それに対する教育を深めたりすることは、いいことだと思うけれども、単なる一つの一方的な結論だけで、ただちに行動をおこすということは……。充分考えていかなければならない問題があるんじゃないかと私は考えるネ。

情操教育

委　では、校長協会で具体的な生徒指導の方針として、人間教育の不在の反省から、といわれるものを、自分の手に取戻そうと思うのは当然のことではないのでしょうか。

そう、私の出発の展望は、自己の「政治性」の徹底にあるのではないでしょうか。私の学中に取戻すことこそ「政治活動」ではないでしょうか。

現在の私と言えば、無感覚、無感動、無気力の底から自分の体を持ってして私自身の回復をはかろうとしているのです。お願いですからわかって下さい。

芸術・宗教等の情操教育を充実させようとの考えが打ち出されているんですけれど、どうでしょうか。

校　これはネ、結論かというと、そういうニュアンスではないと私は思うんですよ。問題は、人間形成というか、一つのものを作っていく場合において、いつも私が話しているように、精神上の問題には知

的能力だけでなく、情操的な能力であるとか、イテキ能力というものが総合され完全な精神能力というものが、はっきりできるんであるからして、情操教育であるとか、美術的なものを取り入れなくてはならんということを強調しているんじゃないかと思うんだけれど。

しかし、これを特別に取り上げてみたからといって、そういうもののバランスがとれてくるというものではない。ねらいはだね、今、言った精神的なバランス、精神能力といったもののバランスをとる意図的なものだと、私は解釈するネ。

委　現状において、情操教育の充実というものは、可能だと思いますか？

校　これは難かしい問題ですネ。特に、今のコースからいった場合、大学進学を控えてどう折り込んでいくかが、難しい問題だね。教科学習だけにとらわれると…。しかし、教科学習において情操教育が不可能であるということは、絶対ないと思う。

委　具体的なことをお聞きしますが、もし松高からデモなどによる逮捕者がでたとしたら、その者に対してどういう処置をとりますか。

校　こりゃ、仮定なんでね。仮説の問題でしょう。出た場合のことは出た時に充分考えなくちゃなんけど。

まず私は、その前の段階が一番大事だと思うんだが、結果だけを見て結果に対する批判なり、あるいはそれに対して結論を出すことは、教育的な立場から言ってあんまり考えたくない。

むしろ、私は結果の出る前、その仮定の段階において重視することが、学校教育に、特に高等学校において重要なんじゃないかと思う。

その前において、なぜそういうものが出るということを、お互いに究明していく、これはまあ、学校の先生方が一致するということが大事だろうし、生徒の生徒会なりH・Rなりで、みんなの意見というものを聞いて疎通というか、コミュニケーションととるかを、お互いに行なっておいて意見が通じ合う様にし、指導もするし、又、指導も受ける様にすることが、一番大事なんじゃないかと思うんだがネ。

もし仮に、質問のようなことが起こったとしたら、やはり、さっきお話した様に高等学校の生徒は、未完成な段階、未熟な段階であるし、まあ、考え方の中に理想があるかもしれんけれど、人間、人生長い目で見れば、初めの段階なのだから、やはり、一つの充分に暖かい目で見まもってやるということが大事なんじゃないかと思うね。

委　僕らは、まだ社会に出ていないんですけど、僕らの立場というのはすごく自由なんです。社会の回路にはまっていないということで。何かをやろうとすると、今じゃなくてはできないんじゃないかっていうような気がするんですけれど、それについて。

校　これはネ、最近の高等学校の生徒だけじゃなくて、大学生にもいえるネ。一種のあせりじゃないかと私は思うんだ。

これには社会的、客観情勢等、色々あるんじゃないかと思うけどもね。やはり、すこし、せっかち過ぎるんじゃないかという気がする。

委　あの、僕らの生まれた年が昭和二十五年から二十八年で、社会的背景っていうか、まあ、戦争にしても、まるで体験がない

んですけれど、それが、やはり横のつながりが薄いってことに結びつくんじゃないかって思うんです。それが、又、無気力につながって、今の僕らの世代が無気力だと思うんですが、それについてどう思われますか。

校　まあ、一般的にはね、あなた達の年配の人について、無気力だといわれるというが、私は一概には無気力だとはいえない面があるんじゃないかと思うね。

それから、さきほど私が言ったけれども人生への長い経験は二十代・三十代・四十代・五十代・六十代というような年代的な一つの考え方における大きな差が出てくるんですね。だから我々のうよな五十代の人間の考える一つの考え方と、あなた達のようなこれから二十代になろうとしている世代との間における考え方には、大きな違いがあるにしても、誰もが経てきた一つの過程だと、私は思うんですよ。あなたが意見として出していた意志が弱いというようなことは無気力だという反面には自分というものの強さが、若干足りないんじゃないかな、そんな感じだね。

委　あの、無気力であるということはね、ともすると抑えられたエネルギーが、爆発する可能性を含んでいると思うんです。今の僕らにとっては、エネルギーのはけ口ってものが、見つからないんです。

校　そればねえ、難かしい問題だけれども、逆に私はあなた達に、聞きたいのだけれどネ。そういうはけ口をいったいどこに求めたらいいかネ?

問題はまあ結局こういうことじゃないかな。まあこれは人生論の問題になってくるけれどネ。

あなた達は今、二年だけれども、三年になって大学受験という目先の目標をネ、考えた場合、一つのはけ口はそこにあるわけだ。

しかし「大学を一体何の為に受けるんだ。」という問題にぶつかってくるねネ。

そうすると、一体大学とはなんぞや。

最近における大学紛争の様な問題が起こってくると、色々な点から、良し悪しは別としてネ、まあ、「一体、大学に行って何になるんだろう。」と疑問に思う人もいるかもしれない。ただ、私がここで言いたいことは、これもまあ、一つの現われた現象なのだ。現象の中には、やはり、深い一つの理由があるし、根拠があると私は思うんですよ。

そういう点を、充分に分析してみなければ、いかんと思うんです。しかし、分析をしてその結論を出すまで、相当時間がかかると思う。

日本における経済活動の進歩のことなんて、よく集会で話すのだけれども、日本は戦後、化学技術しかり、製鉄業しかり、急速に進歩してきたネ。

しかし、人間というものは、それに伴なって肉体的な問題はともかく、それほどの考え方が進歩してるかと言うと、そうとはかぎらない。

そうすると、一種のアンバランス……。

それについていけないという、あせりというものが背景的にあるんじゃないかと私は思うんだけれどネ。そこのあたりを一体、人間がどうするかということに、問題があるのだと思うんですよ。

特に、私はこの場合、さっきも言った様に、人間の生き方ということに疑問を持つ人がいた場合、いろんな点において疑問になり、不安になり、あるいは極端に

いって、絶望にいたったり、そういった場合の結論を簡単に出して、それをすべて行動にうつすというような現象が行なわれているんだけれど……。

現在にあることすべてが、いかんから、みなブチこわせといったんではおしまいなんだよネ。

そこのあたりのことをじっくりと考えていくよりしかたがないんじゃないかと私は思うな。

ただ問題は、人間が人間として成長していく為には、さっきいった精神能力というのを鍛えなくちゃいかんと思うんですよネ、ある程度……。

だから、テンポにあわせるには、それにあうような訓練なんかを受けなくちゃいかんし、それに適応するようにしていかなくちゃいかん。もう一つそれを逆にリードするような頭にしていくということが、一番大事だと思う。

それに対して、あなた方の年配では「すぐにこうなるんだ。」と結論を出してしまうということが多いんじゃないかと感じるネ。もうすこし二十代を過ぎてみて、あるいは三十代まで努力してみるという心の余裕がほしい思うんだけれどね。

―― 沈黙 ――

委　どうです? その点は。

あんまり、せっかちにし過ぎて、あせっているんじゃないのかな。

でも、今の社会を見ていて、あせり過ぎというのはおかしいんじゃないんですか。

やはり、何かやらなくてはいけないと色々なことが思い浮んでくるんですね。

やりたいことでもなんでも。

まあ、そこでゆっくと考えて、どうしよう、こうしようということはどうも…。

やはり、なにか、あせりを感じてしまうのではないんですか。だから、すぐにやりたくなってしまうんですよ。

校　まあ、それは実行に移すことだと思うんですよ。吟味すること、やはり、その段階を踏まなければいけないと思うな。ところが、一般的に言って、一応考えることは考えるが、考えてすぐに結論を出しちゃうんだな、そこのところに問題点があるんじゃないのかな。

委　たしかに、そういう傾向がありますけれど、それを僕らは、危機感というか、身で感じるんですよネ。

校　うん……身で感じる……。

委　だから、何かをせずにはいられないという……。

校　じりじりするような感じ?……。

委　ええ。

校　そう。

―― 間 ――

委　これは、あなた方の年代的なものだろうね。松高だけでなく、どこの生徒も……これは全国的な問題だろうな。

校　そうですネ。

委　まあ、高校生としてのね、大学生はその点、行動にうったえられる世界があるからいいとしても、それがいいか悪いかは別ですよ。そこの問題はもう少し真剣に考える必要があるね。

やはり人間生きるからには、人間として考え、悩みながら生きていくというのが宿命なんじゃないのかね。それがなくなったら、学生、あるいは生徒の中からそういう考えがなくなったら、もう時代の進歩に遅れたことになると思うんです

よ。悩むことは大事だが簡単に結論を出してしまうのは問題だね。

――　間　――

委　そうですね、軽率に考えては……。以外と、高校生を見ていると、その傾向が強いですね。

校　僕が昨年〝エルザ〟の話をしただろう。あの話は、あなた方は二年だから知っているでしょう。

委　はい。

校　僕がなんの為に、あの話をしたか、あのねらいは何だったのか。要するに、ああいうライオンのような猛獣の、人間との妥協的な関係、特殊な関係が生まれるということはめずらしいことだけれども…あの中で教えられるのは、やはりアダムソン夫妻のことだね。夫人はライオンがライオンとしての生きる世界があるということを認めながら、その中において、お互いに生きていこうとする気持があり又、あのエルザというライオンも、主人に対する信頼感というものがなかったらあそこにあの話は生まれてこなかっただろうね。

あれは、現実の話しですからね。ああいう世界が、私は本当だと思うんですよ。

たとえば、あなたが、市岡高校での事件を例にとったけれども、学校でああいうことが起こるということは、おかしいですよ。ああいうことは、事前において、充分に手をつくさなければいかん。事前にそういった問題がちゃんとわからなければならんし、話し合いをしなくてはいかんです。しかも、よその学校の力を借りなければいかんということは、おかしいと思うんです。問題は、さっき言ったように信頼関係。学生としての生き方というものをお互いの立場に立って理解するというのが、一番根本だね。

さっきのエルザでなくてもですよ。それと同じように、あなた達が先生と、色々と批判することがあるかもしれんけど、そこにおいて、先生というものを信頼していくという前定がなくてはね。そこにおける一種の疎通というものができなくなるわけです。そこには、やはりお互いに信頼し合うような雰囲気が必要かもしれないが、なんといっても教育ってものは、その信頼関係がなくては成り立たないんですよ。そこのところで、どういうふうにそのことに取りくむかというと、それは努力だと私は思うな。

エルザの場合だって、あれは、努力してきているんですよ。そして、その結果として、お互いの信頼関係が生まれてきているんです。特にあれはむずかしい例としてひっぱってみたのだが。

それを先生と生徒との関係にあてはめれば、あれから見れば簡単なことなんだよ。やはり努めるということが、大事なんじゃないかな。

委　努めるということは、相手の立場で物事を考えるということでもあるんだ。最近において、若い人に一番欠けているのはこのじ点ゃないのかな。

校　しかし、現状では、信頼し合うことが、無理なのではないか、と思ってしまうんですけれど。

特に、大学生なんかでいうと、その機構の中で信頼感が成り立たない。

高等学校の段階では、そんなことはないと思う。あなた達も、小学校、中学校を経て高校に来ているわけでしょう。そして大学に行くわけだね？　じゃ、小学校の場合なんかは、自然とその関係が生まれていたとは思はないかね。ただ、高校の場合には、要するに生徒自身の意識なり、悩みなり、不服なりが、小・中学校以上に自分の中に出てくるから、そういった場合における処置として、相談にのるなり、解決する場がないのも一つの問題だね。たとえば、友だね、同志があるとか、またクラブにおいてそれができるとか、色々な場があるのが望ましいのだが、それが少ないというところにも問題が出てくるんじゃないかな……。

最後に

高校の教育について、私達には何も言えないのです。しかしそんな私達であっても、身近に起きている事柄に目を向けてみる必要があるのではないでしょうか。

上のほうから、「高校生の〇〇参加をやめさせよ」と教育関係者はおっしゃいますが、その理由なるものははっきりと理解できないのです。理由？

私達はこう考えました。

〝選挙権のない高校生には、政治活動に参加する資格はない。勉強だけしていればよいのだ、ということは、世の中の不条理な事柄はオトナ達が対処するから、安心して勉強しなさいということなのだろう。〟

それなのに実際、現実はうまくいっていないのです。私達も、それらについて学ばなければならないのです。それにしてはあまりにも浅い私達の知識。高校では教えてくれない知識を、自分自身で感じとり学ばなければならないのです。

それなのに、それすら私たちはしようとしないのです。直接自分に関係ないから、自分のことではないからというのでしょうか。

何事においても好奇心の強いこの青春時代に、私達はいろいろなことに関心をもちます。ある人は、R&Bにのってゴーゴーを踊り、またある人は睡眠薬やシンナーでラリッたり、そしてまたある人は政治活動に参加します。これらはもちろん、学校や家庭の規則では全く認められていないことです。

何故でしょう、いったい学校では彼らに何を教えてくれているのでしょう。

単に知識を詰め入むだけで、頭ばかり大きな人間を作ってしまうのでしょうか。

そんな人間が、これから成長するにしたがってどんな風になるか……末オソロシイことです。

いくら人間形成が行なわれていないなどといっても、何も教育のせいだけではないのです。今、私達がおかれている集団の中で、私達自身をつくっていくことができるのです。まわりには、ぶつかり合える人間がいるはずなのです。こんなことも、私達は忘れているように思われます。

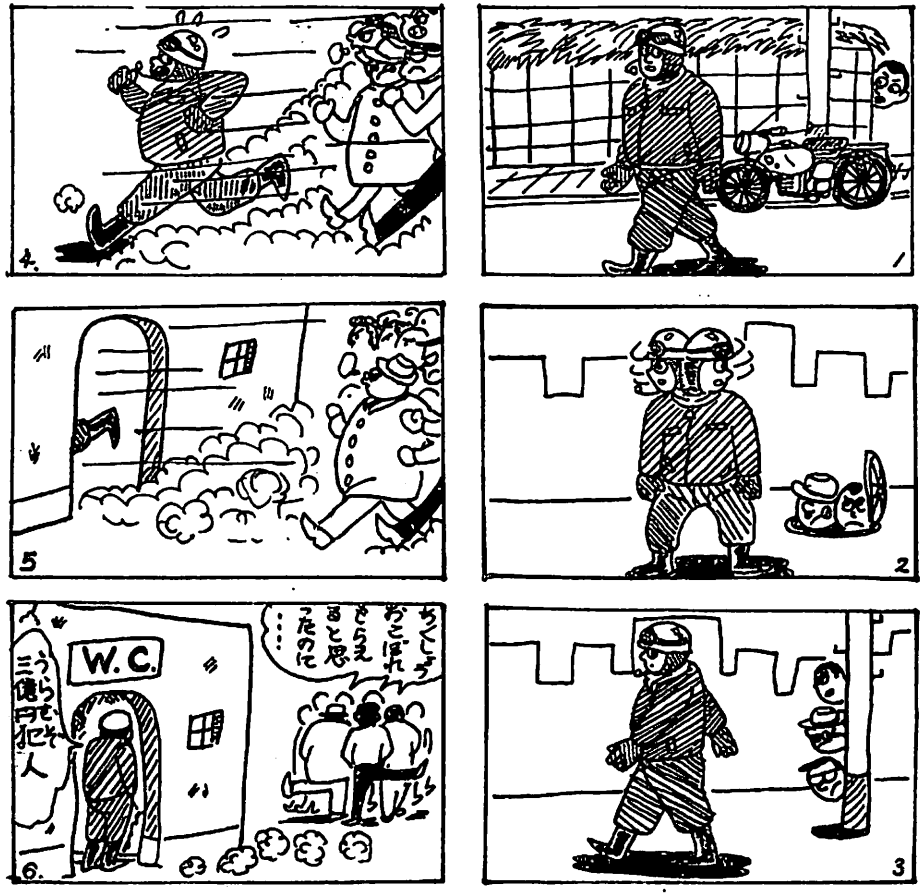
話はコペルニクス的転回となりますが、今まで書いてきたことが、無気力といわれている松高生にどのように受け取られているのでしょうか。

火のもとがあっても、私達のところには、煙が全くたたないのです。いくら回りが騒がしいといってもピンとこないのです。

サテ、いかに私たち松高生が無感覚で無気力であるかということを、一例をとって寝言のごとくたどたどしい言葉で述べてきましたが、こんなことをいっている私達自身、無気力なのかも知れません。

ある一部の有志の方が勇気を出して、寝ている皆さんを起こそうとやっきになっても、今だに寝むりがさめないようみえますが……。

Ask not what your school will do for you and ask what you can do for your school!!



十二月の風

私の悩みを知るかのように
樹々がざわめき
落葉がまいたつ
十二月の風はつめたく
私のすべてをこおらせた
人を愛することも
愛されることも
今はできなくなった

だが　私は進む
まだ遠い春のおとずれを願って
花が咲き　小鳥がさえずり
人の心があたたかくなる春を
そして
人を愛することも
愛されることもできる春を

だが
十二月の風はつめたく
その願いさえ忘れさせるのだ

さびた鍵

銀の鍵はさびました
さびた鍵は
二度と私の心を閉めてくれません

開きっぱなしの私の心
冷たい木枯しが吹き抜けても
雨が入り込んでも
心の鍵はさびたのです
さびた鍵は
二度と銀にはもどってくれません

固くとざされた彼の心
春の日ざしがやさしくても
夏の太陽が力強くても
心の鍵はさびたのです
さびた鍵は
二度と銀にはもどってくれません

銀の鍵はさびました
日本中の鍵屋を呼び集めても
世界中の鍵屋を呼び集めても
銀の鍵は直りません
銀の鍵は作れません
永久に私の心は閉りません
永久に彼の心は開きません

悲しみ

たった一人で遠くへ行きたい
だれもいない砂浜へ
　たった一人でいってみたい
波の打ちよせる静かな波うちぎわで
悲しみをだれに打ち明けることなく
海の中へ捨ててしまいたい

人生

北の野にさみしく咲いた
　色彩やかな　花一輪
人気のない広い野原で
　紫色の可憐な花は
誰にほめられることなく
　年ごとに同じ日に咲き
　同じ日に散る
淋しく広い野原の真ん中で
紫色の小さな花は
北の野の短い夏を
　精一杯に生きている

ひとりごと

斎藤　泉

よく、「受験期には好きなことができない。」とか「受験生に自由はない。」などと言われますが、私にはどうしてこう言うたぐいの言葉が発せるのか不思議でならないのです。

もともと、受験とは（辞書によりますと）「試験を受けること」なのです（無論この場合、問題にしている試験が大学入学試験であることは論を待たないでしょうが……）。では、いったいどうして入学試験を受けるのでしょう。「もちろん、大学へ行くためさ。」こんな単純明確な答が返ってくること、それは火を見るよりも明らかです。しかし、この一見単純明解な答を発する人も、こんな質問にはどう答えるでしょうか。すなわち「では、なぜ大学へ行くのですか。」という質問です。特に、この文の初めに掲げたようなことを言っている人々には、明確な解答を打ち出すことができないでしょう。なぜなら、彼等には、大学へ行く目的がないからに他なりません。（何事にも例外はつきものですが……）

私事で恐縮ですが、私は将来、ある研究活動に従事したいと思っています。そのためにはまず大学に入り、基礎的な学問を修めなければなりません。独力で基礎を修得するという方法もあるにはあるのですが、私のように意志の弱い者には、そうすることはほとんど不可能です。そこに、私が大学を受験する必然性ともいうべきものが発生するのです。このような考え方をすれば、大学を受験するということは、自分のしたいことをするために必要な準備をすることに他なりません。それは、あたかも、サッカーをやりたい人が、より面白くサッカーをやるために、一見、馬鹿らしく見える基礎的な練習を、額に汗しながらやるようなものです。そして、こういうことを把握した上で、大学へ行く目的を考えてさえいれば、「受験期には好きなことができない」。などといった言葉は、決して出てくることはないのではないでしょうか？

確しかに、現在の大学入試制度や、受験生をとりまく社会環境には多くの問題点があります。たった一回の試験で、一人の人間の運命を決してしまうような入学試験、一流校出身でなければ出世できないような職場がたくさんある社会、三年生は勉強だけしていれば良いとでも言いたそうな先生方の態度、受験期は灰色だとか・ゆがんだ青春などとばかりあおりたてて、うるおいを持たせようとしないマスコミ等々、数えだしたらきりがありません。そして、「こんなことじゃ大学へ行く目的を考えようにも考えられない、」とおっしゃる方々もいらっしゃるかと思います。しかし、それが分っているのなら、なぜそれを自分の生きる糧としないのでしょうか。なぜ、「よし、それならばオレは文部省に勤めて入試制度改革の旗を挙げよう。」と思わないのでしょう。なぜ、「よし、それならば私は立派な経営者となって、実力主義を実践しよう。」と考えないのでしょう。なぜ、「よし、それならば僕は教師になって、受験生にうるおいと生きる喜びを教しえよう。」と言えないのでしょう。なぜ……。

「人間は社会的動物である」と言ったアリストテレスは何を考えてそう言ったのでしょう。彼は、「人間が社会を構成し、社会制度

を作り出す反面、社会が人間に影響を与え、社会制度が人間を規制する。」と考え、「だから、人間は社会を変革しなければならない、」ということを暗示したのではないでしょうか？この解釈の肯否はギリシャ哲学の専門家にまかせることにして、私はこの言葉からこう考えたのです。人間の価値は、その人間がいかに多くの物を作り、残したかによって、（その作られたものが具体的なものであるにせよ、抽象的なものであるにせよ）決まるのではないかと……。そして、人は自分がやりたいことを全力を出してやっているとき、その行為の成否は別として、最も幸福であり、何かから愛されるときではなく、何かを愛しているときに生きがいを感じるのではないかと。そしてそれだからこそ、自分のやりたいことのために全力を尽くすことがすばらしいことであり、目標を達成する過程にある困難は、それがどんなに高い壁であろうとも、それに自分の能力の全てを傾けて立ち向かえば、苦にならないであろうことを、私は主張したいのです。

昭和四十三年十二月初旬、教室にて記す。

シンナー遊びについて

大脳　愛子

こんなことで死ぬなんて、まったくバカバカしいことだ。と人は言うだろう。けれどよく考えてみると、ずい分幸せなんではないか。夢の世界へ入りたいと思ってシンナーをスーッと吸ったら直通で軽く未知の、永遠の夢の世界へ入って行けたのだもの。きびしい現実の世界から完全に逃避できたのだもの。まあこれは結果論なのかもしれないが……。

シンナー遊びがやって楽しいものなのかどうかは、自分自身やってみないとわからないが、見ていると妙にむなしくなる。一人前の体格している人が、ゴミを入れる位のポリ袋を口にあてノソノソ歩いてるのなんて見ると、涙が出てきちゃって、「ヤメテ！」ってすがりつきたくなるのだ。他の人も、私のようには思わなくとも、不快になったり、悲しくなったりするであろう。それは、若者本来の姿でないからである。そんな現実逃避は許されないからである。

しかしこれはシンナー遊びに限らない。たまたま流行となり、人が死んだりしたからクローズアップされただけである。今までだって不健康な若者はずい分いろんなことをしているのだ。シンナー遊びがすたれる頃というのは、又、違う流行が出来た時だろう。だからここで「いかにすればシンナー遊びをやめさせられるか」という近目な問題の結論を考えても仕方ないと思う。

いくら楽しいからと言って死ぬまでシンナーを吸っているだけの人間もいないだろうし日本中の、世界中の人間がシンナー吸っているわけでもないのだから、そうムキになることもあるまい。

こんな私を無責任だと思われるかもしれないが、実際どうしようもないことではないだろうか。社会のゆがみと人間の心のゆがみによって発明されたこの遊びを、非難しつつ心の中では（やってみたいナ）と思っているのは、私だけではないであろう。

幻想なのかそうでないのかわからない

またアリスのように深い穴に落ちこんで異様な怪物に追い回された。というより自分自身が怪物にならざるを得ないという風だった。いつもそこにはキリストに似た人が十字架に逆さにはりつけられている。たしかにそこは私の聖地であったはずだ。ところがその私の聖地ではいつも暴動が起こり逆さにはりつけられたキリストは無残にも先の尖ったヤリで刺し殺されてしまう。そこで私は恐ろしさのあまり所在を失って路上にぶっ倒れてしまうのである。その時の恐ろしさというものをどう表現したらよいのか。それはただオソロシイということなのであるのだが時間というものと空間というこの二つのわけのわからねいものの中に私だけが放り出されてしまうようなそんなオソロシサなのである。一人鏡を見ていたら誰かによって不意に鏡を割られ、鏡を見ている私の実体が消し飛ばされて割れ落ちた一片の鏡の中を私がどこまでもどこまでも落ちていって、しまいには消えてしまう。私は鏡があるから私がワタシであると認識することができるのである。その私がワタシであるとこうことを認識させる対象物が消えてしまうのである。私の感覚は奪い去らいて私は私がワタシであることを見失ってしまう。私の聖地では暴動が続き破戒が行なわれ、やさしさは土色の地面にへたばっている。ドロドロした赤い血はキリストに似た人の内側の腹部から頭部に向ってくだりはじめた。青い顔をしたハゲ頭の山賊が紫のたいまつを高々とかかげ、キリストに似た人を黄色い霊柩車に乗せて山の向う側へ運び去ってしまった。私の眼球はおとろえ、わずかに細い神経腺にぶらさがっている。

アリスは大きくなるお菓子やドリンクのために自分が消えてしまうまでには至らなかったが、かわいそうに私は私の知らない怪物に成ってしまうのである。あくる朝目をさましたら銅はラッパに成ってしまっていたのである。

私がその深い穴に落ちたのは決して偶然ではない。それは私が落ちたいと願ったからに他ならない。その深い穴の中には私の知らない世界があり、私を超越したところの、自己の存在というものをしっかりとらえた私としてのキリストが居るかもしれないのである。私は無意識のうちにもう一人の私を想定している。ところが私がやっとみつけたキリストはいつもすでに殺されているのである。そこに私は私自身の本質的な追求ということへのあきらめ、世に対する無常観というものの発路を見ることができる。

私は私が信じていたところのキリストが死んでいたということを認識する間もなく自己を見失ってしまう。それは発狂の瞬間か死の瞬間である。

一八九〇年七月二十七日ゴッホはオーヴェールの強烈にうねった心象の色彩畑の中で自分の胸へと弾丸をぶちこむのであった。

「人は必ずしも、われわれを閉じこめ、壁で囲い、あるいは埋葬までしてしまうらしいものが何であるのかをいうことはできない。だがしかし、何か得体の知れぬカンヌキが、格子が、壁があることを感ずるのだ。

こんなことはみな空想なのか、幻想なのか。ぼくはそうは思わない。そこで人は自問する、ああ、これは長い間つづくのか、いつまでも、永遠にこうなのか。」と

ゴッホは彼の死の一ヶ月前に、彼の最後の自画像を描いている。その自画像はそれまでの幾十枚かの彼の自画像とは確かにちがうものを感じさせる。それは踏み荒され狂乱したゴッホではなく、青いうねりの中に静かでぶきみな、大へんオッカナイゴッホなのであるということだ。そしてその画面の中には得体の知れぬ門も無ければ、彼を囲む格子も壁も無いようだ。そして現実の不定な存在感というものを超越したところのゴッホが存在している。全ての感覚を解放されたどっしりと存在しているゴッホなのである。おそらくそのゴッホは彼が盲信したところのキリストであるにちがいない。私のキリストは私の発見を待たずしてすでに殺されてしまっているのだが、彼のキリストは死んではいなかった。その代りに彼自身が死なねばならなかったのではあるが。

私の聖地ではあい変らず暴動が続いている。黒雲がものすごいスピードで飛び、イナビカリが遠くの山の山腹にさしかかった霊柩車に直撃弾をあびせ、ショートの時の青白い光を残して霊柩車は爆破した。

大つぶの雨が落ちて私の生まれた頃の私の知らない記憶がむらむらとしみのようにわきあがり、私は時間と空間を失ってすい込まれるように記憶の中にはいり込んでしまった。

三十四億人の問題『戦争』

松尾　明

戦争というものを言葉としてだけでしか知らない僕のような者がこんなことを書くのも何だが、その悲惨さはここに書く必要もないくらい多くの人に言われている。が、忘れた人のために、又知っている人に対してもそれを強調するために次のいくつかをあげる。

話しやすくする為に今ここに我々の感覚としては程遠いその戦争なるものが起こったと仮定しよう。まず我々は、なぜ又いつ起ったかもわからぬ戦いのうずの中にいるだろう。なぜならば政府は国民に心配をかけず――というよりは知らせる必要もなく未然に防ごう

とし、その結果かえって事を悪化するからだ。大気汚染ということも考えてまさか『ボタン押し戦争』は絶対にやらないだろうから、どうしても多くの兵力が必要となり君は当然徴兵にひっぱられるだろう。いやそうなるのは君ばかりではない。事情によってはアナタまでも……！又それゆえに結着がなかなかつかず長びき、ミミッチイ都市の爆撃が続き、それだけに一層残酷さが増す。怪獣映画でおなじみの建物の破壊シーンと相成る。もっとも加害は怪獣でなく『敵の弾丸アーメアラレ。打った弾丸ガバ。』というわけではあるが。今上げたような文明の破壊が相次ぎ、尊い（？）数多くの人命が失われ、金は税という形で国民から吸い取られて事用費となる。これすなわち個人の尊重がなくなった状態だ。これらは勝ち負けに関係なく、両勢力にある。だからこれが負けた日にはたまったものではない。その勢力は前に上げたことの敵よりも大きな打撃を受け、賠償金をドッチャリと持って行かれ、植民地化をされ、そして半永久的に自由は望めなくなるのだ。

では、このような戦いを人間はなにゆえに起こしたのであろう。やはり、それは経済的理由のみからであろうか。確かに表面上は自国の経済のストップを防ぐはけ口として戦争に持って行くようではあるが。しかし例えば武力によせる世界征服というのがある。（この心境、親指の体操で三百出した時のそれに似ている。もう少しガンバれば五百くらい簡単に出せそうに思うだが、そうはいかずに苦労してみんな擦ってしまう――それも台によるが。実際の（世界征服）場合も常にコレと同じで征服されたことはない。ないから独裁にもならずこんな生活をし、こんな内容のこんな文を書いていられるわけだが、これも神のはからいか、しかしそれにしてもひどい！三百止りとは……。）これが経済的理由だろうか。相手国の物を勝ち得て自由の富とすることと。世界を征服し支配することとは全く異質のものであろう。僕はこれが俗に言う闘争本能であると考える。（つまりこの場合、経済的原因ばかりではない。）例えば人間から戦いというものを絶対になくそうと思った者がいたならば、彼はタイムマシンで大昔に行きカインを抹殺しなければならない。つまり戦いというものは本能に支配されて起るものなのだ。しかしその本能が、人々の言うように『人類を破滅に導く』であろうか。種族を滅亡させる本能というものはあり得ない。よってそれによる利点も数多い。これからしばらくその良い点を掲げてみよう。

まずその表面上の目的、すなわち経済の進行を図るということは達成されているわけだ。国の経済が何かの関係でストップしそうになった時、そのはけ口を戦争に求めるということはさきほど書いた。つまり戦争をしなければその国全体は滅びてしまうのだ。と書くと、この戦いを持ちかけた国がまるで一単位として利己に聞こえるだろう。しかし（これも例えばだが）その国は資源の不足により経済不活発ということがありうるだろう。そしてもう一つの国が未開だが資源が豊富であるとすれば（資源の）貧しい国がそのもう一方の国の富を得るのは当然だろう。そうしなければその国は滅びてしまうのだ」、そうしてもその未開国の生活がその日からできなくなるというわけでもない。その時、これを拒否する未開国のほうが利己ではないだろうか。拒否されれば（資源の）貧しい国は武力に訴えるのも当然だろう。むろん実際におけるこの問題はもっと微妙だし、その他の事も複雑にからんでくるから戦力が同程度の国どうしが戦うということ

にもなり、内容はフンジャラメッチャラチャチャメチャクチャとなる。よって前にもいちおう悪い点として書いたように、多くの人命が失なわれ、多くの破壊なされる。しかしこれが悪い点であろうか。例えば、北極産のレムミングという動物がいる。彼らの子孫を繁栄されるための小数を除いた大部分は、種族の数がある程度以上ふえると、大移動を始め最後にその行例は海に飛び込み自らの命を断つのである。これによって残った種族は食料難を向えることもなく繁栄でき、死への大行進は種族維持の役目をりっぱに果たしたのだ。そしてもし多くが自滅しなかったなら、彼らは食料難から滅びてしまうのだ――。

むろんこれは本能である。人間の本能の一つ『戦い』もこれと同じ要素を持つものだろう。人間の科学でもそれほどパワーはないから人口過剰は防げない。それに他の動物と違い微妙な点が大きく左右する。高際的にいうと人口過剰による生産増大の要求と多くの失業その結果の経済ストップというものになる。しかもこれは一度初まったが最後なかなか止められないのだ。このトラブルは何としても国内で解消できるものではない。よって戦争。まずみんな兵力としてつぎ込んだり兵器が必要となるので失業もへり経済は立ち直して来る。あとは戦死で人口が減り、破壊で仕事が増し経済は立ちなおる。この解消のし方はすごく動物的に聞こえるかも知れないがふやすというのも無理だしふえちまったからしようがないというわけにもいかないのだ。それとあと一つ忘れてはならない戦争の大きな利点――『科学の進歩』『文明の発達』の。利点としてこれらを上げるとこれは悪い点だと思う人も多いだろう。確かに相手に大きな打撃を与えるための進歩ではあろうが、例えば二次大戦で一躍発展を遂げた無線連絡技術は現在なくてはならないものである。他にも例を上げるならV2号に初まったロケット、サブマリン、ディーゼル機関、それと今でも残っている軍用道路などがある。戦争がなければ現在の生活は今ほど楽でないだろう。それにこれは戦争中においても戦いを速く終らせ時間の無駄などがないのである。

ここで全体的な漠然とした内容から飛んで僕の近辺のことを申し上げる。我がクラス一年B組のある女に聞いたことだが彼女のことをごく簡単に書く。二七年四月四日に生まれ、父母姉それと彼女の四人家族、出席番号四十五番で六十八年後期の生徒会の書記をしていた人。頭文字はMSであえて名前は申し上げないがこれがすこぶる簡単な彼女の説明である。ところでその聞いた事『戦争とは何か』。彼女いわく――戦争とは恐いもの、悪いもの。みなが冷静に考えればなくし得るもの……。彼女のようなことを考える人も数多いだろう。いやほとんどがそうだ。眼前のそれも自分のことしか考えていない。団体あっての個人だ！。

戦争は原因的に自分と何の関係もなく自分はとんだ被害者などと思っている。（これが一般生徒に生徒会は生徒一人一人のものだとおっしゃったおかたの考えですゾ！）しょせん反戦とは戦争の必要性を考えず現在の自分のことしか考えぬ利己的精心にほかならない。戦争は長い眼で見れば大きな進歩なのだ。歴史の一ページは血を持ってしか開かれない。人類が進歩を望むならそして子孫の大いなる繁栄を望むなら、世界征服という意味のない戦いを除いては必要に応じておおいに戦うべきなのだ。

『拝啓自治委員長殿』

後期会長　小見山　一正

このたび御卒業を祝して、さっそく惜別の御挨拶を申し上げねばと、筆を取ったしだいです。また一つには、生徒会に対して、日頃私が抱いている考えを述べてみたいのです。

まず、委員長自ら、輝かしい松高生徒会の発展の一ページを作りあげた数多くの業績に対して、心から敬意を表わすものです。

しかしながら、私が生徒会活動の一翼をになうことになってから、内から突きあげる矛盾を細かに分析してみる時、矛盾の方向に、何を隠そう、あなた方が巨大に立ちふさがっているのです。この矛盾と戦っていた矢先、あなた方も御存じの通り、かつて（最高学年当時の十一月の総会）あなた方御自身の意見を聞き、憤りを感じたからです。

そして、書かねばならないという、ある使命感を持って書き始めたのです。というのは、松高生徒会活動自身の意味を失わせた根本的原因が、実にここにあると思うからです。つまり委員長を含め、いわゆる生徒会活動に関心を持っている人々（むろん私も入っていますが……）は、時代の変革の旗手であるし、松高もこういう人々でもっているのだと思います。しかし、私があえていいたいことは、率直にいうなら、うぬぼれるなということであります。私なりの論法で、委員長及びその仲間の方々の鼻づらをへし折りたいのです。

まず「関心がある」ということの正体は何でしょうか。それは、あたかも実体のある理想像であるがごとくふるまう一つの像にすぎないのです。無関心打破を叫ぶ者が「関心ある心」を自ら叫ぶことによって支えているのです。そして、「関心あること」それ自体に関心を持っているのではないのでしょうか。私自身、運動部、文化部の部員の諸君に対して、部員たる前に一個の松高生としての自覚を持て——

などと、まったく自分にとってもよく分らないことを叫びつづけてきました。

しかしこれは、〝笛吹けど踊らず〟というたとえの通り、一人芝居で終り、会員に相手にされなくなってしまったのです。私は、委員長及びその仲間うちに聞きたいのです。「なぜ関心を持たなければならないのでしょうか。」と。すると、大部分の人々はこう答えるでしょう。「それは、我々の義務だから。」と。その他いろいろな、勇ましい言い方があるでしょう。しかし、いくら何でも、現在の我々の芝居になっている生徒会活動を思うと、反発を感じないではいられません。既成の常識をもって、人間を割り切ってしまってはならないのです。まず、自分自身に対して根本から問いかえしてみること、それが第一なのです。

委員長殿、あの総会（十一月）での発言—君達は関心がない——とおっしゃいました。もちろん、これにこだわるわけではないのですが、あなた方は、この言葉一つでいっさいの問題を解決してしまったようにみえるのです。しかし実際には、これだけでは何の解決にもなっていないのです。

関心を持つこと——これを一種の義務として、強制しているのではないでしょうか。

ここで、私は疑問がわいてくるのです。H・Rつまり「活発でないから、もっと充実を」と。彼らの理想は「全員参加で熱の入った意見の交換の場」です。そして現実と理想とが一致しない理由を、無関心な人々のせいにしている。これは何も、無関心な人々が悪い訳ではない。もちろん「話し手」がへただというわけでもない。原因は、その活動自体が意味を失っているからです。はじめから「こうあるべきだ」と決めつけてしまうからこそ、我々自身の、具体的な欲求が問題にされなくなるのです。

なぜ執行部は、皆なの中に存在せず遊離してしまったのでしょうか。今までの執行部は、末梢的な問題を追いすぎたのではないでしょうか。関心がないことが、不活発の絶対的原因であれば、関心を持つように努力することが解決の道ですけれど、関心ある人々が、すぐこれをみつけて解決しようとしたその結果が、会員と生徒会執行部との分離という形で、現われたのです。

何も「関心ある人々に」対して、関心を持つな、無関心になれと言っているわけではありません。ただ、私達の囲りの関心ある人々の持っている「うぬぼれ」に対して、私憤をぶちまけただけなのです。委員長自らの妄想（これこれであるべきだという、自分の規定）を絶対化し、それをもって他を批判することは、自分自身のイデオロギーを〝客観的真理〟の名のもとに絶対化し、ここで一躍自分を神格化することなのです。ここのところだけは、胆に命じて忘れないでほしいのです。

なんのかのと、言いがかりをつけてしまい、あなたの自尊心を傷つけたことをおわびします。しかしこのことは、あなたの仲間にも言えることなのです。

御卒業を祝し、あなた方の功績に敬意を払うとともに、生徒会を愛する心から、あえて一言の苦言を呈したわけです。

自治委員長殿、元会長の寛容を持って、平に御容赦下さい。

リレー紀行　甲斐駒登山
駒神社―七合目

泉田茂二

夏山もそろそろ終りを告げようという頃、Kと私は南アルプスの駒ケ岳（二九六六M）に登った。

私は、八月の中頃Kを山にさそった。山キチのKは、すぐ話に乗ってきた。どこに登るかでかなりもめたが、、結局甲斐駒ケ岳に登ることに決まった。

台風が接近して出発が一日遅れたが、二泊三日（車中一泊）の予定で、八月十七日二三時四五分まだまだ人通りの多い新宿を後にした。

翌日の三時五六分、列車はまだ夜の明けない韮崎駅に到着。我々は、まだ星の光っている空の下、ホームに降りた。この韮崎駅は南アルプスの駒ケ岳、鳳凰三山奥秩父の金峰山瑞牆山などの登山基地である為登山客が多く降り、駅の待合室はたちまちいっぱいとなってしまった。

雨音で目がさめると、バスは雑木林の中に止まっていた。甲斐駒神社バス停に着いたようだ。隣を見ると、Kはまだ寝ていた。他の乗客は皆下車していった。さっそくKを起こして我々も下車し、無料休憩所に飛びこんだ。

この休憩所は無論窓などない。ただ屋根があるだけである。しかしこの屋根としても穴だらけでそこら中雨もりがする。バスで同じだった登山者はポンチョ[1]をつけて出発して行った。しかし韮崎駅で降り出した雨は、一向に止む気配はなかった。我々は、ともかく待つことにした。甲斐駒神社から登り始め、笹平を通って黒戸尾根に入り、黒戸山を頂上直下で巻き、五合目に来る。ここで昼食を取り、七合目まで行く。そこで泊り、朝駒ケ岳を登り同じコースを下る予定であった。しかし、この雨で予定通りいくか怪しくなってきた。

一時間近くたつと雨も小降りになり空も明るくなってきたので、我々もポンチョをかぶり出発した。五分も歩くと駒ケ岳神社であった。

ここで登山者名簿に記入。もし我々が遭難したら遭索の大事な手がかりとなるものである。この頃、この登山者名簿を記入しない登山者が結構多いという。全くふざけた事だ。もし、遭難したらどうする気だろう。この登山者名簿、どこにでもある普通のものでメンバー・住所・連絡先・所属山岳会・勤務先か学校・コースを書くようになっている。この形の登山者名簿はコースの欄がわりと小さい。もっと改良の余地があるようである。北アルプスへ行くと、ほとんど登山者名簿は登山者カードになっている。カードの方が楽に書けるし（名簿は、ノート状になっていて書きにくい。）コースなど詳しく書けるので良いと思う。このカードも場所によって色々である。普通、カードの色は白であるが、大町では黄色であった。そして驚いた事には裏に広告がのっていた。もっと、詳しく記入するカードは富山県の立山に近い小見という駅で見たものであった。前記の書く事項以外に装備から食料まで書くようになっていた。冬期登山禁止条令など作って、登山に神経質な県だけはあると思った。このカードを一枚ちょろまかしてこなかったので、今、後悔している。登山者名簿やカードは、市町村がそれぞれうけもっているので種々様々である。

さて、我々は登山者名簿の記入も済ませ、いよいよ登りとなった。まず、雨で濁り増水している尾白川を吊橋で渡る。足元を見るとちょっとぶきみな感じをうける。登っていると視界がきかなくなった。どうやら雲の中に入ってしまった様である。雲の中は、時々、雨粒が落ちてくるだけなので、むし暑くてたまらなかった我々は、ポンチョをかなぐり捨ててしまった。なにしろポンチョはビニール製なのでむし暑くて……。たいして急でもなく、雑木林の中の道は単調であった。我々より先に出発した登山者達を追越す頃になると、快調に飛ばしていた私は、だんだん調子が悪くなってきた。どうにも足が重くてピッチが上がらない。そのうち頭がボヤッとして来た。どうやら寝不足のようだ。なにしろ列車の中は混んでいてうるさかったので、三十分位しか寝ていないのである。私が寝むたくて、寝むたくてしようがないというのに、Kはピンピンしている。彼もあまり寝ってないのだが……。寝むたくてどうしようもないので、いい場所を選んで十分間寝ることにした。たった十分ではあったが、私にとって天国にでもいるようであった。その十分も過ぎ、また歩き出す。寝む気も、どこかにすっ飛んでしまった頃、我々は水場に着くことができた。

この水場、樹林の中にあり、うっそうとしている。水は熊笹の奥から、かなりの勢いで流れて来る。先客が四、五人いた。彼らは皆山は初めてみたいであった。三十才代の男達で一応のカッコウはしていた。そして足には真新しいキャラバンシューズをはいているので、我々は彼等を、キャラバン隊と命名した。本来、キャラバン隊

とは、ヒマラヤなどでふもとの部落からベース・キャンプまでのアプローチを隊員・シェルパが荷をかついで登る隊のことなのだが。[2]後から着いた連中の中でビールを飲んでいる者がいた。「行動中、アルコールなんて飲んだらバテること違いないのに。」等と話しながら我々は出発した。笹ノ平まで来るといよいよ急な坂が待っていた。一歩一歩ゆっくりと全身の力を入れて登る。この急な坂も切れ、尾根に出る頃、我々はやっと雲の上に出ることができた。雲の切れ目からは、下界を見ることができた。緑の田んぼや、家のトタン屋根が白く見える。途中で追越したキャラバン隊もやって来て、「やあー！見えるぞ。」等と言ってはしゃいでいる。うっそうと茂った原生林の中の雨も上った尾根道は、回りは苔でおおわれ、人もいず、時々寂しくなるような感じさえする。木の枝の間からの日光が私の目に入り、日がさしてきたかと思いそちらを向くと、そこには、八ヶ岳が横たわっていた。一番右が八ヶ岳最高峰の赤岳、その次が横岳、硫黄岳と続いていた。もっとあの赤岳の頂上にも登山者がいて、こっちの方を見ているだろう等と思いながら足を運んだ。そのうちKのペースが遅くなったのに気がついた。「どうしたんだよ。」「寝むたいんだ。」「もう少し行ったら十分位寝ろよ。」「うん。」ということになり、我々は鳳凰山が見える所で休むことにした。やはりKも普通の人間であった。代り番こに寝むたくなっていれば世話はない。ここからの鳳凰山は手をのばせば届きそうである。地蔵岳の地蔵仏石のひゅっとのびたのは印象的である。

空の青い面積はどんどん広くなり、太陽もこの山全体を照らしていた。しかし、この夏の日光も、この山では秋の日光と言った方が良い様であった。Kの寝む気も、どこかに行ってしまい、我々は快調に飛ばした。急に我々の視界をさえ切る物がなくなり、変わって目に飛びこんできたのは、[3]リッジであった。刃渡ノ倉である。黄土色の岩がナイフの様に立っていた。そして我々は、このナイフの刃の上を歩くわけだ。足を踏みはずしたら、大けがをするか死ぬかである。さすがに我々も緊張する。しかし、心はわくわくしていた。二・三十メートルも行くと、緊張から解放され、また原生林の中に入ってしまった。

この山、駒ヶ岳は昔から信仰山として人々に登られていた。その為、いたる所に小さな祠や石碑が立っている。江戸時代は白装束に身を固めた人達が、今我々が登っている道を登っていたのだろう。

刀利天狗が過ぎ、黒戸山を過ぎ下りとなり、五合目が近いことを我々に知らせてくれた。いやが上でも我々の足は速く動き出した。五合目の小屋が下に見える頃、ふと顔を上げると黄緑の屋根に白いものがある。なんだろうと良く見ると小屋であった。七合目の小屋である。五合目から一時間も登れば着くだろうなどと思っているうちに五合目に着いてしまった。十一時であった、腹もへったのでさっそく小屋に飛びこんで休憩をたのむ。小屋には、小屋番の義作爺さんと、十九位の登山者が二人いた。彼らは途中で我々を追越して行った連中だ。さっそくお茶をすすりながら昼飯のパンをかじる。ろくな朝飯しか食べていない我々にはうまかった。じかしそのうち、汗ばんだ体が小屋のすき間から吹きこむ風で寒くて、寒くて……。この小屋の義作爺さん、さかんにここに泊れと勧める。しかし七合目の方が展望も良いし、朝は登るにも楽なので我々は七合目まで行くことにした。義作爺さんに茶代を払い我々は出発した。

都立松原高校図書館蔵書

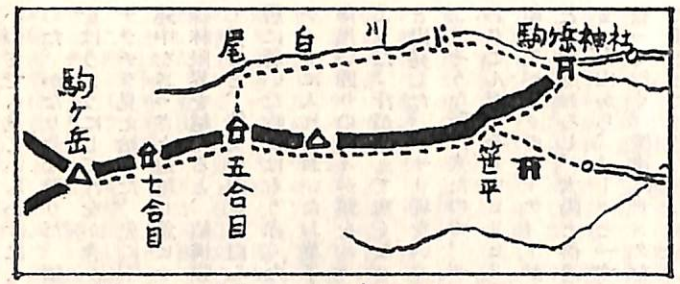
まず、高さ五十メートルの屏風岩を登る。この岩は我々の目の前にでかんと座っている。二・三十メートル位をはしごで登る。まずKが登り、登り終ったら私が登った。それからはしごや鎖で登る。岩を過ぎるとまた樹林の中に入る。はしご・鎖・鉄線が随所にあるが、なんなく過ぎてしまった。いい気になって歩いていると岩にぶちあたった。不動岩である、高さが十メートル位でステップはついているが、ほとんど垂直である。ステップと鎖でよじ登ってしまった、ふと横を見ると、遠くの青い空に、山が見える。良く見ると北アルプスであった。槍の穂先みたいにとび出ているのが槍ヶ岳、そうすると手前が穂高連峰である。片手回しを通過すると、小屋が見えた。やっと七合目に着くことが出来た。

小屋で宿泊手続きを済ませると、我々は小屋を飛び出した。[4]小屋の裏の岩で菓子を食べたり雑談をしながら、我々はトカゲをした。東北を見れば八ヶ岳、南西を見れば鳳凰山が見え最高であった。日がポカポカとして気持が良く（高山では夏でもじっとしていれば春みたいである。）いつしか二人とも寝てしまっていた。

七合目―頂上―駒神社

倉本祐司

一時間ほどたって僕達は「ふっ」と目がさめた。右側を見てみるとはるか下まで何もない。もし寝ぼけてねがえりでもうったら、一巻の終りだった。いいかげん岩の上もあきたので下におりて小屋の前を行ったり来たり。やがて四時近くなったので小屋に入り天気図を書く。



甲斐駒ヶ岳概念図

さて、いよいよ夕食だ。小屋の出してくれた夕食はカレー。このカレーを食べて僕はガッカリ。味はよくないし量も少ない。こんなのだったら自炊の方がよかったと思った。これからは絶対どこへ行っても自炊に限ると思った。大食いの僕にはちょっとばかり苦しい夕食だ。足りない分はお菓子でカバー。

日が暮れるのにしたがって気温が下がってきた。僕達は食事を終え、小屋の外へ出てぶらぶら散歩していた。すると小屋の中からおむすびがコロコロところがり出てきた。そのすぐ後を、小屋のおねえさんがおっかけている。やっとのことでつかまえたおにぎりをだいじそうに握りながら小屋の中へ入っていった。あの調子だとだれかの朝めしの中に入りそうだ。Sと僕はこの光景を目をまんまるくして見ていた。そして、大笑い。今だかってこんなシーンにはお目にかかったことがない。寝る前に朝飯のおむすびをもらったが、自分のところにさっきのおむすびが入っ

ていないかと心配だった。外はもう暗い。まわりの連中はとっくにグーグー寝ている。僕はもうちょっと起きていようと思っていると、Sがザックの中から〝ナニ〟を出してきて「飲もうぜ!」と言いだした。結構寒かったのとそれに疲れていたので一杯ゴクリ。Sも一杯、そしたらもうからっぽ。何でも合宿のあまりだそうだ。だいぶ寒くなってきたので毛布にくるまった。しばらくチーズをかじりながら雑談していたが、いつの間にかスヤスヤ寝てしまった。キャラバン隊はふざけやがって、ビールで宴会をしていやがる。まわりの連中は疲れてすぐねちゃったので、おこられずにすんだが、なんと非常識なことよ。

三時三十分、僕はSにたたき起こされた。まわりを見るとほとんどの連中はもう起きてガサガサ動きまわっている。僕は目をこすりながら大きなあくびを一つした。まだ少々眠り足りない感じだ。昨日の〝ナニ〟がきいたのだろうか、グッスリ眠った。たった一杯だったが横になってからのことは何も覚えていない。外はまだ真暗だ。小屋の人の話だと日の出は五時五十分。すぐ出発して御来光を迎え、頂上で朝飯を食べるということに話は決まって、さっそく準備にかかる。手さぐりでお菓子をかたっぱしからザックに詰め、熱いお茶を飲み、靴をはいて四時きっかりに小屋を出た。スバラシイ!快晴だ。風は強くとても寒いが、かえって眠気を吹き飛ばしてスッキリさせてくれる。頭の上には星の海が果てしなく広がっている。彼方には黒々と秩父の山々が連なり、その麓の所で町の明りがチカチカ輝いている。心の底から何ともいえないうれしさがこみあげてきて落ちつかない。僕達はちょっとの間この景色に見入っていたがいつまでも見ているわけにもいかないのでエッチラコッチラ登り始めた。かなり急な登りだ。頼りになるのは懐中電灯だけ。大きな岩をはうようにして汗をかきかき登っていく。やがて上の方に明りがチラチラ見え始めた。先に下の小屋から出発した連中だろう。この連中をさっさと追越し急ピッチで高度を上げていった。

森林限界を越えると、結構強かった風が一層強くなった。ふりむいて見ると、秩父の山並が白み始めていた。そして僕達が八合目の鳥居に着いた時にはもう赤くなっていた。僕は岩の上に腰かけて、ポケットに入れておいたお菓子をポリポリ。足下には雲海が広がり、薄黒い囲りの山々が頭をニョッキリ出している。まるで海の小島のようだ。汗が冷えて寒くなってきたので懐中電灯をしまってさっさと出発した。クサリ場をいくつか過ぎると御来光を迎えるのに丁度よさそうな所に来たので、ザックをおろし大きな岩の片すみにすわりこんだ。そしてヒリヒリする手のすり傷を気にしていると、一組のアベックのパーティーがやって来た。向こうも御来光を見ようと荷物をおろし、太陽と僕達の間に割りこんだ。そのうち真赤に染まった山から、パーッと一すじの光がさし始めた。太陽はかけ足で登って行く。僕達はザックを背負い早々にこの場を立ち去った。まだ頂上までは急な登りが続いている。吹きつける風もなんのその。ジッと地面を見つめながらひたすら登っていった。チラッと頭を上げると頂上が見える。僕達はピッチをあげた。頂上がジワリジワリと近くなってくる。そして数分後、ハアハア息をきらしながら甲斐駒の頂上を踏んだ。二九六六メーターからの眺めは素晴しい。三六〇度の大パノラマだ。目の前にはカールで有名な仙丈岳が。その左手には日本で二番目の高さで印象的な形の北岳。そして、富士山は

もちろん鳳凰三山、八ヶ岳、秩父、中央アルプス、かすかに北アルプスも見えた。空は真青。雲は真白。じっと上を見ていると、まるで宙に浮いているような気がしてくる。ここには人の手の加えられたものは何一つない。スバラシイの一言につきる。さてここで小屋でもらったおにぎりを食べる。お腹がすいていたのであっという間になくなってしまった。しかし、これだけではとても満足できない。持ってきたお菓子を色々入れてみたが、一向にこたえない。

「山に来て腹のへった苦しさよ
　何物かを腹満たさん。」

頂上は眺めは良いがそれだけ風が強い。汗がだんだん冷えてきて、僕達はブルブルふるえていた。Sが「寒いからヤッケを出せよ。」と言ったので、ザックをあけてみるとビックリ。中には食べ物と水しかはいっていない。Sはこれを見てブーブー。「おまえが持ってこないから寒いじゃないか」「いれとけよと言ったのに忘れやがって」「チェッ。せっかく持って来たのに何もなりゃしない。」「わざわざ持って来たのにむだだったな。」と、東京に帰るまで言っていた。

いつまでも頂上でふるえていてもしかたがないので、僕達は摩利支天によって帰ることにした。摩利支天までの道は不明瞭だ。少しでも足も滑らせたり石車に乗ったりすると、谷底まであっという間に転落してしまう。三十分ほど冷汗を流してやっと着いた。ここから見る甲斐駒は大きく美しい。一休みした後、再び頂上へ引き返えした、登りの方がずっと楽で面白い。尾根上にはあっけなく到着。僕達はすぐ小屋に向って下降し始めた。

小屋に屋に着くとすぐ下山の準備にかかった。水を補給し、ザックをきれいにパッキングしてさあ出発。この夏最後の山だ。ゆっくり味わいながら下る。しかし登りと違って下りはあっけない。来る時最高に苦しかった所もピョコピョコ軽快に下っていった。五合目もさっさと通過。黒戸山の巻道に入った時に、花こう岩で白く光る甲斐駒に別れのヤッホーを送った。ヤッホーは谷から谷へ、峰から峰へと響き渡って消えていった。

一休みした後、僕達は巻道をいい気持で下っていった。すると突然、僕は木の根っ子につまずいてひっくり返ってしまった。幸い地面がやわらかかったのと、僕が気敏で思わずザックの方からたおれたのとで事なきを得たが、この時のカッコウといったら思い出すのも恥しい。アゴをつき出し、アンヨはちぢ込まり、腕は腹の下になってまるでカエルがぶっつぶされたみたいだった。Sはというと、後の方でカラカラと笑っていやがった。僕はショックで少しの間この格好で動けなかった。小さい時から赤面対人恐怖症の僕には、そばに人がいなかったことが唯一の救いだった。

ヨッコラセと起き上って服をはらいながらゆっくり降りて行くと、どっかの大学のパーティーにあった。かなりの荷物を背負い、足を引きづるようにして歩いていた。そして中に数人小さなザックの者もいる。多分上級生だろう。その中にピッケルを持っている奴がいた。夏山に、しかも南アルプスにピッケルを持ってくるということは何を意味するのだろうか。

このパーティーを後に見送って、僕達はまたもとの様にエッチラコッチラ下り始めた。眺めはとってもいい。Sと僕は、休んでは眺め休んでは食べというふうにのんびりのんびり下って行った。やがて鳳凰三山とも別れ樹林の中に入った。樹林の中の道は悪かった

が、飛ぶ様に下って行った。笹平の水場でゆっくり休み、神社に向って再び下り始めた。途中で次のバスに乗ろうと言い出して走り始めた。一歩一歩が頭にひびく。やがて尾白川の音が近くなってきた。頂上とはうって変わって猛烈に暑い。汗をたらしながら吊橋の前に飛び出した。しかしここで急に思い直して河原で遊んでいくことにした。まず川で汗を流し神社で腹ごしらえ。大きなフランスパンをあっという間に平らげた。腹が満たされると川の上流の方へ滝を見にいった。ひんやりとした空気が滝から流れてくる。岩に腰かけて、「これでしばらくは山ともお別れか」と思うと、今回の山行もあっけなかったような、もっと登っていたかった様な。等といろんな事を思いながらボカーンとしていた。

そしてしばらくここでブラついた後、バス停に向った。

註　①雨具の一種。
②駅やバス停から登高にかかるまでのこと。
③ナイフみたいに切り立った尾根。
④岩の上で日向ぼっこすること。

渚の少女

とっても気持ちがいいの
つめたくって気持ちがいいの

六月の渚に
波打ちぎわに少女一人

静かなのね
だれも泳ぎにこないのね
雨降る渚に
波打ちぎわに少女一人

生徒会報告

生徒会総務

生徒の理想は、役員と生徒の理想のジレンマにあって、より高く、より偉大になってきている。

しかし私は、生徒会総務のマンネリ化を打ち破るべく、非常にあたりまえな事をあげた。つまり「生徒全体と、その個人の為の生徒会」である。一見して、大変簡単な文章、しかし、もう一度見直すと、何だかさっぱりわからない文章である。しかし本当は、あたり前なことに、ちょっと目新しい立場に立って考えたものをつけ加えたにすぎない。

くわしく説明しよう。こういうと、前の役員の方達に誠に申し訳ないが、今までの生徒会は、生徒会を運営する為の生徒会のように思われてならない。

そこで私達は「生徒会とは何か」をまず考えた。しかるに出た答え「生徒会とは、生徒の為にあるもの」この最後の「もの」とは何者ぞ!という質問は残ったが、一応そこであきらめ（これが理解できていれば、前の人も苦労はしない）じゃあ、生徒の為になるようにしよう、それが目標の第一。次に目新らしいものの説明「人間とは、利益によって動かされるものである!」人間の行動の裏には、必ずといってよいほど利害関係がからんでいる。つまり私達は、「生徒会とは、あなた方の為にあるのですよ。あなたの、あなたの為にあるのですよ!」ということを打ち出した。つまり「あなたの為の生徒会」ということだった。しかし、あまりに表現を複雑化させた為、訳がわからなくなりしまいには自分達までも訳がわからなくなって、よく広めることもできなかった。

しかし、実践面ではずい分やったつもりでいる。文化祭にしても、生徒の望んでいるものを大きく取り上げた。しかし私達のした行為は、効果があっても認められはしないだろう。

私は、一部の人にしかその効果が現われなかったことを、悔んではいるが、又その人達に夢をいだいている。必ず将来の生徒会の為に、生徒の為に何かはプラスになると。

一つ教えてあげたいこと。

生徒会活動の受けている圧迫について。

その圧迫の一つ学校。彼等は私達のプリント・ポスターに目を通し、まちがいを正す（検閲じゃ言葉が悪いのでこれにしたが……。）そのこと自体は納得できるのだが、それが及ぼす影響は大きいのである。

二つ目、生徒会活動が、変な風に社会にとられているので、それを案する親の心。理解できるが、これも影響が大きい。こんなことが、生徒会不活発の原因の一つでもある。

最後に! 自信を持ってそれにあたれば、必ずやそれは打ち砕かれるであろう。

総務に対する意見

・生徒総会の時は、話しを具体的にしてほしいのですが、

——今までは、具体的な話し方をしていなかったので、これからは、そうします。

・義務を怠っているのではないか。

——義務を怠っているつもりはありません。三学期には、具体的な行動に出るばかりになっています。

・総務は、今何をしているのですか。

——今は、具体的な計画を修了したところです。

・総会に気のない人々が頭数だけそろっても意味がないと思うのですが、いかがですか。

——それは、意味のない事なんだけど、総会を聞くには、人数が必要になるので、今までのでしかたがない。

・壁新聞を定期的に出してほしいのですが、総務の方では、それをどう思っているのですか。

——今までは、壁新聞は、不規則だったが、これからは定期的に出す予定である。公報よりも、壁新聞の方が効果がある。

・投書箱を作ってほしいという生徒側から意見があるのですが。

——投書箱は、今現在作る予定である。材料も、もう整っている。

・委員長としっかり結びついた15名全員出席の総務会にしてほしい。

——それは、総務の方でも願っていることなんです。

・これからの具体的な計画を知らせてほしいのですが。

——・生徒ホールをもっと活用する。たとえば、討論会・先生と生徒の意見交換などをする場に利用するなど。

・壁新聞を定期的に出す。

・投書箱をつくる。

・中庭をもっと利用する。たとえば、ベンチなどをつくり、話し合う場所にする。

・弁論大会・球技大会・全定交流会を例年のとおり行なう。

・会費値上げについて話し合う。

評議会

各委員会の出席率の悪さは有名である。その中にあって前期の評議会は他の委員会に比べて、満足できる?・出席率をあげたと言えよう。

私はくずれかかった生徒会の、名目保存を

かかげて立候補した、会長以下の総務をだしに、評議会を強化しようと考えた。つまり、生徒総会に次ぐ議決機関である評議会を動かすことによって、生徒会総務を突き上げようと思ったのである。まず最初に三分の二以上の出席確保に努力した。このため一年生とのミーティングに力を入れた。そして三年生の出席率の良さと、清新な一年生の十割近い出席率に支えられて、定足数を確保することができた。ただ一度流会があったのと、二年生の出席率がきわめて悪く、大半が委任状であったのが残念であった。この二年生の怠慢さが、本会議の運営をやりにくくしたことは否めない。

次に、前期の活動は各学年ごとのミーティング、各小委員会ごとのミーティングと総務から提出された所信と予算案の審議であった。この審議は最初から荒れ模様で、ついに所信を否決、したがってそれに伴って作られた当初予算案も葬り去った。このことは総務に辛辣な思いを与えた。そして考えの甘さを認めさせるのに、かなり役立ったように思われる。

最後に、何をやっているのかわからないという会員をなくすために、「評議会だより」のようなものを出したかった。こういったP・R活動は結局何もできなかった。これが最大の心残りである。そしてこれからの評議会に望むことは、各議員が真にクラスの代表であることを自覚すること、P・R活動の活発化を計ること、評議会主催の行事（討論会、だべリング etc）を行なうこと、以上の三点である。そしてこういったことを通じて受動的でさえない評議会を、能動的で発展的な評議会にしていくこと、ひいては生徒会活動を活発にしていくことを願ってやまない。

評議会に対する意見

・出席率が悪いようだが……。

——その点、確かに評議会出席率が悪いことは、認めざるを得ない。

評議会の場合、二年生が最低、その次が三年、そして一番いいのが一年。なぜかという理由についてですけど、僕もできるだけ各クラスを回って、やるだけのことをやったつもりだったんですけどね。結局、出席率が上がらなかったということは、評議会というものの価値が、一般会員にあまり認められてなかったっていうことです。だから結局〝じゃあ、でなくてもいいんじゃないか〟という考えが、非常に一部の議員にある。そういうことから、出席率が悪くなったわけです。

・生徒の身近な問題を討議してほしい。

——確かに、身近な問題討議はありませんでしたね。予算といっても、たいして身近じゃないし、だから、これからはもっと、各議員が自分のクラスから、各クラスの意見というものを持ち返ってね、そして、その評議会で、各ホーム・ルームの小さな意見というものを出してもらえばいいと思うね。そうすれば、身近な問題というものも、それに伴ってでてくると思う。

・生徒の身近な問題を討議してほしい。

——確かに、身近な問題討議はありませんでしたね。予算といっても、たいして身近じゃないし……。だからこれからは、もっと各議員にある。まア、そういうことから出席率が悪くなったわけです。

・H・Rと評議員が離れているようですが。

——中学校でいえば学級委員にあたる委員だと思うから、まア、評議会委員の自覚を望むしかないんだね。

最終的には。

でももっと、ホーム・ルームを活用するためにできることといったら、理想のほかに、評議会委員が司会みたいなことをやって、ホーム・ルームの方でも話し合ってもいいと思う。評議会委員を活用してほしい。

・評議会の立場、役目を、怠っているのではないか。

——これは、各議員に対することだと思うけれどね。評議会の立場、役目を怠っている。具体的に怠っていると、助言がなされていないってわけ？

・あの、活動していないのでは……。

——うん、活動不足がひびいているのかもしれない。それはやっぱり、はっきりいって、今評議会が、毎月だいたい一回ぐらい開かれているけれど、そういう時に各議員が出て来て、まあ一部だけどね、その場で、その人の感じた個人的な意見を言っているにすぎないわけ。だから、評議会議員の役目、立場というものは、全然無視されているわけよ。つまり各クラスに帰えって、クラスの意向を代弁するという、代議員みたいなことなんだけど、それが全然なされていない。すごく個人的な意見が出ているわけね。だからそういうとこで、やっぱり評議会がないことは、まア、僕とか、旧役員をやっていた先輩の方が考えていて、はっきり、一般会員の方が期待していなかったと思うんです。今、僕は、後期会計をやってるんだけど、総務の側から感じた場合には、その評議会の方針、計画の他に、はっきりさせていきたいいろいろな問題があると思うんですけど、そういうことに対する見解を出してくれればいいと思うんですけど、なんか、要望ばかりいって、なんだけど……。

文化委員会

ようし！やるぞ！　一学期最初の委員会を開いた時のぼくの心の叫びであった。心の中の方針も委員会の方針もできた。委員会の中をまとめる——その方法として話し合いを多くする。しかし、依然としてクラブに入っている委員はあまり協力的ではなかった。四月二十七日（土）、数回の委員会のつみ重ねの

結晶ともいえる映画会が行なわれた。アンケートも取ったし、生徒も百二十八名集まった。この「七人の侍」は、かなり好評であった。ポスターもうまく行った。この行事で委員はかなりまとまってきた。次に六月に予定されている弁論大会と全定交流会の事が委員会の話題をさらうようになった。二、三度「文化委員会は何のためにあるか」というテーマで話し合った事があるが、この時はあまりみんな、興味がなかったようであった。いよいよ六月二十七日(土)の午後一時半から、弁論大会が生徒ホールで行なわれた。集りがひどく悪かった。五名の弁士よりちょっと多いだけであった。が、五分ぐらいもすると、かなり集まってきた。結局七十八名。飛び入りも二人でた。だが何か盛り上りがなかった。何が悪かったのだろう。まず、ポスターだ。次に文化委員会と生徒がはなれてしまった事だ。行事の前まではその事を、考えているが終ってしまうともう何もしなくなる。これが原因だった。五時半から全定交流会が始まった。定時制約百名。全日制約二百名。開会式が終ってから各サークルごとに分れた。ぼくは食堂に行ってパンと牛乳を配り始めた。やがて数時間後、時計のつめたい音しか聞こえない自分一人の存在も認められないような食堂にぼくはいた。遠くから中央廊下を走る音、「帰ろうぜ」「ああ飯も食ったしな」数分の沈黙。又、足音がした。「フォークダンスが短いな」「そうだよな。あんな話し合いサークルなんて作りゃがって」「全く文化委員会なんて何やってんだろう」ため息と共に立ち上って重い鉄のドアをあける。真暗な世界の中にほんのわずかに星がかがやいていた。星がそっとささやいた。「お前は何して来たんだ」もう一つの星がいった。「中にはお前を理解するものもいるよ」ぼくはフーと大きなため息をついてぽつんといった。「これで何もかも終わったんだな」と。

文化委員会に対する意見

○文化委員会の役割りは。

——えっと、予備校化した学校に、変化をもたせる為。

○どのような仕事をするのですか。

——文化委員会というのは、文化的向上を促す活動なら何でもいいんだから別に映画会、弁論大会をやらなくても、他にやとたいものがあったら何でもいい。だから討論会にしたってよかったんだ。この前、食堂の値上げがあったでしょ、あれについて討論会にしたっていいんだよ。だけど、行事が多すぎるからそれができないんだよ。あとはそのぐらいだけど、ただちょっと、映画会、弁論大会、それから、すべてこういう会をやっちゃうと、いそがしくて何もできない。やる行事が多すぎて。

図書委員会

後期図書委員会では、前期のアンケートにより購入図書を決め、それをなるべく早く買いたいと思っています。

また読書会について言えば、読書会を数多く行なってきたという点から、前期よりは良くなってゆく傾向にあります。後期図書委員会では、約四回ほど計画しております。今後において、読書会は本の有無にかかわらず、どのような本が多くの人に読まれているかを

調査し、その中から選んで一人でも多く読書会へ出席してもらうつもりでいます。

図書委員会では、前期より昼休みに貸し出しも行ないました。これは、昼休みに貸し出しをしてほしいという読者の声を取り入れました。

これからも図書委員会は改善をしていきたいと思いますので、どうぞ御遠慮せずにクラスの図書委員に申し出て下さい。

図書委員会（読書会について）への意見

・読書会のテーマが、二度とも伊豆の踊り子になっているのはなぜか。

——皆に多く読まれているという点で、二度ともそれにしました。

・テーマの選抜方法は？

——前のは、先生が決めてたんですけど、今度は社研といっしょにやります。

・読書会の後、反省会を開いたか。開いたとしたら、どのようなことを話し合い、結論は？

——一応開くのですけど、その読書会自体が図書委員会の会員でもっているようなものですから、開いてもあまり意義がないような感じなんです。まず内容についてですね。それから、また、その中で言われているような要旨、そのようなことですね。

（委員会について）

・委員会の状態は？

——普通の委員会より、よく来ているんじゃないかと思います。

今は、三年があまり関係ないので、出ていないんしすけど、あとの一・二年は皆出ています。

・〃本を多くしてほしい〃という声に対して

——えーとですね、年々図書の利用が少なくなって、これではいけないんじゃないかというので、図書の利用を呼びかけると言うよりも、皆さんに多く読んでもうえるような本を、たくさん購入したいと思います。

整美委員会

後期整美委員会は、あまりしっかりした方針なるものを持っておりません。前期のように活動はできないかも知れません。しかし、特に一年の委員には動いてもらうつもりです。つまり、どうせ後期は大した仕事もないのだから来年への足がかりになるつもりなのです。

まず大掃除を三回ぐらいはやるつもりです。そのやり方の改善は徐々に行なっていくつもりです。又、花壇の手入れは例年どおりに行っていくつもりです。その他後期にやりたいことは、委員会の会則なる物を作ったり、新聞を発行したり、来期へのプラン作りなどをすることです。

これらのことをまず企画委員会的に話し合い、検討していきたいと思っております。特に委員会を引っぱって行く者を多く作ることを目的にしております。それから保健委員会との合同でいろいろなことをすることも考えております。

整美委員会に対する意見

◎どんな仕事をするのですか

——花壇に花を植えたり、大掃除の時の指揮をする仕事です。

◎もっと活発にということには?

——こちらも活発に活動したいんですが、生徒自体が、乗り気じゃないから、ちょっと引っぱっていけないんですよね。

◎ゴミ箱をふやしてほしいのですが。

——それはこちらでも考えて、今度の委員会にはかってみようということになっています。

◎新聞をこれからも続けてほしい。

——あの新聞は、ずっと続けるつもりで出して、一学期に一回ぐらいということになっています。

保健委員会

四十三年度前期の保健委員会の反省として第一にあげられることは、委員長が六月初旬まで決まらず、その為、他の委員会にくらべて、活動しはじめるのが遅くなり、綿密な計画も立てられないままで活動してしまったということです。委員会を開いても少数、それも決まった人しか集まらず、毎会、やっと委員会を開いていた状態です。

しかしこんな状態の中でも、整美委員会と合同して新聞を発刊したり、「一つまみ運動」、「クラスに花を置きましょう」という運動を行ないました。しかしこれらの運動は、P・R不足のため、校内全部に知れわたらず、運動が少数の人のみ実行できなかったことを反省しています。

健康診断の手順等も、もう少し考え、活動をすればよかったと思います。

又、保健室を乱用する人がいるので、その様な人への注意等も、もっと積極的に行ないたかった。

私たちの委員会は、毎期、決まった仕事になってしまうので、マンネリ化を防ぐため、いくつかの新しい運動を行ないましたが、結局やりかけのままで、終わってしまうことを残念に思い、又反省しています。

そして来期の委員会への期待することは、

第一に今までやりかけの仕事があったので、これをひき続いて行なって欲しいということです。それに新聞の発刊も、期日はいつとは決まっていませんが、続けてほしいと思います。とにかく今までの委員会とは違う、よりよい幅の広い委員会を作って欲しいと思います。

保健委員会に対する意見

◎保健委員会の仕事は。

——春には健康診断の測定があって、それが一番大きな仕事なんですけども、その他の仕事は、いつも学校全体とクラスごとの健康、安全をはかることです。

◎一つまみ運動、その他の運動の説明は。

——一つまみ運動っていうのは「ゴミを毎日一つづつ拾いましょう」っていう運動だったんですけど、それがP・R不足のためか、うまくいかなかったんです。それから他の運動としては「花を植えましょう」がありました。これは植えましょうというより、クラスごとに花を置きましょう、というものでした。

◎委員長が決まらなかったのは、なぜ。

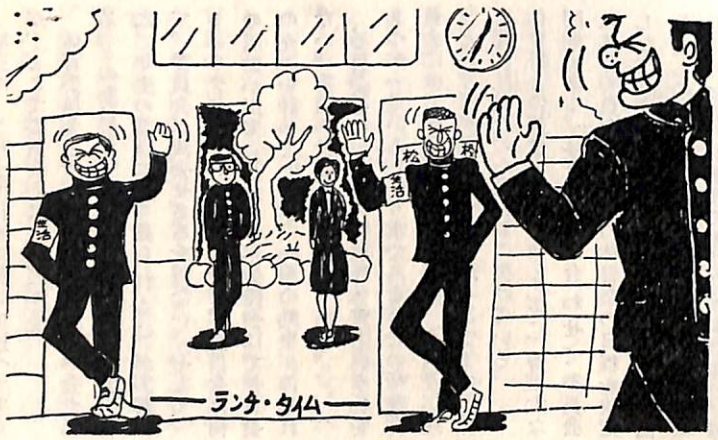
——最初決まっていたんです。でも、適当な理由で逃げられてしまって、六月頃まで決まらずに、女子の方にまわってきたんです。

◎新しい試みはないのですか。

——今度はなんていうかな——。前期にできなかった事を後期に継続してやってほしいということと、今やっている仕事は、保健委員一人一人に救急処置のパンフレットを配って、それで勉強しています。

生活委員会

知っての通り、前期生活委員会は活動らしい活動を何一つとしてしなかった。そういう委員会を、ある人はひどく非難し、ある人はどうでもいい、自分には関係ないという態度を示した。非難した人達は努力が全く足りないということをいう。〝責任を持って、もっと努力をしろ〟というのである。しかし、そんなに、委員会が生徒会員のために、委員長が委員会のために自分の時間を削除しなければならないのであろうか。委員会の活動は各生徒会員の協力のもとに成りたつのであるから、一口にHRを活発にしたり、風紀問題を



考えたりすると言っても容易なことでは、決してないのである。一応な活動をしていても、はたして委員会の活動と言えるものが過去にいくつあっただろうか。委員長とその他ごくわずかの委員の自己満足で終ったのがはたしていくつあっただろうか。そして生徒会における生活委員会の委在価値はどんなものであるのだろうか。前期生活委員会はそういう疑惑の中に消えてしまったのである。いや、消してしまったというほうがいいのに違いない。

生活委員会に対する意見

◎何をしているのかわからない。

——えっと、委員会の報告をするのが普通だと思うんですけど、実際、何もやってなかったし、仮に何かやってたとしても委員会としてそれを報告する手段を持ってなかったから、そういうことになったんだと思います。

◎風紀の取り締まりなどをやってほしい。

——風紀ということ事態、委員会としてまとまった考えもなかったし、委員長がだいぶおかしかったから……。

◎初めのうち、委員会の参加者がずい分多かったと思いますが。

——初めのうちは、わりと三年生が出てきてくれてよかったんですけれど、半後は二年生の出席も悪くなったので、まったく見られない姿になりました。

体育委員会

我々体育委員会は、規約に掲げてある球技大会、体育祭しか出来ず、運動用具の貸出しや、体育運動の測定、管理及び統計の作成、等ができなかった。

第一に体育祭について。四十三年度は十月二十九日日曜に執行した。二十二、二十三日両日の文化祭の後を受け正味四日間という、ハードスケジュールで執行し、まあまあの出来であった。

第二に、球技大会は、一年生の委員の養成を兼ねて行なった。内容はバレー・バスケット・サッカー等であった。もう少し日数が多くてもよかったと思う。来年は、新入生歓迎のためにもう少し早く執行したい。

第三に、これまで行事に関して述べて来たが、ここで委員会のことを述べる。

体育委員会とは、有名無実の委員会である。どの委員会にも共通する出席率の悪さ(特に二年生の委員に多く見られる。)が影響して、委員会が流会せざるを得ない。そして、ミィーティング、その場に於て、委員会は何の活動が出来ようか。毎年生徒会にて委員会の充実を計っているが、一層の効果が得られない。委員の自覚だけが頼りである。

委員会そのものが、特殊な体育という物をあつかっているという事である。この体育委員会には、体育運動競技の振興、企画及び運営という所があるが、どこからどこまでが体育運動競技なのか具体制に欠けている。体育科との兼合が、委員会として一番重大な問題である。体育の授業に合わせて委員会(体育委員会。)最大の体育祭の日程を決定しなければならない。種目においても、両面的なもの(学校側と会員側の望んでいるもの。)を持った種目でなければならない。毎年の委員長は、学校側との兼合を重視せざるを得ない。そこで、毎年生徒の要望をけってしまう結果におわってしまう。しかし、一般会員は、そんなことよりも、臭抜き的な物と

して、一日を楽しむ(肉体的快楽)ことが出来ればそれでいいのである。そこにおいて、委員会も毎年ほとんど変わりばえのしないマンネリ化した種目、そして体育祭やその他行事を執行するだけになってしまうのである。

毎年体育科の年間計画に振り回わされる、それを打破するのは、前年度における体育祭やその他生徒会の行事計画(日程等)を学校側と話し合うべきである。

ここにおいて体育委員会(体育委員会とは限らない)は自主独立し、他の委員会(委員会同志の横の結びつき)との連絡を密にして、スムーズな行事(生徒会行事)を執行すべきである。

体育委員会に対する意見

◎先生との関係はどうなっているのか。

——えーと、体育委員会っていうのは、体育科でやっていかなくてはいけないんですよね…要するに。だけど、今の体育委員会っていうのは、先生の御用聞きみたいになって、まあ、すごく自主性てないんですよね。半年やってみて、それがわかったんです。だから、僕が、次期委員長に望むということは、委員長にはいったんですけれども、自主独立ですね。それを僕は、よく伝えたいと思っています。先生と離れて客観的に、体育というものを考えてみたいんです。生徒の望むものをやっていなかったら委員会とはいえないですからね。

◎春に体育祭をやってほしいという声が出ているんですけれど…。

——僕は、今年やろうとして、先生方と学校側とで話し合ったんですけど…。それは、否決されてしまったんです。今年は秋に行なったんですけれど、来年度は、必ず春にやろうと生徒会の方に言ってあるし、それを強くうったえてと委員長の方にもいっています。

◎ボールを生徒に開放してほしい。

——それね。ちょっと前にはやっていたんです。つまり、貸し出しってことは書いてあるわけですけれど、用具がないわけです。昔の体育委員会として買ったボールとかが、全くの管理不ゆき届きで…。といったらそれまでですけれど、それが全くなされてなくてね。やろうと思っても、いろいろな用具がなかったら、どうしようもない。まあ、現状においてはできないわけです。金でボールとかなにかを買ったら、貸し出しが出来るようになるでしょうね。

クラブ委員会

前期のクラブ委員会は、これといったまとまったことをしなかった。六月に文化祭がクラス中心になるので、クラブ発表会を行なうことが総務で決まったが、六月では夏休みにやる研究などが発表できないというので、いつの間にかクラブ発表会はあやふやになってしまった。また、夏休みに運動部が校庭・体育館の使用日を決める時も、各クラブが自分のクラブ日を一日でも多くしようとお互いに譲らなかったので、決まったのが期末考査直前だった。しかし運動部などは、自分のクラブに直接影響のあることが多いのでよく出席したが、文化部の出席率が非常に悪かった。このようにクラブ委員会が不活発だったの

は、直接自分のクラブに関係ない時は全く無関心だったことにあると思う。
後期の委員会には、クラブ委員会の力をもっと強化して、全委員会の中心になることを望む。

クラブ委員会に対する意見

◎委員会は幾度ぐらい開きましたか。
——五・六回、いや四・五回ですね。でも全員集まったのは最初の一回だけ。あとはばらばら……。
◎おもに活動は何をしましたか。
——だから、全然できない状態。ただ、総務の決定事項を知らせるだけ。
◎委員会の力はどの程度のものですか。
——全然ない。本当にない。先生にも生徒にもクラブ委員にも、全然力がなかった。
◎それでは、なぜ委員会があるのですか。
——おれにもわからない。委員長のおれにも。
◎クラブ委員会の役割は。
——まあ、総務とクラブを親密にすることじゃないのかな。
◎出席者の人数が少なかったということへの対策は。
——まあ、別に努力はしていなかったけど……。一生けん命、呼び込みするだけで別に対策はなかった。

新聞委員会

新聞委員会の前期の反省と言えば、まず、活版を一枚も出せなかったことと、一学期に一枚も新聞を出せなかったことが上げられる。
四月はじめに、自分としては統一テーマなどを決めて、アンケートによって幸福とか、皇族についてなど、やってみようとしたのであったが、委員会の中で一つに意見がまとまらなかったのも不振の原因だ。
また、生徒会の方で予算がおりるのが、六月になってしまったということで一学期に活版が出せなくなったのだと思う。
委員があつまらないのが悩みである。そもそも新聞委員などというポストは、自ら進んでやろうとする人間よりも、新聞でもやってみようか、とか、新聞しかない、この二つの考えの上に立って、就任したものと思われるので、委員に自覚を促したい。
統一テーマを企てようとしたのが、失敗と言えることはたしかだ。

新聞委員会に対する意見

◎今まで新聞は何回発行したか。（回数が少なかったらその理由も）
——一回です。
◎なぜ一回なのですか。
——委員長と各委員との怠慢、それから予算が九月の後半にやっとおりたということで……。
◎三学期はどうするのですか。
——だから、今度の一回もあと活版で三回か四回出したいと思っています。
◎壁新聞も出したらどうですか。
——考えたんですけど、総務の方でやってくれるという話があったので考えてません。
◎委員会での話し合いの内容は。
——現在は活版の製作っていうことを重点にしているので、話し合いはやっていません。
◎どのくらい集まりますか。
——一年生が三人、二年生が案外多くて

六人ぐらい。
◎クラブにしたら、という意見には。
——僕は、大賛成。
◎アイディアをよくしてほしい。
——この文章が、何かむずかしいんじゃないですか。ちょっと取っ付きにくいから…僕は別に関心ないけど…。
◎発行部数が少ない。
——だいたい九五〇枚程度。
◎生徒に渡ってないんですけど。
——渡しているつもりです。
◎そこのところはどうなっているのですか。
——各クラスの委員が、「取りに来い」と言う時に取りに来ない者には渡していません。
◎今までどんな活動をしたのか。
——どんなこと？　活動らしい活動はしていません。

放送委員会

放送委員会は、今年報道の徹底を重視して活動してきたが、仕事を、ある程度の線まであげたに終り、大きな躍進は得られなかったようである。私は四月に委員長に選出されたとき、まず委員の間のチームワークを作ろうと考えた。放送の仕事にかかわらず、チームワークは仕事をスムーズに行なうための第一条件であるが、委員会というものがもつ、短所というか放送のもつクラブ的要素に興味の持てない者に、これをくずされてしまったのである。私はこの摩擦を打破するための一手段として、今年初めて委員会として合宿を行なってみた。しかし、交流は一部の委員の間だけに終り、この合宿に参加した者の技術向上には役だったが、チームワークの形成までには、いたらなかった。また摩擦は、委員会の不活発の大きな原因とも、なっていたようである。この問題は、考えなければならない課題である。私は次にM・B・Sの中のマンネリ化によるダラダラムードを排除しようと考えた。しかし現在に至るまでほとんど何も新鮮な物を番組にぶつけることができなかった。二年生が少ないなどの原因は色々あったが、マンネリ化を打破できないでいることは大いに反省する次第である。
文化祭の劇の台本が、切日までにそろわずあわてた日、後夜祭でプレーヤーがいうことをきかずあわてた日など失敗の多い一年であった。まだやりたいことは沢山あるのに、悲しいかな、リーダーの力の弱さ。来年度の躍進のために、くいのないよう努力するつもりである。

放送委員会に対する意見

◎連絡事項をくり返してほしいということに対しては。
——えっとですね。やっている場合、あの、そちらの、呼び出した本人が来たということが放送に連絡がこないということで、大体、要請があった場合なんか、二回ぐらいくり返しますけれど、大体原則として、一回でやめています。
◎マンネリ化しているのではないか。
——そうかもしれません。えーと、ぼくらとすれば、そのマンネリ化っていうことは、やはり、いろんなことを考えているんですけど、それがなんか、計画、材料が悪いってことがあってまだ、実行には、うつしてませんけど、ぼくたちとすれば、努力しているつもりです。

◎要望として、各クラブの様子、ニュースを伝えてほしい。

——やってもいいと思います。

◎ポピューラーも流してほしい。

——ぼく達とすれば、それは、流したいんですけど、なにぶん、レコードがないので、ちょっと、そういう要望には、お答えしかねるんですね。

◎出席率はどのくらいですか。

——そうですね、大体、平常、当番なんかやってるものはかならずでていますね。あとちょっと、そうですね三分の二は、でますね。

◎なぜ、本番になると機械が故障するのか。

——ぼく達とすれば、機械は大事にあつかっているつもりなんですけど、なにぶん古いもので、えーと、まあ、本番だけじゃなくても、ときたま、こわれたりしてますから、そこのところは、まあ、御容赦下さい。これから、もっと大事にしていきたいと思ってます。

◎MBSってなんですか。

——えっとMBS＝放送委員会でいいと思います。

選挙管理委員会

前期選管の仕事は、四十三年度生徒会役員補欠選挙と後期生徒会役員選挙の二つだった。

反省としては、各委員会共通の悩みである委員の出席率が悪かったこと。しかしこれは、個人ミーティング等の話し合いを行ない出席させるのに効果があったように思われた。

ほかには、立候補者が集まらないこと。特に、生徒会主要ポストに自分から進んで立候補する人物が皆無に等しかった。そのため、前会長、前議長、委員長等が説得して立候補させるのに苦労した。

また、選挙の方法だが、現在のやり方をかえた方がよかったんではなかったかと思った。というのは、現在の選挙方式だと生徒の知らない間に選挙が進み、そして気づいた時には自分の手元に投票用紙が来ていた。という状態に等しいと思う。私自身もこのようなことは任期中気がついていたが、選挙が文化祭に重なったり、私自身、候補者を集めるのに時間的余裕がなかったこと。それに、委員自身の怠慢からとうとう実現にいたらなかった。

選挙の方法をどのようにかえるかという具体的な案はないが、まず第一に、生徒によくわかる選挙、つまり選挙が一段高い所で行なわれていて、そして自分の知らない人が会長になっていたこのような状態をなくす。それには、候補者を生徒によく知ってもらうことが必要だと思う。また候補者の集め方だが、現在の〝集まるまでまとう〟から〝集めてみよう〟という形にしてみるのもおもしろいんじゃないかとも思う。

文化祭執行委員会

四月下旬に一年生を対象にミーティングを開らきました。この時すでにこないクラスがあり、第一回委員会の具合から、あまり集まらないとは思いましたが、予想外に集まってくれず、約十七名、委員の三分の一強でした。その後は言うまでもなく、第六回まで続いて流会、開けば開くほど人数が減って、五～六名というところまで来た。六月始め委任状・代理人をたて、総務の協力を得て、朝・昼・放課後と各年を回わって、やっとのことで、二十四名（三分の二）を得て、やっとの思いで委員会を開らいたのだ。

同じ頃、参加申し込みを始めたが、用紙を取りにこなければ、持っても来ません。委員の中で、良くやってくれる一年生に何かいうと、「なぜ、わたしたちだけがやらなくちゃいけないんですか？」と言われます。それは私が言いたいことばです。

一ヵ月以上も昨年よりおくれ、プログラムはとても作れないと思いながらも作りました。体育館の掃除及び、点検。一応の点検ができたのは二週間ぐらい前のことです。

反省としては首脳部で一年生を引っぱっていく人物がいなかったことだと思います。

（文化祭について）

◎準備期間を長くできないか。

——初めのスタートの時期が非常に遅れたから、それを早くすれば、もっと準備期間が長くなると思うんです。

◎統一テーマを打ち立て、それぞれのグループがその範囲の仕事を分担した方が程度の高いものになるのではないか。

——ええ、各クラスはまとまるんですが学校全体としては、何かばらばらになってしまうんではないかということで、統一テーマを打ち出した方がいいと思ったんですが…。

◎来年度の文化祭に対する準備は。

——これからやろうと思ってますけど、なかなかその時間がないので、まだ準備はやってません。一応、一年生で来年委員長をやってくれるという後任ができたので、その後任にこれから教えようと思います。

◎後期の活動は何をするつもりですか。

——後期の活動としては今、別にやっていませんけど、今年の資料作り、今までの古い資料全部をまとめて、それを今年の後期の仕事にしたいと思います。

◎委員会は開いていますか。

——委員会はもう文化祭以後開いていないんです。出席率が悪いことから開かずに個人的にこれから教えていって、できれば一年生だけでも委員会を開こうと思っています。

文化部

物理部

前期の活動としては、太陽・月の観測、エンジンの構造研究、アマチュア無線機器の整備、半導体についての研究などである。現在クラブでは、天文・電気・自動車という三つのグループにわかれているが、この為、やや一つのクラブとしてのまとまりがなくなっている。後期にこの点を考え、来年度の活動に生かそうと思っている。

前期の反省としては、中心となるべき二年生に運動部とのかけもちの者がいたりした為、アクティビティーが落ちたということと、夏休みに満足な活動が行なわれなかったということである。

後期の計画としては、天体観測、アマチュア無線機器の整備、電気についての各種実験、自動車の構造研究を行なおうと思っている。

部員には、もっと積極的に参加してほしい。クラブ活動はそもそも同好者の集まりなのだから、自分の研究したい事等があったなら、どんどん相談してやってほしいと思う。

演劇部

部の方針というもののない、ただ演劇の好きな人間が集まって楽しくクラブをし、あらゆる方向に知識を広げて、素直に自分の欲求を満足するというクラブなのですが、どうも運動部のようなキビシサがなく、なにごとにおいてもルーズなのです。改めるとしたら、まず部長の頭から。個人プレーをあせらず、広く部員に協力を呼びかける。部員がそれにちゃんと答えてくれたら、それだけで良いのです。

活動内容としては、基本練習から始めようと、早口言葉、詩の朗読などをしました。そして六月初旬から、文化祭の準備を始めました。まず何をやるか本をひっくりかえして決定し、夏休み、九月と発声練習、本読みと進めていきました。そしてしめくくりが文化祭の公演となりました。反省としては、計画は組んだのですが、どうも集まりが悪くてのびのびになってしまい、思ったとおりに消化も出来なかった。そして文化祭の練習が一番不消化だったのが心残りです。

そして三学期に行なおうと思っている独立公演の準備。これも一段階アップした基本練習から行ないたいと思っています。

食物部

食物部は、現在女子二十名ほどで運営しています。四月から六月上旬までは、お菓子類などの簡単にできるものを実習しましたが、六月下旬からは、文化祭の下準備にうつりました。写真の切りぬき集め、品目の決定、室内装飾に思ったより多くの時間がかかりました。反省はといえば、文化祭のことにつきます。二、三ヵ月前から準備を始めたのに、前日八時を過ぎてしまったのです。もう少し能率的に動けば、短時間でできていたでしょう。実感として、大きな行事などで最も大切な事は、一つの目的に向って皆が力を合せる、つまり団結することなのだということです。

後期の計画として、少し高度の技術を要するものを取り入れていきたいと思っています。そして、今までどおり月一回部会を開き、三回を実習にあてていくつもりでいます。また、今まで二年中心だったものを、一月から一年中心にしていくこと。そのため、一年の部員をふやしていきたいと思っています。

ブラスバンド部

部の方針としては合奏をすることによって音楽に対する教養を高め、音楽を楽しむことにある。またおもな行事（文化祭）のため、練習に励みその他学校の行事に参加する。

活動としては文化祭――おもにこれに重点をおいて練習した。基本的な吹き方や合奏の指導をコーチに来てもらってやった。大きなミスもなく、無事に終わった。体育祭――この練習は、ほとんど出来なかったので成績はあまりよくなかった。その他に九月から十月にかけて朝の練習をした。夏休みには合宿をし、チームワークを固めた。

反省としては文化祭直前までチームワークがとれなかったことだ。しかしなんとか文化祭はやってのけた。

後期にもただよい演奏ができるように練習するだけである。

生物部

これというような方針は別にない。ただ文化部であるので運動部の様にチームワークを養うことがむずかしいため、「することがなくても、活動日には必ず出席する」ということをいつもくり返す。することがない時は、雑談をしたりして楽しい雰囲気のクラブを作ろうと思っている。

前期の活動はまず研究の形式の検討から始まり、研究課題の選定をし、計画、研究開始の順で始まった。特に形式と課題の選定にてこずって多くの日数を費した。そして課題も決まると三つのグループに分けそれぞれ別々にスタートした。一年生の不なれや、実験の性質のせいでしばしば失敗。一学期のほとんどは練習に終わった。夏休み中はかなりピッチもあがり、三グループのうち「心臓と血液」と「神経と筋肉」は一様くぎりのよいところまで終えた。ただ残りの「体色変化」は資料不足や時間の関係などのためおくれた。が文化祭までにはまにあわすことができた。大変だったことは、カエルの補給と毎日の世話だった。七月の終わりには例年の通り尾瀬の合宿を実施、無事終えた。

反省としては、研究の準備が思ったより手まどったことと、活動の不活発などであった。

後期には二学期いっぱいを使ってのんびり楽しく部誌の作成などを考えている。

華道部

部の方針としては、いけ花を単に花嫁修業のためにやるのではなく、理論と実践を両立させるように行ない、それによって部員間の親睦を図るということです。

そして活動としては、一学期から夏休みまでは基本練習、二学期から文化祭準備（花のしおり作り）、文化祭後は基本練習及び発展型の練習を行なっています。反省としては前から気にかけていた部員相互の親睦を図る方針を部会を開くことによって解決しようとして実行しようとしたが、結局はまとめる私自身があいまいな態度しかとれず、意見の出っぱなしということになってしまった。また文化祭においてもクラブ内で久らくもめて、やっとまとまって実行したことといえば去年と

同じ形式の展示と、しおりの配布だけでした。
そしてこれからずっといけ花一般の研究をしたいので実習以外に研究日を設けてみたいと思います。

英語部

前期の活動としては、NHKテレビの英語会話初級を教材としての会話練習や、英語検定の勉強・レコードを使ってのヒアリング・しりとりなどのゲームをしました。
英語部の方針としては、今までに習った単語で、できるだけ多くの会話表現をおぼえ、それを日常の会話の中で使い、英語にできるだけ親しむこと、ということでした。そして反省としては教室が委員会や他のクラブ等の使用で、定まらなく、やりずらかったことや文化祭の準備は前から心がけていたのだが、夏休みの終わりごろになってから、あわてて調べだしたりで、初め予定していたものとだいぶ違ったものが出きあがってしまいました。
後期にはリンガフォンを使って、発矯正をし、初歩の会話を完全にマスターすることを主にしてやっていきたい。

手芸部

手芸部には、現在二年生が九名と、一年生が十一名、計二十名の女子部員がおり、残念ながら男子部員は一人もおりません。
前期の活動の主なものは、何といっても文化祭のバザーでした。部員数が二十五といっても、その内の数人は文化祭後に入部したので、実際にバザーに従事した部員は少なく、その大半が一年生でした。それでも、皆で毎日おそくまで残って準備をして、品不足、その他でご迷惑をおかけしましたが、何とかバザーもでき、まずまずのところです。
これからの部の方針としては、今のままでは、何の発展もなくつまらないものになってしまうので、もっと新しい物をどんどん取り入れ、来年度の文化祭は、もっと思考をこらしたすばらしいものにしたいと思い、部員一同はりきっております。今後の行事としてはまだはっきりした計画はありませんが、講習会なども、行なうつもりでありますので、その時は、皆様よろしくお願いいたします。
何といっても、この数ヵ月間一年生の方々もよくがんばって下さって力強く思いました。部長も一年生にひきつぎ、一年生も来年は二年生、ますますはりきって下さるようお願いいたします。

文芸部

部の活動としてはミーティングを中心として、輪読会・読書会・作家の研究・文学散歩詩集「樹」の発行などでした。そしてその反省としては文化祭におわれてしまったことです。特に作家の研究は文化祭のためというようになってしまったのが残念でした。
部の方針としては、部員をもっとふやすことと、部員相互の交遊、個人を尊主し合っていくことでした。
そして後期としては、読書会・「たわごと」の発行・輪書会・ミーティングを主とし、調べたり、発行するのではなく、文芸本来の活動にしたく、話し合いを多くし、もっと文章を書くようにしたい。

写真部

写真部は、男子二十名女子十三名で運営されています。
前期の活動内容は
・写真展応募（二回）
・デパートにて撮影会
・九州・中国・北海道撮影散歩（三グループ）
・文化祭出品
・その他の撮影会
・鉄道映画の紹介（生徒ホール・物理室にて）などです。
前期の反省といえば、部会への参加人数を増すこと、暗室の使用法を考えることです。
部では、写真技術の向上及び部員間の友好を高めることを目的としていますが、これからは、部会への参加意欲を高めるよう改めなくてはなりません。又できれば後期に写真展を開催したいと思っています。

化学部

化学というかたくるしい字、あるいは、それから受ける印象が悪いせいか、今、化学部では女子部員が非常に不足している。今後の方針は、いかにして部員をふやすかということになるだろう。その他、活動内容のマンネリ化解消ということもあげられる。
最後にいいたいことは、一年生はじきにリーダーになるということだ。入つてくる一年を指導しなければならないのだから、しっかりしてほしい。そして、がんばって化学部を住みよくし、今後の方針に向かって努力してもらいたい。

美術部

「美術部」とは言いにくい名前だ。なんとかする必要がある。では、なんと変えようか。「絵画部」としてもおかしいし「芸術部」としたらキザッタラシイ。いい思いつきがないから、やはり舌をからませながら「びじゅつぶ」と言うことにしよう。そして舌ったらずの私が、人前でそれを言わねばならぬ時には、落ちついて、一つ一つコトバをきって言うことにしよう。そうすれば、伝統あるクラブの、名を変えるなどというだいそれたことをしなくてすむのだ。ところで「美術部」という看板がかかっているからには、おそらく何かをやっているのだろう。やつていなければ、看板にイツワリがあるのだ。ところが、どこを捜しても看板などかかっていない。彼等は一体何をしているのだろうか。はたして「美術部」というクラブは存在するのだろうか？
これは永遠のナゾだ。数学の方程式を解くよりむづかしい問題だ。それでも時たま、二・三人のあやしい男が、あの美術室で何かをこそこそとやっているということだけは、たしかなのだ。

書道部

今年一年、書道部は何をやっただろうか？
展覧会に出品した。文化祭に作品展示をした。ただそれだけである。
書道というと皆敬遠してか仲々入って来てくれない。子供の時から習って来た人とか、書道を選択する人ばかりで構成されている。
現在、一年四名、二年三名、三年〇名という人数になっている。少人数であるから、充実した活動が出来そうであるが、部員が仲々

出て来てくれない。これが、我クラブに巣食っている病原体である。とにかく、全員出席することから始めなければならない。これが我々の大きな課題である。

書道の根本目的は美的要素を探究し、人格陶冶向上であることは言うまでもないが、我々は未だそこまでは考えられない。とにかく古来の名筆により書法を会得するということを目的として活動を行なっている。つまり書道でなく習字である。それも社会生活の合理化によるものかもしれない。しかし、そのうちには書道に達し、そして字というわくを越えた新しい方法の研究まで行くかもしれないと思っている。

とにかく今は書く以外に何もないように思える。ただ書くのみである。

社会科研究部

不安な時代です。明日原爆が落ちることさえ不可思議ではない現代です。混純、そして世は昭和元禄です。

そんな状況の中で、ある人は「三無主義」とやらに落ちつき、（無気力・無関心・無責任を「三無主義」と言うそうです。）ある人は、疎外感に落ちいってニヒリストを気どり、またある人は、マイホーム主義にまっしぐら。だからと言って、このような生き方が非難されなければならぬはずはありません。誰だって寂しいのです。何もわからないのです。寂しいからこそ「何か」を探そうとするのではないのでしょうか？　何もわからないからこそ、体当りしてみなければならないのではないでしょうか？

その手段として、まず「素直」にならなければなりません。「素直」とは、体制に順応することではありません。安易に信じることでもありません。偽りをつくり、受身の思考を押しつけてくる者はすべてのぞいて真実を探すことなのです。いくら無関心・無関係を宣言しようと社会とかかわらずにいられるはずはありませんし、また疎外されているなら、それを生み出した社会の状況をつかんでやろうと居直ってみたい気持はないのでしょうか。こんな気持を持った人間が何となく集まってきたのが「社研」なのです。この学校の中でもっともクラブらしくないクラブ・生活サークルと呼ぶほうがぴったりしたクラブ。こんな社研のなかで私達は「一九六八」をテーマとして、自分自身をとりまく現在の状況を考えてきました。そして今後のテーマも、「what is 1969?」として、常に自分自身をとりまく状況を向いかけていきたいと思っています。

灯サークル

現在、社会で大きな問題になりつつある「重症児問題」にもかかわらず、重症児の実体、いえそれどころか重症児ということばを知らない人すらいるのです。その人々に私達は「重症児」を知ってもらおうと思うのです。社会的地位のない高校生の私達に出来ることは高がしれています。けれども青春期において自分の持っているエネルギーを「重症児問題」にぶつけることに私達は意義を感じます。「重症児問題」を通じて我々は数多くのものを得ましたし、これからも得るでしょう。私達の活動が直接重症児問題の解決につながらなくても、そこで得た数多くのものが私達の為（将来の原動力というようなもの）になると思うのです。

そして文化祭を中心に活動し文化祭のテーマ「ボランティア活動（奉仕活動）」の研究を行ないました。ボランティアとは何か？。何故ボランティア活動が求められるのか？。高校生はボランティア活動を行うべきか？等について資料を参考にサークル員との討議により一応我々の考えをまとめました。

今の一番欠点は男子が一人もいないということです。女子というのはとかく感情に走りがち。重症児問題にとっては一番ダブーです。そこをセーブしてくれる男子が是非とも必要なのです。次にあまりにも惰性的になりつつあるということです。サークル員の仲がいいのはとってもいいことですけれど、それがあだとなって「なれあい」的なムードができてしまったようです。男子が一人ぐらい入部してくれたらサークル内の雰囲気はグッと違ったものになるでしょうが……。

（注）　歌ごえサークルは省略しました。

運動部

卓球部

活動日は週4回で、トレーニングと試合形式の練習が主である。試合は、五校対抗で連続優勝をなしとげ、その他の大会では二・三回戦位で敗れた。予算については、昨年度よりも四千円も減らされてしまった。それにピンポン玉があまりにも消耗するので、今年度はまことにきびしい現状であった。

クラブ委員会については、もっと委員会らしくして、自由にクラブが意見を言えるようにしてほしい。

ソフトボール部

練習は、週4回と他の日は、自由練習である。内容は、ソフトボールのごく基礎のくり返しを続けている。キャッチボール、トスバッティング、個人ノック、シートノック、フリーバッティング、ランニング、素振りなど。

試合は、公式戦に1回しか出場できなかった。この公式戦は都立大会のリーグ戦で、1日3試合という強行で行なわれ、3敗におわってしまった。公式戦の前に試合をしてみる必要があったようだ。試合という雰囲気になかなか、なじめなかったのと、チーム全体のまとまりにも欠けていたようだ。そして又、ルールもよく覚えられていないということもあった。

冬はシーズンオフなので、ボールから遠ざかり、ロードワークや柔軟体操などの地味な練習をして、来シーズンの体力を貯えるようにした。苦しいが精一杯やったつもりだ。

クラブ委員会については、連絡をもっと徹底してもらいたかった。

バレー部

練習は週5日間。内容は、キャッチ、スィング、パス、レシーブ、アタック、フォーメイション、サーブ等とフットワークを行なう。

試合結果は、6人制で7戦全敗。9人制では3勝4敗であった。

夏休みは、合宿において、体力強化練習を行ない、その後は、大会に備えての練習など

を行なった。

＜女子＞6人制を今年になって始めたために身のこなしがうまく身についていない。6人制の試合結果が全敗なのは、前述のことと試合に慣れていないためだろう。しかし、部内では、6人制に変えてよかったと思っている。今後の練習は、特にワンマンレシーブ、ローリングレシーブを強化したいと思っている。その他に、毎週1回でも、隔週でも、よいから練習試合をやって行こうと思う。

＜男子＞練習は、週4回、内容はサーブ、パス、アタック、フットワークなどが主で、夏休みおよび冬休みの合宿では、基本技術を完全にマスターするよう練習した。今後は、練習試合を中心にやっていきたいと思う。

それからクラブ委員長は、「一体何をやっているのか。」と言いたい。バスケットが屋内競技というならば、もちろん、バレーも屋内競技である。バスケットが体育館を使用できてバレーがなぜ使えないのか。不合理もはなはだしい。

体育館を使用したいと思っても頭を下げて頼まなくてはいけないなんて考えられない。

ワンダーフォーゲル部

練習は、週に4回ある。今年度の活動山行は、春のワンデリング（丹沢、鍋割山）新人歓迎会（奥多摩、大岳山）、ボッカ訓練（西丹沢、畦が丸）、夏期合宿（越後駒ヶ岳、中の岳）秋のワンデリング（奥武蔵、伊豆ヶ岳、武川岳―一般参加）、OB会、などをやった。

夏休みはトレーニング主体、冬休みはワンゲルの諸知識の吸収を主体として活動。

クラブ委員会については、委員長として、クラブ委員の積極的な参加がなければ、有名無実の委員会になってしまう。

今、ワンゲルの最大の悩みは女子部員の少ないことだ。ワンダーフォーゲル活動は男女を問わず楽しめるスポーツなのだから、どんどん入ってほしい。

今年度は、1年男子部員の活躍で充実した活動がつづけられた。

柔道部

練習日は、週4回。はじめに受身をする。柔道は自分が投げられなくては上達しないものである。それゆえに受身は大切である。次に打ち込み、つまり得意な技を何回もくり返しかけるのである。続いて受と取に別れてかかり稽古をする。これが終ると乱取りである。ここでは、もう先輩も後輩もなく自由に技をかけあう。そしてこの時に最も緊張が要求させる。さもないと大ケガをする。最後に寝技をして終わる。これが平均的な一日の内容である。

世田谷新人大会では、人数不足の為、団体戦では奮わなかったが、個人では優勝と第5位を獲得した。つまり、人数のことよりもっと重要なことそれはやる気である。柔道への情熱である。

テニス部

テニスは特に指導者が必要なスポーツだが今年は全日本出場の経験あるO・Bを含め、三名をコーチに迎えた。しかし男子新入部員は昨年の半分、女子は二倍以上の人数で一面のコートに花を咲かせた。

今年の試合成績は初夏の大会ではふるわなかったが、夏の城西地区大会では三十二本、秋の新進戦では五回戦まで進んだ。しかし試合で部員一人一人に言えることは〝絶対この試合に勝つ〟と気力が足りなかったということだ。精神面をもっと強くしなければ、と感じた。

クラブ内では、ミーティングが少なかったので部員相互の理解がなされず、色々と問題がおきた。これからはミーティングをふやして理解を深めたい。

来年度は、全日本出場を目標にがんばるつもりだ。クラブ委員会には、生徒会費値上げに積極的になってくれ、と希望する。

陸上部

練習は、週5日位で個人練習が主体である。今年度は都の大会のために、各人が専門種目に取り組んでいた。公式試合は2度しかなかったが、各人がよくやり、自己記録をのばした。来年は、もっと公式試合に出場したいと思っている。夏・冬休みはとくにきまった練習なはく、個人練習中心でやっている。

今後は、5月の大会の為に、記録をのばすよう練習をしていきたいと思っている。

剣道部

練習日は週3回。内容は、柔軟運動、フットワーク、打ち込みからかかり、稽古、地稽古、試合稽古などを行なう。

練習試合では、千歳高との団体戦で勝ち、千歳ケ丘高にも勝利をおさめた。また、明治百年記念大会では城西地区代表として出場し、個人で4回戦、団体で2回戦まで勝ち進んだ。

今では一年生の基礎が大体できてきたので今後は、わざの練習をふやして行き、関東大会ではベスト8にのこるようにしたい。なお剣道部は、部員25名、有段者も二段が5名、初段が10名を数え、25群中最強のチームを誇っている。

籠球部

○活動日

毎日（三日体育館、三日外）

夏休み中頃までは体力づくり中心、合宿から後は、試合形式の練習。

○今年度の試合結果

試合数　男子九回、女子十回

男子　六勝三敗

女子　七勝二敗

○反省

夏休みに休みの日があまりなかったので、最後の方は元気がなくなり、故障者も多くでた。

○今後の活動

練習　大会に備えて試合形式の練習。

試合　大会の為、練習試合を多くやるつもり。

○その他

今の予算では、満足に活動できる状態ではないので、もっとふやしてほしい。

Q　コーチは不必要ではないか？という声に対して。

A　やっている以上うまくなりたいし、試合に勝ちたい。

Q　大会に出ることは必要なのか？　クラブはただ親ぼくを深めることだけが目標ではないのか？　という声に対して

A　そう言う人は、自分達でクラブをやってみればよくわかるはず。勝利（特

に大会で）の感激を知らないから、親ぼくを深めるなどときれいごとを言ってみるよりも、勝つために練習をすれば自然とチームワークもできる。いいかげんな練習をしていて、親ぼくなどとは言えない。

蹴球部

練習は週4回だが、その内3回が、早朝練習。内容は、正確さ、速さ、強さを基本とする練習。コンビネーションプレー。

試合は、世田谷大会4位、国体予選・新人戦・練習試合などをたくさんやった。

夏休みは、日頃の練習量の不足をとりもどす為に、日曜以外の日は毎日行なった。その結果、世田谷大会においてよい成績をあげることができ、うれしくおもっている。

今後は、基本プレイを重視してよい高度な技術を習得し、試合をなるべく多くやりたい。なお3月には、部誌を発行する予定でいる。

ラグビー部

練習日は週5日間。内容は、パス、キック、タックル、スクラムなどの基本とコンビネーションプレイ。

試合では、関東大会予選、全国大会予選、に完敗。秋期リーグ戦に全勝。他、練習試合では、好成績をあげている。

大きな試合になると、もっている力を全部出しきれず、時にディフェンスにもろさがあったりした。

今後は、基本を確実にこなせるようにし、ディフェンスをしっかり練習したい。春の新人戦、関東大会を目標に、練習試合を多くやり、新人戦には全勝をしたい。

野球部

今年の野球部は、練習が非常に充実していたため、試合においてもなかなかの成績を残し、技術的にも大きな進歩がみられた。単なる「努力家」だけでなく、すぐれた野球センスの持主もいて、曲りなりにもノーヒットノーランを達成したゲームもあった。

しかし試合に於て、時々凡ミスを出し、それが、敗因につながることもあった。その点、まだチームプレイが徹底しておらず、今後の課題となるだろう。

公式試合では、支部大会に準決勝進出し、夏季大会に2回戦、秋季大会には代表決定戦にまで勝ち進んだ。今年度の全試合の成績は9勝5敗であった。

山岳部

一、活動報告

火・水　トレーニング

木　登山講座

土　自由活動

○山行

新人歓迎山行（西丹沢）四月

新人強化ボッカ訓練（三ッ峠）六月

夏山合宿（北アルプス）

七月奥秩父個人山行（金峰山）八月

○その他

文化祭参加　部誌「TURM」製作

このル・クールの山の紀行文を続んで下さい。

二、活動反省

○山行の質（レベル）が低下した。

○夏休みの自由活動がうまくいかなかった。

○文化祭がスムーズにいかなかった。

三、今後の活動計画

○練習内容を楽しくする！球技など。

○山行　春山合宿（八ヶ岳）三月下旬。

四、クラブ委員会について

○クラブ、学校、総務に対して強くなれ。

Q、不満は？

A、山岳が今の予算ではやってゆけない。金が欲しい。

Q、ワンゲルと山岳の相違は？

A、今のワンゲルは山岳のまねばかりしていてユニークさがないね。ワンゲルが部員をたくさんとっちゃうから悲しい。

体操

体操の好きな人は多いと思います。そこで私たちは体操部をこの学校につくろうと思い、現在、数人の者で体操を行なっています。が、器機体操の設備がないため活発な活動ができませんので千歳ケ丘や、先輩の紹介によって、日大桜ケ丘高校で練習をしているのが現状です。しかし皆楽しくやっています。顧問も寺本先生がやってくださることになっています。体操をやってみたい方は、是非とも私たちのところに来てください。

生徒会報告を終えて

まず、総務・評議会・各種委員会・クラブの責任者に、原稿用紙に活動報告を箇条書きで簡潔明瞭に数枚にまとめていただきました。そして一般生徒の皆さんにも二枚のアンケートを願い、そのアンケートよりの意見と我々とを持ち、各委員長の元へと出向きました。又、各委員会の方へはふたたび原稿用紙二枚に、今度は一つの文章を書いていただきました。（直、このインタービューは昨年の十二月に行なったものなので、前期のみになってしまいました。）

以上が松高の委員会、及びクラブの現状なのです。とは申しても、これですべてだった訳ではありません。はっきり申して、もっと多くの内容が、皆さんに聞いていただきたいものがありました。しかし、それでは何ページあってもたりません。いいえ、実際にページ数の関係でいろいろ計画していた内の、ほんのわずかしか載せられなく、涙をのんで諦めたり、責任者の方に書いていただいた文章をすべて載せたかったのですが、やはり、ページ上、やむを得ず修正させていただきました。又、インタビューも〃一日ではとても質問できなかった〃等ということは全然ないまでも、アンケートの中からほんの一部だけを引き出し、尋ね、そしてその中の、二・三個がやっと載ったというところのです。しかし、インタビューをしたというのは各委員会だけ、クラブの方はその余裕もなく、〃委員会中心〃という格好の良い名目の前に消えてしまいました。

しかしいくらページ数が足りないとはいえ、内容は薄くなったとは思いません。皆さんに考えていただく要素は、いくらでもふくまれていると思います。

――いかがでしょうか――

お金のおはなし

みなさんがご存じのように、現在、わが松高の生徒会予算はひどく少なく、委員会やクラブの活動が不活発な重要な原因となっています。

四十三年度予算は、二十五群の中でも一番低く、わずかに百十九万強なのに、明正が二百六十万をこえ、千歳・千歳ヶ丘が共に百七十万以上なのであります。ところがわが松原は、人数の減少、繰りこし金の減少のために、ここ数年来予算の減少をまねいています。加うるに、諸物価の値上りにより、個人負担がしにくく、かつ、全生徒に関係のある委員会に金を回わさざるをえづ、クラブの予算は削られつつあります。クラブの予算が削られた結果、委員会の予算が総予算にしめす割り合いが他の学校に比べて高くなりすぎているという意見が出ております。しかしながら、前に述べたように総予算の少い当校では、どこでも同じように必要な委員会の予算のパーセンテージが高くなるのはやむをえません。しかも、金額的にはたいして違いがなく、少いくらいなのです。

しかし、来年これ以上クラブの予算を少なくしたならば、現在でも最底必要な高体連加盟費さえ出してもらっていない運動部の中には、活動停止状態になるものも出るかもしれません。ところが、委員会もこのままではお手上げになるでしょう。特に、新聞委員会、生徒会誌編集などは今年ですらお手上げなのに、来年になったらどうなることやら。

以上、述べたような状態のため、数年来生徒会費の値上げが急務となっており、過去には予算のジリ貧より抜け出すべく、二〜三回、会費値上げが生徒総会にはかられ、一度は過半数の賛成を得たそうですが、いまだ値上げされておりません。

そのため、今年の総務としては、規約改正は後回しにしても値上げの資料を集めております。12月現在、資料を集め終り運動を起こすまでになっておりますが、値上げ担当の僕が試験や試験休みなどでだれており、ここのところちょっと停滞ぎみですが、とにかくがんばりますからみなさんも御協力ください。

行事レポート

文化祭

今回の文化祭は、以前のタテ割制から、ホームルームの活発化を目標とし、更にその上に生徒会の活発化も計ろうという主旨で行った。

その結果、ホームルームの活発化は計れたと言えるが生徒会の活発化までは達成出来なかったように思う。とはいうもののクラス制成功のウラには、体育祭との間が四日しかなかった事によって、時間に追われ〝やらなければしかたがない〟的な、必要に迫られたまとまりであったようにも思える。

また〝楽しかったからいいのでは…。〟という声もあったが、ただ楽しいだけの文化祭ではどうも……。

そこで実際に執行に当った文化祭執行委員に聞いてみました。

①実際に執行に当った立場から、今回の文化祭は満足し得る結果だったのでしょうか？

——あまり言えない。やはり各委員が委員会の仕事をしなかったから。一年生は委員会に出て来ない。二年生は中心となって色々と一年生のめんどうを見たり、自発的に執行に当ってくれるはずなのに、二年の協力が得られなかった。また首脳部によい人材がいなかったことも関係があったから。

②今回の文化祭の目的（クラス制）を達成できたと思いますか。

——ホームルームの活発化は出来たように思うが、生徒会の活発化は達成されなかったようである。

③実際にクラス制を行っての反省としては？

——果せたと思う。一年生の間ではクラスのまとまりができたと言うし、先輩の間でも先生のあいだでよい評判だったというから。でも、それがいつまでも続かなければやはり果たせたと言えない様な気もする。

④文化祭と体育祭との間が代休を含めても五日しかないという問題をどう思いますか。

またこれは例年の問題のようですが、なぜ体育委員会との計画の照合をしないのでしょうか。

——二学期には、修学旅行、中間テストの日にちがすでに決っており、十一月では寒すぎる、九月の上旬ではリハーサル期間がない。どうしても一ヶ月必要である。そして十月一日頃に文化祭を行ないたいと思った。だが、体育委員会や総務役員と話し合いの結果、今年は文化祭を先に行なうことになり、九月二十二・二十三日にした。

また体育祭は始め十月一日に予定されていたが、代休を取れず修学旅行をすぐあとに控えていたので、日曜日である九月二十九日に決定した。また、両委員会、及び総務も五日間は無理だと解っていたが、他に日がなかったのでやむを得ずこの日にちになった訳である。

⑤初めて経験する後夜祭に大いに期待していたがあまりにもみごとにそれを打ち砕かれてしまったという一年生の声がずい分聞かれるのですが。

——残念に思うのはお互い様ではないか！生徒がもう少し協力してくれると期待していたのだから。今までの努力がやっとむくいられると思ったのに、一般生徒よりどれだけ打撃があったことかを考えて欲しい！昨年もそうだった。

⑥たき火の際の手順の悪さはどうした訳なのでしょうか。それに歌集の利用方があまりよくなかったという点はどう思いますか？

――何しろファイヤーはここ二年間燃やさなかったのでやり方が解らなかったのと、みんながでたらめにまくら木の中に紙やベニヤをつっ込んだから。また、一般生徒はただ遊んでいるだけで〝遊んでいるなら手伝ってくれ〟と言っても知らんぷり。

歌集は歌声サークルに依頼したが、どうなったかは知らない。

確かにひどかったかも知れない。でも初めての経験であることだけは知っていて欲しい。みんな一生懸命やったのだから。

⑦実際予定はどのようにして立てたのですか。

――四月始めは委員長と話しをし、中旬に一年生対照のミーティングを開き、下旬に委員会を開き始めた。また夏休みはほとんど学校に来て、プログラムの編集、校正、予算、九月からの細かな計画をたてる等毎日のようにやった。委員に何度も電話をかけて、学校に出て来るように進めたが出て来るのは極少数、また委員長も出て来てくれなかった。いくら呼び出しても来てくれない。〝委員同志、何でもいいから話し合いをしてくれ〟と言ってもやってくれない。旧委員長がいったとうり、連体感を作らなければどうにもならなかったと思う。本当に極少数だけでやって、私の一人ずもうになっていたと思う。

⑧少し総務に頼り過ぎていたというのはどう思いますか?

――頼っていたというよりも、生徒会の最高機関である総務に協力を得たということである。学校全体を動かす文化祭を、文化祭執行委員会だけで執行することこそ、委員会の独走になるのではないか。

⑨生徒総会、及びそれ以前に開かれた文化祭反省座談会に於ての正・副委員長の無出席とはどういうことか。

――返答なし――

⑩総会後委員会を開きましたか? 質問要求もだいぶ出ていましたがそれに対しての返答をまだ執行側から聞いてないのですが。

――開いていない。開いて委員会が成立する可能性があるのなら開きます。また委員会を開くことによって意見の交換が出来るのならいつだって開きたいと思う。

⑪今後の文化祭をどの様にしたいと希望しますか。

――もっと自主性、独走性のある文化祭を生徒の意見を多く取り入れた松高独自の文化祭にしたい。

体育祭

まず体育祭は、生徒会の行事であるということを述べたい。(これは常任委員会規則、第十六条第一項体育祭の企画及び運営より。)体育祭は、体育委員会に課せられた任務である。

前記に掲げたのはなぜか。それは現在我々会員が望んでいるものとまったくかけ離れすぎてしまって、まるで学校のメンツの為に執行しているとしかとれない。

委員会も、委員会で、しかたがなしに惰性で活動しているにすぎない。学校側は他校との関係と、もう一つ、PTAへのサービスで行なっている。それでは会員の意志などは必要としない体育祭(この場合、他に表現が見当らないので。)となっているのが現状である。

問題はもう一つある。それは学校側が望んでいるのは、体育科の、体育授業の一貫であるから記録会もしくは陸上大会にする傾向である。これは、あくまでも体育祭とはよばな

い。これは明らかに記録会である。しかし、体育祭は、委員会が執行するが、その役者は会員である。その会員が、リクレーション的体育祭を望んでいるのである。それゆえある程度リクレーション的体育祭にすべきではないだろうか。これはあくまでも程度問題であるが。

委員会は、会員の要望を考慮し、委員会としての、種目なり内容を決定し、学校側とほぼ同等な立場で話し合い、互いに譲歩をすべきであり、一方的(この場合委員会)譲歩はありえない。この場合は、委員会すなわち生徒会員を無視し、学校側の思うような、記録会的体育祭(形式的な)になってしまうだろう。

記録会というものは、体育委員会において、陸上部主催、委員会後援という形でも出来うるのではないだろうか。記録会は一部生徒(陸上が得意な者)しか参加出来ない。体育祭という物は全員参加を目的としているのだ。

ここで体育祭とは何か考えてみたい。体育祭は前に述べたように、一に生徒会の行事である。二に会員の全員参加。三に縦横のつながり(縦はABC等に一・二・三年関係なしにわけ、横は学年別である。)を強める為。四に体力の向上を計る等である。ここにあげた一・二・三は体育祭としてのウィークポイントである。四は一応体育運動競技の目的とされているからあげたにすぎない。

体育祭とはという問題で重要なポイントは、なぜ体育祭なるものが起こったかである。

次に、体育祭はなぜ行なわなければならないか等あげればきりがなくなる。しかしこの諸問題に対して完全なる解答を出せる者はいないであろう。そこにおいて体育祭をとやかく言えないのではないだろうか。

次に金のことについて述べよう。この金の根元は父兄が出している物であるが、一応の所、生徒会費としての総予算の中から、体育委員会は八万円の予算を獲得した。その内、体育費として、七万一千円の予算を立てた。プログラム費は一万円、PTAから行事援助費として出していただいた。都の援助費は出ていない模様である。委員会として応援費を各組(赤・白・青)に八千円、計二万四千円の予算をとったが、各組とも(青組不明)ハチマキ代その他として、各クラスから一名約二十円〜三十円程度出費している。そうすると六千円〜九千円で、応援費はだいたい総額二万四千円〜二万七千円になる。約予算の二倍の金を必要としている。これでは、応援費を各組一万円〜一万五千円程度ぐらいにしなければならない。用具費において、七千四百七十三円の赤字が出てしまった。これはあまりにもむだな用具を買ったことではないだろうか。来年の予算は五千円〜一万円程度におさえるべきである。ほかの予算では他に問題点はない。

問題は、金はあくまでも生徒(委員会の会計)が保管し、また、活用していくべきである。ここの点から委員会は自立し学校側と対等に話し合えるのではないだろうか。

毎年、天下り的に決定していた慣習を打破することにより長年のマンネリ化も打破出来るのではないだろうか。

最後に体育祭がもし学校の行事とするならば、生徒会は体育祭に予算をとる必要はない。これは完全に規約に違反している。

これを機に体育委員会は会員を結束して我々会員の為の体育祭を執行しよう。

体育祭を我々の手にもどすことによって我々生徒会及び会員の自由がえられる。(しかしこの自由は高校における自由である。)

体育祭というものをもう一度考えなおし

て、松高だからこの体育祭ありといわれるぐらいの体育祭を執行しよう。

委員長は前年よりもよりBETTERな体育祭を望んでいる。しかし、その障害は多い。一つに会員の自覚（二・三日前にならないと動かない生徒が多い）が不足している。二つに学校という大きな障害である。その学校というものをどういうふうに併合し、生徒会という物をより強く打ち出すことこそ委員長、委員に荷せられた任務ではないだろうか。

弁論大会について（文化委員会）

I

君は、今何をやっているか。毎日七時頃起きて、八時半まで間に合うように学校に来る。そして、つまらない六時間の授業を受けて、少々ばかり学校に残って家に帰る。そして、テレビを少々見て、食事をして、勉強をして、そして寝る。そんな毎日を送っているんじゃないかな……。こんな毎日同じ生活で、何も不満を持たないのか。そう、持つだろう。持つね！　しかし、その不満をどこにぶつけようか。友達にぶつけるかい。親にぶつけるかい。先生にぶつけるかい。学校にはそんな場所はない。いや、一つあったぞ、それは弁論大会だ！

II

「弁論大会―ええ―こういう言葉の感じからも、これは、とっても古いものだと感じますな。だいたい弁論大会というものは、明治時代の高ゲタをはいた学生が、机をたたきながら、声をからしてやったものであって、現代には、時代遅れの感じがしますナァ。ハハハ。」ゲこれは、ある先生の言葉である。我々は高校に入った時に、必然的に自由という、ある意味ではやっかいな荷物を持たされる。

いつか倫理の時間に自由について話し合ったことがある。「自由というものは、あらゆるものを超越したものだけに、与えられる特権である。」とぬかしたやつがいた。たしかにその通りであるかもしれない。また、あるやつが言った。「自由とは、ある限られた束縛を忠実に守ってこそ得られるものである。」

この二つの意見には、倫社の先生は、しごく御満悦であった。しかし、私は御満悦ではなかった。たしかに、言葉上、道徳的に言えばそうかもしれない。だが、そんな色々な制限があって感覚的に自由だと思うのであろうか。本当に、ああ、おれは自由だ！と思えるのであろうか。

私はここで、自由を定義したいが、これはめったためたにむずかしい問題である。こういう複雑な自由を理想的に近い形を持って、君達が自由な発言を出来る場所がある。それは弁論大会だ！

III

ここで松高における弁論大会の歴史を紹介しよう。

弁論大会の一番最初の形は、弁論術の向上を目的とする会であった。クラスから数人の弁士が出て、それぞれ弁舌することを原稿に書き、担当の先生に見せて、弁舌出来るのである。場所は体育館を使って、H・Rの時間をつぶし、強制的に生徒を出席させるやり方であった。各クラスごとの対抗とし、審査員は先生と文化委員とが務め、優勝者にたてと表彰状を渡していた。

昭和四十二年。例年の形を破らなければならないことがもちあがった。この事件の始まりは、弁士と担任の先生との間で起こったことが始まりである。

事件を説明すると、担任の先生に自分の原稿を見せるのをこばんだ為に起きた。その頃高校生の政治活動が、学校当局で問題になっていて、「ベトナムに平和を」というワッペンをカバンにつけることを、学校当局が禁止したほど、高校生の政治活動に神経質になっていた。そんなことがあったから、ベトナム戦争について話す弁士や、政治について話す弁士は原稿を見せて、話題を変えさせられることをおそれた。そこで学校側は、弁士が出場をこばんだと見て、弁論大会を中止とした。

ここで大いに怒ったのは、文化委員会。文化委員会主催のこの会を、学校側と弁士のいざこざで中止されてはこまると思って、これからもこんなことが起こらないように、弁士と学校側を和解させる為に。話し合いを行ったのは学校側が弁士に対する検閲のことであった。学校側の意見によると、学校が生徒を教育するのは、ごく当り前のことである。法律的にも高校生の政治活動は禁じられている…ということであった。弁士側の言い分としては、我々の言論の自由を認めてくれたということだった。

ここで文化委員会は弁論大会に対する一つの見解を出した。それは弁論大会というものは、自分の持っている意見を自由に、なるべく多くの人に聞いてもらう意見の発表の場であるということだった。

そこで我々文化委員会は、なるべく理想の形に近い弁論大会を行おうと、昭和四十二年・四十三年と生徒ホールで放課後、傍聴者は自由参加という形で、弁士もまた、自由参加の形をとった。

IV

そして、我々文化委員会としての理想の形は、全く自由で、（検閲なし）なるべく多くの人に、（強制参加）体育館で弁論大会を開くということだ。我々文化委員会は、常にこの形を課題として努力していきたい。

都立松原高校図書館蔵書

学校内

〝自由について〟のアンケートから

生徒会誌編集委員会

古くは〝言論の自由〟、近代に至っては〝高校生の政治活動参加の自由〟とまあ、自由の範囲はバッチリと広い。それでいて、私達にとって、非常に身近な問題でもあるのです。その広い自由の世界、私達はどの位のものと考え、知っているのでしょう。いえ、私達は自由がわかるなんて大それたことを言ってはいけないかも知れません。それほど自由の世界は広く、またつかまえにくいものなのです。でも私達は、松高生の、最も身近な問題を取り上げ、その中に潜む身近な自由を考えて見ました。

身近なものといいましたが、その前に、自由について大ざっぱに聞いてみました。

○ 自由とは何ですか？

まずアンケートの結果をみてみましょう。

多いものには——

・誰にも束縛されないこと。
・干渉されないこと。
・ある範囲で思いのままのことができること。

等三項目が圧倒的でした。それに準ずるものとして——

・全くのフリー
・死＝自由
・心の平和
・平等ということ
・個人に於ける解放感

このような自由とは、干渉、束縛もなく、したいことをする、ということになりそうです。しかしそれでは、我ままというものに変わってしまいそうです。したがって、それにもあるわく——義務とか、責任——があるのではないでしょうか。

また少数意見でしたが——

・独立。
・理性を心得た上での気ままさ。
・義を果した上での、制約を受けない生活。

等があり、変ったところでは、「幻覚」というのがあり、理解に苦しみました。

○ 自由とはどんなイメージですか。

（色・形・所在場所について）

イメージとしては——

・広い高原
・鳥
・海
・戦争

めずらしいものでは——

・四次元
・フランス国旗
・花
・だらく

等がありました。

広い高原・海等は、ただ単に何もなく広いということに自由を感じ、鳥は大空を気ままに飛ぶということから来ているのでしょうか。となると、自由と自然との関係も、浮び上ってきます。が、戦争とはどういう意味なのでしょうか。

色では——

・青　十八％
・白　十八％
・ピンク　十六％
・緑　十三％
・赤　十一％
・黄　七％
・黒　四％
・その他　十三％

その他の中には、オレンジ・灰色・鉛色・透明なものなどがありました。自由の色は色彩の明るい色となるようです。

形としては

・円形　二十八％
・無形　二十四％
・無限な形　二十四％
・ハート形　四％
・その他

その他の中には、四角形・ピラミッド（四角すい）・三角がありました。

場所というと——

・心の中　二十五％
・空　二十二％
・雲の上　十三％
・四次元　十％

その他の中には、自分から離れたところ、空間、宇宙がありました。

あくまでもイメージからの意見でしたが、実際には、もう少し私達の身近にもあるのではないでしょうか。

それでは〝自由〟には直接関係はありませんが、私達高校生にとって、もっと身近なものに移りたいと思います。

では私達の毎日受けている授業から。

○ 好きな授業・嫌いな授業

好きな授業

1 なし　6 現代国語
2 数学　7 美術
3 リーダー　8 世界史
4 体育　9 音楽
5 グラマー　10 倫理社会

嫌いな授業

1 リーダー　6 世界史
2 数学　7 生物
3 グラマー　8 日本史
4 物理　9 地学
5 古典　10 地理

ここでおもしろいことは、リーダー・数学とも好きと嫌いの両方で上位にいるということです。数学や英語は人によって好き嫌いが相当あるということでしょうか。が、さすが美術・書道・音楽の選択科目は嫌いの組の最下位。又特に傾向が表われない科目としては、保健・家庭一般・ホーム・ルーム。

授業の好き嫌いは、個人個人の成績から生ずるものか。それとも先生によって生ずるものか……。

○ 落第を考えますか

・当然考える。　七十七％
・別に考えない。十三％
・その他（あきらめている。）十％

こんな問題聞くだけヤボ。誰でも一応は、考えていること。とはいえ、別に考えない人もいる。あきらめている人、頑張って下さい。

○ 大学へ行きたいですか。

・行きたい。　七十四％
・行きたくない。十八％
・検討中。　八％

八十％近くが行きたいと答えている。これは現代の流れのせいでしょうか。誰もかれもが大学へ行き、ゲバ棒かついで大学奮争。いっそ高卒で就職した方がずっと……。

○ 学校は楽しいですか。

・楽しい。　五十八％
・楽しくない。三十五％
・何とも思わない。七％

楽しいという人が、六十%未満とは思っていたより少なかった。楽しいという中に「授業以外なら……。」「充実はしていないが、まあまあ。」というのもあり、チョッと「勉強が楽しい。」というのは。見当らなかった。楽しいという理由として——

・ 友人がいる。
・ のんびりしている。
・ クラブが楽しい。
・ 何となく楽しい。

等がありました。

「生徒会をやっているから楽しい。」というたのもしい意見もありました。しかし、全体的に消極的な意見が多く、「何とも思わない。」という意見があったことは見逃せないことです。やはり大学の予備校化しているのでしょうか。

楽しくないという意見のうちでは——

・ 学校の雰囲気が悪い。
・ 意欲がない。
・ 平凡すぎる。
・ ピチッと決まらない。

これは各自反省する余地があるでしょう。前記の楽しい理由の「のんびりムード」が、反対の楽しくない人達の主な理由となっているところ等、むづかしいところです。

私達の身近なもので、個人的なことに関しては。

○ あなたは、何をしている時が一番幸わせですか。（物事をしていて、幸わせだということは、〃やはり自由に好きなことをしているからではないか〃という考えの上での質問です）

・ ある欲求が満たされている時。　二十一%
・ 何かに熱中している時。十五%
・ 安心感を得ている時。　十五%
・ 不安のない時。　十四%
・ 解放感にひたっている時。十一%
・ 身心が快いとき　九%
・ 将来に対して希望のある時。六%
・ 心を豊かにしている時。　三%

この結果は、何か熱中をしている。要するに、欲求を満たしている時に幸わせを感じているというものと、それとは正反対の、今の生活から逃避している時というものの二つがあります。後者の方は、生活に疲れ切っているという感じが、しないでもありません。項目別では——

・ 寝ている時。
・ 夢を見ている時。（夢想にふけっている時）
・ 何かに熱中している時。

と、やはり、欲求が満たされていることと今の生活からの逃避の二項目に、はっきりと別れてしまいました。

特にこの場合、寝ている時というのが、群を抜いて多いようでした。がそれは、明らかに逃避の姿勢といえるでしょう。

○ 今一番欲しいものは？

・ お金　二十一%
・ 時間　二十%
・ 恋人　十一%
・ 自由　五%
・ 親友　五%
・ 本　五%
・ その他（幸福・充実した毎日・宇宙・愛・大学の合格通知等）

時間とか自由という、抽象的なものから、お金・恋人・本という様な現実的なものまで出ましたが、やはり、時開にしろお金にしろ〃自由に使えるもの〃というのが基になってきているのではないでしょうか。

○ 今一番したい事

・ 旅行　二十%
（内　世界旅行　七%）
（単なる旅行　十一%）
・ あそび　十三%
・ 恋愛　九%
・ なんでもやりたい。　七%
・ 入試にパスしたい。　三%
・ その他
（松高の先生の人心一新・本能に従って生きたい。もう一度二年に戻りたい。学校を休みたい。死んでみたい。みんなと話し合いたい。デモ行進をしたい。殺人・ムダ使い。等）

その他の中では、どうしてもできないから、良心的なものへの〃反発的行為〃をしたいというのが目立ちます。しかし、三年生でしょうか、入試にパスしたいという現実的、切実な願いも、みのがす訳にはいきません。

いくら身近なこととはいえ、〃自由〃というものは大きすぎます。そういくつもいくつも書ききれませんので、この位で打ち切り、もう少し大きい〃自由〃というものを考えてみましょう。

○ 「自由ダ！」と感じたことがありますか？

・ ある　四十七%
・ ない　五十%
・ わからない　三%

驚いたことに〃ない〃と答えた人が、半分もいるのです。それほど私達には、自由がないのでしょうか。自由というものを、そんなにむずかしく考えなくとも、何かみのがしていないでしょうか。

半分を割ってしまった〃自由ダ！〃と思った時の内訳は——

・ 社会と断絶された時。　十三%
・ 幼児の時。　十三%
・ 学生である時。　十三%
・ 自由でない人のことを聞かされる時。　十一%
・ いつも思う。　五十%

他の意見としては、学生に自由はない・勉強によってない・自由ということ自体に疑惑がある等とさまざまでした。

○ 日本は自由ですか。

自由な国はあると思いますか。

アンケートの結果では、あるとないとが半々ぐらいでした。あると答えた人達の内で、ではどこにあるのかという様な質問には、ほんの少数しか答えず、その答も、アメリカ・スウェーデンとだけで理由がなかった。

ないと答えた人達の中でも「日本は……」という問いには、自由と答えている人が以外と多かった。

○ 自由のためには戦えますか。

・ 戦える　二十一%
・ 戦えない　三十五%
・ 戦いたい　二十六%
・ 解答なし　十八%

戦争も何も知らない私達、あまりに平和すぎて、自分の死をかけてまで、自由を勝ち取るという考えがピンとこない様です。

こんなことも、私達、今の若い人に欠けている点ではないでしょうか。

実際、私達の目前で行なわれているその一連の問題を取り上げると、アメリカの黒人問題が上げられるでしょう。

そこで二、三問いかけてみました。

○ アメリカ等の人種差別をどう思いますか。

・ 反対　　九十二%

・ しかたないと思う。八%

黒人とても同じ人間、差別等もってのほかという考えが、絶対多数。しかし、仕方ないというアキラメ調のことばが出て来たのは、残念でした。

○ もしあなたが黒人だったとしたら、自分達黒人の自由について、何を考え、何を行ないますか。

これには、ほとんど誰もが、抗議し、積極的に自由確保に行動を起こすとありました。中には、その立場にならないと解らない・行動したいけれども、自分に行動力が伴うかどうか心配という意見も一部ありました。が、その立場に立ったら、最終的にはみんな行動を起こすのではないでしょうか。

最後に——

○ 〃自由〃は人間にとってどうあるべきであろうか?

・ 他人に侵されざるもの。

・ 誰もが平等に持つべきもの。

・ 神的な人間の窮極の希望。

・ 失なわれつつある人間性を、取り戻すことのできるもの。

・ 自覚によってのみの判断、認識。

・ 何の観念にもしばられない。

自分達で発案したことながら、少しむづかし過ぎて思う様にまとめられませんでした。が、これをきっかけに、間近に控えた春休みにでも〃自由〃というものを、皆さんに、再び、もっと掘り下げて考えてみていただければ幸いです。

大長編 編集物語

恒例のブンドリ大会の幕が、切っておろされました。我らル・クール有志は、母上から極秘伝来〃うばいとり戦法〃なるものを学び、予算獲得にいどみました。が、〃涙戦法〃にあえなく惨敗し、一円玉三万個なるものをどこかへ、うばわれてしまいました。おまけに'68流行〃ナニの目〃で、見られるしまつとあいなりました。

イヨーッ！
ペペン、ペンペンペン……

ころは四月となりにけり
隣の城の花びらが
チラリチラリとふる中で
南蛮渡来の
オリエンテーション開かれり
御大将自ら参じ
涙ながらに訴える
「忍法皆伝
〝皆、こいこい〟」

時は流れて〝全員集合〟
見ればがん首そろえた傲慢女
あいやまたれィと思えども
昭和元禄ここにも来たり

いじめられつついじめつつ

〝ナニのマナコ〟ものとせず
一心一体ムチうって
ナニの姿になりにけり
水の誘惑ふりきって
夏将軍（？）に仁王立ち

さあて　さてさてアキがきた
それまたかけて秋が来た
いくら忍者といえれども
辛き特訓耐えかねて
夜逃げするものチラホラと
しかし大将あきらめぬ
居残り数名ひきつれて
松原城の文化まつりに至ったり
なんせごたごたありンした
そこで御大将と古カブは
慰安旅行とあいなった

行くは都か奥の細道
二つに別れて
えっちらこっちら

そこで居残り数名は
祭日返上　夜間奉公
右へ左へ大奮闘
御大将の後しまつ
「この気持　誰が知るらむ」

そして帰城となりにけり
ずらっと並んで御出迎え
山と積みたるみやげもの
祝宴開いてたいらげり
「ああ　多いことは
良きことなり」

雪はどっちゃり降らねども
とにかく冬となりにけり
狭き赤点門突破して
宿下りとあいなった

ところがどうして非常命令
〝休んじゃ――ダメ〟
おお、悲しきこのことば

師走の風の吹く中を
里よりいでて
ひねもす城ですごしたり

松かざりをも横目で見
好物〝ナニ〟をも断ち切って
苦心惨憺いたしたが
お上にゃ通じぬこの思い
せめて民衆の支持あらば……

何はともあれ
まとまりつ
残るは

チョッン！

〝いざ、印刷所――！〟

ペペン、ペンペンペン……

忍法ル・クールつづり

一巻の終り

編集後記

御聞きくだされたし

みなさ――ん、聞いてやってください！
この一年ル・クール委員がどんな思いですごしたか。
まず第一にもちろんマネーのこと。
物価値上りのおりから、こちらにも波紋がおしよせ、用具を節約し値切り値切っても赤字となるしまつです、(誰です。逃げ出すのは。〝赤字〟ですよ。〝赤点〟じゃないのよ。)
いくら他に比べ予算が多くても事実、必用費なのです。
そして第二に、それによって私達に荷せられる任務の重さ。
「予算ばかりとって、ちっともおもしろくない。」
なんて言わないで。私達はこの細身（？）のからだで懸命に努力したのです、休日も返上し、夜間奉公に内職にと努めたのです。（抜群の編集ができれば今にでも、一本立ちしていけるわよ。)それなのに文句ばかりならべるのは、あまりにも酷というものです。
でも、愚痴はやめましょう。
私達は、なんとかル・クール17号なるものを作りあげました。しかし、私達は枕を高くして寝ることができません。なぜなら、今後のことが心配なのです。
文句を言う人は沢山います。しかし、意見を言って協力してくれる人は少ないのです。
「かってにやれ、僕には関係ない。」と、いう人が、あまりにも多すぎるからなのです。
皆さん、聞いてください！
ル・クールの悩みを。
そして考えてください。
協力してください。

ル・クールを！

委員紹介

W・Hさん
御大将機動隊より楽じゃない
あっちゃこっちゃでお声がかかる

T・Sさん
この一年一生懸命やりました
食べたり飲んだりサボッたり

T・Nさん
悪友とコンビを組んで御活躍
いったいどっちが誘うのか

S・Tさん
おはなしは人より遅れてワンテンポ
あとかたづけのみトップでおえる

B・Kさん
いつの日もいとわびしきは小間使い
北風きりつつイダテン？走り

O・Tさん
威勢よくおつかい当番なりにはしたが
行ったら最後帰ってこない

R・Bさん
春すぎて夏きたるらし松高で
はだみはなさぬコートとバック

N・Sさん
ただひとり時計の針とにらめっこ
おうちは遠き高尾のふもと

M・Nさん
返事は間ぬけでねぼけちゃいるが
御仕事バッチリやりました

F・Hさん
ファイトファイトの一年間
ハイ、ハイ、ハイと歯切れよく

W・Mさん
クラブ、ル・クール、マネージャー
頑張りましたミルクちゃん

S・Lさん
かけもちで極秘極秘の半年間
えっちらこっちらヨタヨタと

最後まで残らず読んでくれた
あなたに　ひとこと
〝ひま人クラブへどうぞ！〟

編集長より
あなたに　ひとこと
〝読まないとひどいよ！〟

思えば……
この一年間、いろいろなことがありました。
私たちは、けして忘れません、あの苦しかったことを。
私たちは、いつまでも覚えています。
このル・クールがあるかぎり。
ほんとうに
みんな楽しい人ばかりでした。

編集委員長　福田　俊之
編集委員
二年　石坂　淳夫　児玉　朋子
　　菅野　玲子　小林　愛知
　　小島　秀隆
一年　桐生　玲子　高瀬　桂子
　　小池　朝美　人見　文子
　　杉本　修三　村岡　尚夫
　　伊藤　澄子
表紙　村井　龍
カット　加藤　謙二
顧問　斎藤　仁男
ル・クール第十七号
昭和四十四年三月三十一日発行
編集　松原高校生徒会誌編集委員会
発行　東京都立松原高等学校生徒会
　　東京都世田谷区桜上水四―三―五
印刷　日昇印刷株式会社

都立松原高校図書館蔵書

編集後記

御聞きくだされたし

みなさん――、聞いてやってください。この一年ル・クール委員がどんな思いですごしたか。

まず第一にもちろんマネーのこと。物価値上げのおりから、こちらにも波紋がおしよせ、用具を節約し値切り値切ってもあっとゝなるしまつです。（誰です。逃げ出すのは。"赤字"ですよ。"赤点"じゃないのよ。）いくら他に比べ予算が多くとも事実、必用費なのです。

そして第二に、それによって私達に荷せられる仕事の重さ。「予算がかゝって、ちっとゝもおもしろくない。」

なんて言わないで。私達はこの細身（？）のからだで懸命に努力したのです。休日も返上し、夜間準会に内職にと努めたのです。（最群の編集会にでもれば今にでもゴー本立ちしていけるわよ。）それなのに文句ばかりならべるのは、あまりにも酷というのです。

でも、愚痴はやめましょう。

私達は、なんとかル・クール17号なるものを作りあげました。しかし、私達は枕を高くして寝ることができません。なぜなら、今後のことが心配なのです。

文句を言う人は沢山います。しかし、意見を言って協力してくれる人は少ないのです。

「かってにやれ、僕には関係ない。」という人が、あまりにも多すぎるからなのです。

皆さん、聞いてください。

ル・クールの悩みを。

そして考えてください。

協力してください。

ル・クールを。

委員紹介

W・Hさん
御大将機動隊より楽じゃない
あっちゃこっちゃでお世話がかかる

S・Tさん
おはなしは人より遅れてコンテンポ
あとかたづけのスピッグでおえる

B・Kさん
いつの日もいとわしきは小間使い
北風きりつつイダテンの走り

O・Tさん
威勢よくおつかい当番なりにはしたが
行ったら最後帰ってこない

R・Bさん
華すきで夏きたらし忘れて
ただみなさまのコート・ベック

N・Sさん
ただひとり時計の針とにらめっこ
おうちは遅き高層のふもと

T・Sさん
この一年一生懸命やりました
食べたり飲んだりキポンだり

T・Nさん
悪友とコンビを組んで御活躍
いったいどうなる勉強のか

M・Nさん
返事は間ぬけでねばっちゃいるが
御仕事バッチリやりました

F・Hさん
ファイトファイトの一年間
ハイ、ハイ、ハイと働切れよく

W・Mさん
クラブ、ル・クール、マネージャー
頑張りましたミルクちゃん

S・Lさん
かけもちで優優秘の半年間
えっちらこっちらヨタヨタと

最後まで残らず読んでくれた
あなたに　ひとこと

"ひま人クラブへようこそ"！

編集長より
あなたに　ひとこと

"読まないとひどいよ"！

思えば……
この一年間いろいろなことがありました。
私たちは、けして忘れません、あの苦しかったことを。
私たちは、いつまでも覚えています。
このル・クールがあるかぎり。
ほんとうに
みんな楽しい人ばかりでした。

編集委員長　福田　俊之
編集委員
二年　石坂　淳夫　菅野　玲子　小島　秀雄　小林　愛知子
一年　桐生　明美　小池　修三　杉本　澄子　伊藤　謙二　村井　瞳　村人見　桂子　高瀬　里子　児玉　尚美　岡
表紙　カット　加藤　謙二
題字　斎藤　仁男
ル・クール第十七号
昭和四十四年三月三十一日発行
編集　松原高校生徒会誌編集委員会
発行　東京都立松原高等学校生徒会
印刷　日昇印刷株式会社　東京都世田谷区桜上水四―三―五

都立松原高校図書館蔵書

♂♀

東京都立松原高校生徒会